The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中世軍記物語における女性と仏教 : 苦悩と救済の様相をめぐって
Author(s)	Ruenpirom, Kanapat
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/33844
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

平成二十五年度　博士学位申請論文

中世軍記物語における女性と仏教―苦悩と救済の様相をめぐって―

ルーンピロム・カナパット

目次

目次 ―― 1
序章 ―― 2
第一章　延慶本『平家物語』における二位殿・平時子―平家一門の後世救済に対する役割― ―― 9
第二章　延慶本『平家物語』の平重衡をめぐる女性たち―重衡救済における役割― ―― 27
第三章　延慶本『平家物語』における平維盛北の方―愛する者を救済する・愛する者に救済される存在― ―― 44
第四章　学習院本『平治物語』における常葉―母子救済の様相をめぐって― ―― 63
第五章　真名本『曽我物語』における曽我兄弟の母―敵討ちへの思いによる苦悩と出家の様相をめぐって― ―― 84
第六章　真名本『曽我物語』における大磯の虎―愛執と女人往生の様相をめぐって― ―― 107
第七章　真名本『曽我物語』における北条政子―繁栄と救済の様相をめぐって― ―― 123
第八章　田中本『義経記』における静―権勢による苦悩と諦観の様相をめぐって― ―― 146
終章 ―― 164
初出一覧 ―― 170

序章

本論文の眼目は、中世（鎌倉時代～室町時代）軍記物語における女性たちに対する仏教的な救済の様相、および女性たち自身が愛する者のために果たす役割を明らかにするところにある。そのために、女性の苦悩の様相に着目して、その克服の過程を考察する。

『法華経』提婆達多品が日本社会に流布した頃、女性は罪深く、五つの障りをもつ者とされていた。[1] また、中世においては、法然著『無量寿経釈』に記される「内に五障あり、外に三従あり」や、『平家物語』「六道之沙汰」章段の「忝く弥陀の本願に乗じて、五障三従の苦しみをのがれ」るために修行に励むという建礼門院の言葉に見られるように、三従[2]という言葉が加えられた。この三従は五障とともに用いられる語で、女性は障りが多い上に行動の自由もなく、仏道修行は不可能な存在とされる。[3] このように、女性は五障三従によって男性より劣った存在ではあるが、仏道に帰依すれば男性に変じて成仏できる。牛山佳幸氏と平雅行氏の指摘によれば、そういった女人成仏や女人往生の思想は平安時代の仏教界に浸透しており、法然[4]をはじめ、鎌倉時代の新仏教の開祖たちはその思想を継承しつつ、発展させていった。[5]

では、戦乱の多い、過酷な中世において、仏教は戦乱の渦に巻き込まれる彼女たちにどのように救済の手を差し伸べているのか。また、三従の道によって彼女たちは妻母としてどのような役割を与えられているのか。中世における女人救済思想の一面、および妻母としての役割を探るために、本論文では当時の軍記物語に描かれる女性の苦悩とその克服の様相を取り上げ、検討する。

仏教と軍記物語における女性の苦悩をめぐって、先行研究が着目するのは、愛別離苦である。例えば、中世軍記物語の中で最も注目される作品とも言える『平家物語』は、無常観を主題として語りつつも、断ち難い夫婦の愛情、親子の情も色濃く描き出している。その中で、女性が夫、子供との死別に遭遇した際に、彼らとの再会を祈願しながら、出家、あるいは入水自殺を決意するという場面が散見する。平野さつき氏[6]は愛する者と別れる際に祈願する、来世でひとつ蓮の上に生まれるようにという表現に着目し、女性たちにとっての往生の意味について、「『平家物語』の女性たちが思い描いた往生は、必ずしも成仏を意味していないように思われる。（中略）彼女たちにとって「往生」とは、正に「往きて生れる」来世のことであり、愛する人との再会を意味したのである。言いかえるなら、彼女たちが超

克すべき存在苦として認識していたのは、愛別離苦のみであって、これを克服できる場として極楽があったと表現されているのである」と論じている。

以上の平野氏の指摘から、来世でひとつ蓮の上に生まれるようにという表現を通じて、物語は現世の無常を観じて成仏したいという彼女たちの願望を示すというより、愛別離苦を克服しようとする姿を強調していることが窺われる。一方で、彼女たちはひとつ蓮の上に生まれるようにと祈願したにもかかわらず、後日談では家の滅亡や、子を捕えられるなどの様々な苦悩に追い込まれる、必ずしも夫との再会を目指して往生へ向かおうとする様子が示されていないことにも注目すべきである。後日談は夫の死による苦悩を重視せず、神仏の利生に帰依して子を戦後処理から守る、つまり、子に関する苦悩を克服しようとする母としての姿を前面に打ち出している場合が多く見られる。このように、平野氏が取り上げた、夫との再会のために往生したいという願望、あるいは、夫を亡くして頼れる人がいないため、神仏に祈願して子を守ろうとする女性の行動から見ると、物語は夫婦、親子の恩愛に重点を置いて女性の苦悩の原因として描くと同時に、彼らの来世救済・現世救済における役割を果たし、苦悩を積極的に克服しようとする女性の様子を示していることが窺われる。そうすると、軍記物語における女性の救済を考察するにあたって、多くの先行研究が注目する出家の場面や臨終正念、すなわち妄念なく往生を遂げる最終場面の検討だけでは不十分だと考えられる。[7] 彼女たちは夫、子の現世救済・来世救済における役割を果たしたことによって苦悩を克服できた点から見るならば、女性の救済は出家・往生場面に限らず、愛する者のために役割を果たして苦悩を克服する過程にも見出すことができるのではないか。

以上の問題意識から、本論文では、中世軍記物語に登場する八人の女性を対象として、苦悩の様相とその克服に着目し、彼女たちに対する現世救済・来世救済の様相を明らかにすることを目的とする。本論文が対象とする女性は武将の妻や母としての役割を与えられる人物である。本論文の構成および各章の概要について、簡略ながら以下に示しておく。

第一章　延慶本『平家物語』における二位殿・平時子―平家一門の後世救済に対する役割―

二位殿は、夫平清盛の出世により繁栄を得て恵まれる女性であるが、物語は二位殿の栄華を極めた様子より、平家の没落に立ち向かう姿を重視している。本章では、まず清盛の死後、平家における二位殿の立場を考察する。その上で、夫、子との離別および、家の滅亡による二位殿の苦悩の様相を検討しつつ、滅亡時における二位殿の態度を論じる。さらに、苦悩の克服として、二位殿の遺言及び「応報観」と、平家の鎮魂救済との関わりを考えることとする。多くの先行研究は、平家の鎮魂救済という構想を考察する際に、建礼門院だけが、一門の亡魂を浄土へと導く役割を果たすものとして注目しているが、本論文は、二位殿の遺言および「応報観」の存在によって、彼女は恨みの解消・平家一門の救済の主題を支える存在として位置づけられていることを指摘したい。

第二章　延慶本『平家物語』の平重衡をめぐる女性たち―重衡救済における役割―

平重衡は、寺院焼失の重罪により苦しみ、後世救済を求め、周囲の人々から同情を受け、後世菩提を弔ってもらった、いわゆる救済される存在として造型されている。本章では、この重衡救済の設定に基づき、物語は彼をめぐる北の方と内裏女房と千手前の三人の女性それぞれにどのような役割を与えているのかを考察する。先行研究では、三人の女性が重衡の苦悩を聞く・語る形で重衡救済と深く関わっていることが指摘されているが、本章は、女性の役割を個別に考察した上で、北の方と内裏女房は夫婦の恩愛による妄念を解消する役割、千手は罪に苦しむ心を慰める役割を与えられていることを指摘したい。特に、延慶本は重衡の後世救済という重要な役割を北の方のみに果たさせることに着目する。又、先行研究で重視されていない、彼女たち自身の苦悩の克服の様相についても検討する。

第三章　延慶本『平家物語』における平維盛北の方―愛する者を救済する・愛する者に救済される存在―

平維盛北の方は、都落ちの際に夫と離別する女性、又、夫の死後、息子六代が源氏側に渡され、不安や離別に苦しんで不幸を背負う女性として造型されている。本章で着目したいのは、維盛の最期の場面に表される、妻子を浄土へと導きたいという維盛の意志である。この点を考慮すると、従来の先行研究で指摘されてきた、北の方は他の女性の登場人物のように、単に男性から後世救済を求められる存在

としてだけではなく、夫に救済される存在としても造型されていると考えられる。こうした位置づけによって彼女の特質が確認できる。又、愛する者に救済されるという北の方の造型は、女人救済の構想を提示するために作り出されたのか、それとも物語の別の意図から生じたものなのか、という問題点を明らかにする。

第四章　学習院本『平治物語』における常葉―母子救済の様相をめぐって―

常葉は、夫源義朝が敗死した後、源氏残党の探索から逃れるために、三人の子供を連れて雪の中を逃亡する。又、彼女の母が平家方に捕えられたことや、子の命を犠牲にして母を助けようと決断することにより、幾重もの苦悩を抱え込んだ女性として描かれている。従来の先行研究では、『平治物語』諸本の本文異同により、母子の悲哀と観音救済を重視する学習院本の姿勢がすでに指摘されている。そこで、本章では、従来の先行研究に基づき、学習院本における常葉の苦悩とその救済の様相を、描かれ方を通じてさらに追究する。学習院本と金刀比羅本における常葉譚の描かれ方を対比して検討した結果、学習院本は常葉の悲劇性を打ち出して観音利生と結びつける際に、対比の表現方法を利用していることが確認できる。このように、対比表現を利用したことによって、母子の悲哀と観音救済を丹念に描き出そうとしている学習院本の独自性を見出すことができる。

第五章　真名本『曽我物語』における曽我兄弟の母―敵討ちへの思いによる苦悩と出家の様相をめぐって―

曽我兄弟の母は、暗殺された夫河津助通と死別し、その後、父のために敵討ちを果たした子供を殺される。先行研究において、母のかつての命令は兄弟の敵討ちへの思いを生み出す原因として注目され、また母の罪を示すものとも捉えられている。しかし、兄弟の敵討ちを止めようとする母の言動が繰り返し描かれているため、母の命令は兄弟の復讐心を煽るものとして機能しているのか、再検討する。苦悩の様相の他に、出家願望を遂げようとする母の行為に着目して、出家は母にとってどのような意味を持っているのか、往生場面以前に置かれる、兄弟の道行を辿る場面および箱根山の別当と対面する場面において、母の心境はどのように変化して悟りに達したのかを明らかにしたい。本章では、母の悲哀の原因は先行研究の指摘のように愛別離苦や兄弟の敵討ちへの思いだけでなく、弟を勘当したこと、特に兄弟の敵討ちを止められな

かったこと、つまり自らの行動への後悔の念にもあることが確認できる。そういった後悔の念、それによる悲哀こそ発心へ導くものとなっていることを指摘する。

第六章　真名本『曽我物語』における大磯の虎―愛執と女人往生の様相をめぐって―

大磯の虎は、夫曽我十郎と離別して以来、愛別離苦による悲哀を抱え、出家修行をしても、愛慕への執着を断ち切れない女性として描き出されている。本章では、虎の苦悩の様相を検討した上で、彼女の苦悩の中でも、先行研究で重視されていない、愛する者の苦悩に共感することによって生じた苦悩に着目し、そのような苦悩と愛する者を鎮魂救済する役割との関連性を考察する。又、臨終の時まで、愛する者への執着を振り払うことができないにもかかわらず、そのまま往生を遂げられたことはどのように捉えられるのかを明らかにし、虎の往生の様相を検討する。

第七章　真名本『曽我物語』における北条政子―繁栄と救済の様相をめぐって―

北条政子は、政権成立という夫源頼朝の願いを成就させるために、神仏に厚い信仰を持ち、積極的に祈念して修行する。その結果、夫の願望が成就し、自らも将軍の御台の地位に至り、繁栄を遂げる。本章では、政子の受難から繁栄への過程の中に表される、彼女の仏教的な性格を取り上げ、伊豆山権現の利生と政子の繁栄との関わりを考察する。さらに、伊豆二所権現の縁起を語る本地物語である『神道集』「二所権現事」の記述に触れて、『曽我物語』における政子の苦難譚と繁栄譚にはどのような意味合いが潜んでいるのかを探ることとする。先行研究では、政子譚と伊豆二所権現の縁起の関連性がすでに指摘されているが、本章は、政子譚に表される伊豆山権現の利生による女性の救済という構想は、本地物語の主題と同様に、衆生を仏に結縁させ、仏道へと導くものとして機能していることを示したい。

第八章　田中本『義経記』における静―権勢による苦悩と諦観の様相をめぐって―

静は、夫源義経が頼朝により謀反人とされたため、頼朝に尋問され、出産後、男児を殺される。その後、悲嘆に暮れつつも頼朝の前で舞を舞わされる。本章では、夫との離別および子の死による苦悩を検討しつつ、先行研究が指摘するように、鎌倉下向以後、物語は母としての悲哀に重点を置いているのかという問題点を考察する。さらに、舞の場面に着目して、静の心情変化と諦観への展開を検討する。結論から言うと、鎌倉下向以後、物語は先行研究の指摘のように静が子供を失った苦悩を強調するのではなく、むしろ、夫との別れによる悲しみの深さをより浮き彫りにしようとしている。特に、舞の場面において、頼朝の権力によって生じた恨み、絶望感を描いたことによって、静自身の諦観への心情変化を見出すことができると同時に、愛する義経の悲劇性も浮き彫りになる。

注

（1）『法華経』提婆達多品において、五障は「女人の身には猶五障あり、一には梵天王となることを得ず、二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり」と解説されている。

（2）笠原一男の解説によると、三従とは「幼にしては親に従い、嫁しては夫に従い、夫死しては子に従う、という自由のない生きざま」を意味する。

（3）大隅和雄、西口順子『女性と仏教２　救いと教え』（平凡社　一九八九年）

（4）法然は、中世軍記物語における救済の主題に多くの影響を与える人物として注目されている。彼は阿弥陀の第十八願が悪人・女人を区別することなく、往生させることを誓って、さらに、女性を取り分けて第三十五願に女人往生を誓っていることを述べ、阿弥陀の本願の信心および念仏による悪人・女人往生を説いている。

（5）牛山佳幸『古代中世寺院組織の研究』（吉川弘文館　一九九〇年）と、平雅行『日本中世の社会と仏教』（塙書房　一九九二年）は、笠原一男『女人往生思想の系譜』（吉川弘文館　一九七五年）が指摘する、古代仏教は女性を差別していたのに対し、鎌倉時代の新仏教はそれと異なってはじめて女性を救済するという見解を批判する。また、両氏は、女人成仏や女人往生の思想は平安時代の仏教界においてすでに流布していたと指摘し、古代仏教は女性を差別していないことを主張している。

（6）平野さつき「愛別離苦を越えて―『平家物語』における女性と仏教―」（『国文学解釈と鑑賞』五六‐五　一九九一年五月）

（7）臨終正念と女人救済について、山田昭全「平家物語に描かれた女性と仏教」（『国文学　解釈と鑑賞　特集女性と仏教』六九　二〇〇四年六月）、山本有紗「『平家物語』における臨終正念について」（『今城学院大学大学院　文学研究科論集』十二　二〇〇六年三月）など参照。又、『平家物語』における出家の様相については、吉永亜美「覚一本　平家物語の出家譚にみる仏教文学性」（『京都女子大学国文学会　女子大国文』三九　一九六五年十月）、蟹江秀明「平家物語における敗北の表現―出家・流罪・敗走を中心にして―」（『湘南文学』五‐六　一九七二年三月）など参照。

第一章　延慶本『平家物語』における二位殿・平時子
―平家一門の後世救済に対する役割―

はじめに

『平家物語』において、平時子（以下、「二位殿」[1]）は、夫平清盛の出世、娘建礼門院の后位、さらに孫安徳帝の即位によって、繁栄を得て恵まれている女性として造型されている。しかし、物語は栄華を極めた様子より、平家の没落に立ち向かう二位殿の姿を重視している。本章では、延慶本を中心に、二位殿の苦悩の様相を検討し、さらに苦悩の克服として、平家一門の後世救済に対する役割を考えてみたいと思う。

二位殿の苦悩に関して、趙文珠氏[2]は『玉葉』などの記録による二位殿の実像を踏まえ、『平家物語』における清盛の病死の場面と、三種の神器を子重衡と引き換える場面と、安徳帝の入水の場面に着目し、彼女の態度と心情について論じている。一方、鷹尾純氏[3]は、右に挙げた三つの場面などから、二位殿の造型を「家庭人としての立場と一門の指導者としての立場が一体化した。」と解釈し、さらに、安徳帝を抱いて入水をする二位殿の態度を、「やや一門の指導者の側に寄った投影なのである。」と捉えている。このような観点から見ると、二位殿の苦悩の様相、特に滅亡の場面における二位殿の言動を考察する際に、彼女の言動はどの立場からのものなのか、そもそも彼女の造型に平家の指導者的な立場が存在しているのか等について、検討する余地はある。そこで、まず平家における二位殿の指導者的な立場を、第一節において確認する。その上で、第二節において二位殿の立場を見ながら、苦悩の様相を考察する。

二位殿の苦悩の克服について考える上で注目したいのが、二位殿が安徳帝を抱いて入水した出来事を、建礼門院が後白河法皇と対面した際に語っていることである。建礼門院の回想の中で、はじめて平家一門の後世救済をするようにという二位殿の遺言が語られている。諸本の中で二位殿の遺言が記されているのは、延慶本と覚一本のみである。両本は二位殿が平家一門の鎮魂救済を建礼門院に託することを描き出した

ことによって、平家一門の後世救済に対する二位殿の役割を見出すことができる。遺言の他に、入水の場面、および法皇と対面する場面における、平家一門の滅亡を一連の悪行への応報と捉える認識（以下、「応報観」）に注目したい。覚一本では、「応報観」は二位殿の認識として建礼門院の口から語られているのに対し、延慶本では、二位殿ではなく、建礼門院自身の認識として直接語られている。延慶本においては、二位殿の認識として語った覚一本と異なり、建礼門院の発言として語られることは、どのように捉えられるのかという疑問が浮上する。このような問題意識から、第三節において苦悩の克服として、二位殿の遺言及び「応報観」と、平家の鎮魂救済との関わりを考えることとする。

一　平家における二位殿の立場

本節では、延慶本の都落ちの周辺記事を通して、清盛の死後、平家における二位殿の立場を考察する。清盛の死後、二位殿の長男たる宗盛は平家の棟梁を継ぐ。しかし、平家に背く者が続出し、又、木曽義仲の攻撃によって倶利伽羅合戦と篠原合戦で敗れ、平家の勢力は弱体化する。さらに、宗盛は義仲が都に攻め上る噂を聞くと、都落ちを決意する。延慶本では、都落ちした平家が旧都福原に一泊する場面を次のように記している。

二位殿モ大臣殿モ一所ニ差ツドヒテ、サテモイヅクニカ落付セ給ベキ。故入道相国ノ、カヽルベカリケル事ヲ兼テ被覚ケルニヤ、此所ヲシメテ家ヲ立、船ヲ造置レタリケル事ノ哀サヨ。コシ方向後ノ事共宣カヨワシテ、互ニ涙ヲ流給ケル程ニ、夜モホノ〴〵トアケニケリ。

〔第三末　「平家福原仁一夜宿事付経盛ノ事」九五－九六頁〕

平家は福原に到着し、清盛の墓に詣でて一泊する。傍線部のように、宗盛と二位殿は平家の今後のことについて相談し、亡き清盛がかねてからこのような事が起きるだろうと、福原に家を建て、船を造っておいたと述べる。ここからは、宗盛とともに一門の今後を考える二位殿の態度が窺われる。

西国へ出発する前に、平家は自らの跡を源氏の軍兵に見付からないために、福原に火をかける。その後、船上で宗盛は諸将を呼び、演説を行う。宗盛が演説をした姿と、その演説を聞いた諸将の反応は、次のように描き出されている。

肥後守貞能、飛騨守景家以下ノ侍共ヲ召集テ、①二位殿ハ内ニ、大臣殿ハ屋形ノ上ニテ、泣々宣ケル事コソ哀レナレ。「積善ノ余慶家ニ尽キ、積悪ノ余殃身ニ及故ニ、神ニモ放レ奉リ、君ニモステラレ奉テ、帝都ヲ迷出、客路ニ漂ル上ハ、今ハ何ノ憑カアルベキナレドモ、一樹ノ影ニ宿ルモ前世ノ契也、一河ノ流ヲ渡モ多生ノ縁猶深シ。何況汝等ハ、一旦従付ノ門客ニモアラズ、累祖相伝ノ家人也。或ハ近親ノ好、仕ニ異ナル末モ有。或ハ重代ノ芳恩コレ深キ者モ有。家門繁昌ノ昔ハ、恩潤ニ依テ私ヲ顧キ。楽ミ尽キ悲ミ来ル。今何ゾ思慮ヲハゲマシテスクハザラムヤ。其上、十善帝王、三種ノ神器ヲ御身ニ随ヘテオワシマス。天照大神モ吾君ヲコソ守ハグヽミ給ラメ。思ヘバ宿運ツヨキ我等也。速ニ合戦ノ忠ヲ励シテ、逆徒ヲ討取テ、徳ハ昔ニ越、名ハ後代ニ留ムト思心ヲ一ニシテ、野末山末ナリトモ、君ノ落留ラセ給ワム所ヘ送奉ルベシ。火ノ中ヘ入、水ノ底ニ沈トモ、今ハ限ノ御有様ニ見成奉ベキ」ヨシ宣ケレバ、三百余人御前ニ列居タル者共、老タルモ若モ、皆涙ヲ流シ袖ヲシボリテ申ケルハ、「心ハ恩ノ為ニ仕ワレ、命ハ義ニ依テカロケレバ、命ヲバ速ニ相伝ノ君ニ献リテ、二心アルベカラズ。（中略）設日本国ノ外ナル新羅高麗ナリトモ、雲ノハテ海ノハテナリトモ、ヲクレ奉ベカラズ」ト、異口同音ニ申ケレバ、②二位殿モ大臣殿モ、悦ニツケテモ涙ニ咽テ出給フ。

〔第三末　「平家福原仁一夜宿事付経盛ノ事」九七‐九八頁〕

宗盛は代々平家より受けた恩恵を述べ、忠義を尽くして安徳帝を護持するようにと、諸将へ促す。宗盛の演説に対して、諸将は二心なく奉公すると誓う。宗盛が演説を行ったことと、宗盛と運命をともにする平家の人たちの態度を見ると、宗盛は平家の代表として設定されていることが分かるだろう。一方、二位殿は演説を行ったわけではなく、彼女に平家の指導者としての立場は見られない。[4] ただし、鈴木啓子氏[5]は、①傍線部、宗盛が演説を行った際に、二位殿が共にいることと、②傍線部、宗盛とともに諸将の言葉を聞いて喜んだ描写に着目し、「二位殿はここで、宗盛が率いる平家を象徴的に支える役割になっていると考えられる。」と論じている。

以上のように、延慶本では、二位殿は、宗盛のように平家の指導者的な立場に置かれていないが、平家を見守り、平家の精神的な支柱のような存在であることが見て取れるだろう。

二　苦悩の様相

前節では、清盛の死後、家を見守る存在としての二位殿の立場を見てきた。本節では、そのような二位殿の立場を考慮しつつ、清盛の病死から平家の滅亡までの記述を中心に、彼女の苦悩の様相を検討する。この問題点を論ずるにあたっては、苦悩の原因として、血縁関係を持つ者による苦悩、及び平家一門の滅亡による苦悩に分け、考えることとする。

二-一　血縁

まず、夫清盛の病死の場面を検討する。清盛は熱病に倒れ、高熱に苦しむ状態になっている。二位殿をはじめ、平家の人たちは甲冑、金銀などを神社に奉納し、清盛の病気全快を祈るが、効験はない。臨終に際して、二位殿が清盛の遺言を聞いた記述は次の通りである。

潤二月二日、二位殿アツサ難堪ケレドモ、屏風ヲ隔、枕近ク居寄テ、泣々宣ケルハ、「御病日々ニ重ナリテ、恃ミ少ク見ヘ給フ。御祈ニヲイテハ、心ノ及ブ程ハ尽シ候ツレドモ、其験ナシ。今ハ只一スヂニ後生ノ事ヲ願ヒ給ヘ。又オボシヲク事アラバ、宣置キ給ヘ」ト被申ケレバ、入道クルシゲナルコヘニテ、息下ニ宣ケルハ、「我平治元年ヨリ以来、天下ヲ足ノ下ニナビカシテ、自ラ傾トセシ者ヲバ、時日ヲ廻ラサズ、忽ニ滅シニキ。帝祖大政大臣イタリテ、栄花既ニ子孫ニ及ベリ。一人トシテ背者ナカリシカバ、一天四海ニ肩ヲ並ル人ヤ有シ。サレドモ死ト云事、人毎ニ有ヲヤ。我一人ガコトナラバコソ始テ驚メ。但最後ニ安カラズ思置事アリ。流人頼朝ガ首ヲミザリツル事コソ口惜ケレ。死出山ヲ安ク越ベシトモ不覚」。入道死テ後、報恩追善ノ営努々々不可有」。相構テ頼朝ガ首ヲ切テ、我墓ノ上ニ懸ヨ。

其ヲゾ草ノ影ニテモ、悦クハ思ワムズル。子息、侍ハ深ク此ノ旨ヲ存テ、頼朝追討ノ志ヲ先トスベシ。仏経供養之沙汰ニ不可及」トゾ遺言シ給ケル。大将ヨリ始テ、御子孫共マデ、並居テ聞給ケリ。イトヾ罪深ク怖クゾ覚ル。

〔第三本　「大政入道他界事付様々ノ怪異共有事」六〇七－六〇八頁〕

点線部のように、二位殿は清盛の枕元に近寄り、後世救済を一心に願うようにと勧め、遺言を聞く。清盛は自らが築いてきた平家の繁栄を語り、さらに傍線部のように、追善供養をせず、頼朝の首を墓前に供えるようにという遺言を残す。清盛の死後、清盛に仕えた女房は大仏を焼失した罪のために、無間地獄の使者が清盛を連れて行くという夢を見たことが記されているのも、清盛の罪業の深さを強調する意味を持つものだろう。

清盛の熱病によって二位殿が苦悩したことは、彼女が嘆く姿からも明らかである。しかし、この記述を全体的に見れば分かるように、物語は悲しみより、棟梁としての清盛の深い罪に重点を置いている。趙氏[6]は二位殿の進言に着目し、「清盛に仏教帰依を進めている時子の描写は、〈仏経供養乃沙汰不可及〉」という清盛の答えを導くための処置だったようである。」と解釈している。よって、二位殿が仏教帰依を勧め、それに対して清盛が後世救済を拒否する設定には、妻としての二位殿の役割を通じて、清盛の深い罪を示す物語の意図が見出される。さらに、波線部のように、大将や子孫の態度が描写されているところを見ると、清盛の罪業の深さを一族が実感していることが捉えられる。

以上のように、清盛の深い罪は二位殿との対話によって引き出されている。このことから、二位殿の存在を清盛、また平家の罪を示す者として位置づける物語の意図が窺われるだろう。なお、平家滅亡の際、それを「応報観」によって受け止める問題点については平家の滅亡の記述で後述する。

恩愛による二位殿の苦悩は、夫婦の間以外に、子重衡の助命ができない記述にも見られる。清盛の死後、都落ちした平家軍は、一谷合戦で完敗し、平家の人々は屋島へ敗走し、重衡が捕虜となる。その後、重衡を三種の神器と交換せよ、という院宣が平家に送られる。二位殿は重衡の手紙に嘆き、子の助命のために、一門に対し神器の返還を訴える。しかし、安徳帝の立場を維持する唯一のものは神器であるゆえに、神器の返還という二位殿の願いは拒否されるのである。子の助命を断られた二位殿は、次のように心境を打ち明ける。

二位殿又宣ケルハ、「故入道ニ後レテ、片時命生テ有ベシトモ思ハザリシカドモ、主上カクイツトナク旅立セ給タル心苦サト、又君達ヲモ世ニアラセバヤト思志ノ深サニコソ、今マデナガラヘテモ有ツレ。中将一谷ニテ生取ニセラレヌト聞シヨリ、肝神モ身ニソワズ。イカカニシテ此世ニテ今一度相見ルベカルラムト思ヘドモ、夢ニダニモ見ヘネバ、イトゞ胸セキアゲテ、湯水ヲモ喉ヘ入ラレズ。此文ヲ見テ後ハ弥思遣ル方モナシ。中将世ニナキ事ト聞バ、我モ同道ニ消ナムズレバ、再物ヲ思ワヌ先ニ、只我ヲ先ニ失ヒ給ヘ」ト、ヲメキ叫バレケレバ、ゲニモサコソ思給ラメト哀ニ覚ヘテ、人々モ涙ヲ流シテ、各フシ目ニナラレケレバ、涙ヲヲサヘテ立給ヌ。

〔第五末　「重衡卿賜院宣西国へ使ヲ被下事」三〇〇頁〕

夫を亡くし、又、子の助命のために何も出来ない二位殿の悲しみが、右に挙げた本文に表明されている。ここで注目したいのは傍線部、安徳帝の将来を心配し、宗盛たちをもう一度繁栄させたいと思うからこそ、今まで生きながらえてきたという二位殿の告白である。清盛の死後、平家の人々を見守り、支えようとする、後家としての二位殿の姿勢は、その告白に表明されている。ところが、彼女は子の助命のために、平家の立場を維持する内侍所を手放す決意をする。物語が設定した平家への責任と、親子恩愛との間の葛藤には、母としての苦悩とともに、平家の立場より親子の恩愛を優先せざるをえない二位殿の姿を読み取ることができよう。

以上の場面から、悲歎に暮れる妻母としての二位殿の苦悩が端的に表されている。又、親子の深い恩愛によって、平家の立場を見守ろうとする立場は、大きく動揺させられているのである。それでは、平家の滅亡に際して、彼女の態度はどのように変貌するのだろうか。

二-二　平家一門

源義経が法皇の御所に参り、平家追討のことを奏聞する。一方、平家は屋島で漂泊の生活を送り、三年目になる。関東から源氏の軍兵が屋島へ攻めてくる噂を聞いた二位殿や建礼門院の姿は、次のように描き出されている。

東国ノ軍兵来ト聞ヘケレバ、又イカヾ有ムズラントテ、国母ヲ奉始」、北政所、女房達、賤キシヅノメシヅノヲニ至マデ、頭ラ指ツドヒテ、只泣ヨリ外ノ事ゾナキ。

〔第六本　「判官為平家追討西国へ下事」三六八頁〕

右のように、源氏の攻勢に怯え、平家の状況に不安を抱えている二位殿の心境が表出されている。しかし、平家の滅亡の象徴と言える壇ノ浦合戦の場面では、以前の恐怖、あるいは不安はもう見られない。滅亡に際して、二位殿の態度は次のように描き出されている。

二位殿ハ今ハカウト思ワレケレバ、ネリバカマノソバ高挟ミテ、先帝ヲ負奉リ、帯ニテ我御身ニ結合奉テ、宝剣ヲバ腰ニサシ、神璽ヲバ脇ニハサミテ、鈍色ノニ衣打カヅキテ、今ハ限ノ船バタニゾ臨マセ給ケル。先帝今年ハ八ニ成セ給ケルガ、折シモ其日ハ山鳩色ノ御衣ヲ知召タリケレバ、海ノ上ヲ照シテミヘサセ給ケリ。御年ノ程ヨリモネビサセ給テ、御顔ウツクシク、黒クユラ〳〵トシテ、御肩ニスギテ、御背ニフサ〳〵トカヽラセ玉ヘリ。二位殿カクシタヽメテ、船バタニ臨マレケレバ、アキレタル御気色ニテ、「此ハイヅチヘ行ムズルゾ」ト仰有ケレバ、「君ハ知食サズヤ、穢土ハ心憂所ニテ、夷共ガ御舟ヘ矢ヲ進ラセ候トキニ、極楽トテ、ヨニ目出キ所ヘ具シ進セ候ゾヨ」トテ、王城ノ方ヲ伏拝給テ、クダカレケルコソ哀ナレ。「南無帰命頂礼天照大神正八幡宮、確ニ聞食セ。吾君十善ノ戒行限リ御坐セバ、我国ノ主ト生サセ給タレドモ、未幼クオワシマセバ、善悪ノ政ヲ行給ワズ。何ノ御罪ニ依テカ百王鎮護ノ御誓ニ漏サセ給ベキ。今カヽル御事ニ成セ給ヌル事、併ラ我等ガ累葉一門、万人ヲ軽シメ朝家ヲ忽緒シ奉、雅意ニ任テ自昇進ニ驕シ故也。願ハ今生世俗ノ垂迹三摩耶ノ神明達、賞罰新ニオワシマサバ、設今世ニハ此誡ニ沈ムトモ、来世ニハ大日遍照弥陁如来、大悲方便廻シテ必ズ引接シ玉ヘ。今ゾシルミモスソ川ノ流ニハ浪ノ下ニモ都アリトハ」ト詠ジ給テ、最後ノ十念唱ツヽ、波ノ底ヘゾ被入」ケル。

〔第六本　「壇浦合戦事付平家滅事」四〇一 - 四〇二頁〕

前掲のように、子と神器との交換の記述においては、平家の立場を見守る役割に対する二位殿の動揺がある。ところが、平家の滅亡に際しては、二位殿は知盛から平家の敗戦を聞いた後、迷わずに、安徳帝を抱き、安徳帝の正統性の証明たる神璽と宝剣とともに入水をする。そのような凛々しい二位殿の姿を見ると、物語は平家の立場を支えている安徳帝と神器を最期まで見守る役割を、後家たる二位殿に与えていることが分かるだろう。平家の立場に対する二位殿の役割に度合いの変化はあるものの、滅亡にあたっては平家一門を見守るという役割は顕著に強調されている。

入水の直前、二位殿の態度で注目すべきは、安徳帝の死の理由として、自ら一門の悪行を認識していることである。安徳帝の死の原因は、傍線部「平家一門が多くの人、朝廷を侮り、自分の思うように高い位に昇り進み、驕り高ぶったからだ」と明確に述べられているように、平家の悪行の応報として認識されている。さらに、波線部のように、現世では平家が神罰を与えられたが、後世は仏の慈悲によって救済されるようにという仏の救済に帰依する態度が示唆される。

覚一本においても、二位殿の「応報観」は見て取れる。

君はいまだしろしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御力によッて、いま万乗の主と生れさせ給へども、悪縁にひかれて、御運すでにつきさせ給ひぬ。

〔巻第十一「先帝身投」三八二頁〕

右のように、前世の十善戒を守り行った力によって、この世で天子になったが、悪縁に引かれたから、運命が尽きるという因果応報の原理を、二位殿は安徳帝に説き聞かせている。覚一本の「悪縁にひかれて」という箇所から、二位殿の「応報観」は示唆されるが、延慶本のように詳しく記されていない。このように、平家一門を見守る二位殿の役割を通して、悪行への応報という認識を重視している延慶本の姿勢が窺われる。

以上のように、平家の滅亡に際して、二位殿は躊躇せず、一門の悪行を滅亡の原因としている。では、滅亡後、平家一門の罪による苦悩は、どのように克服されるのかを次節で考察する。

三　苦悩の克服

平家一門の鎮魂救済を果たす役割は、周知のように、『平家物語』の何れの諸本においても、建礼門院に与えられている。では、平家一門の鎮魂救済に対する二位殿の役割は、どのように描かれているのか。本節では、二位殿の遺言と言動から、平家の鎮魂救済との関連性を考察する。

三-一　二位殿の遺言

平家の滅亡後、生き残った建礼門院は出家し、寂光院で一心に修行に励んでいる。翌年、後白河法皇は忍んで、その寂光院を訪れる。法皇と対面した建礼門院は自らの人生を、六道に喩えて語る。延慶本においては、六道語りに続き、他の諸本に見られない安徳帝追憶の語り[7]があり、その中に二位殿の遺言が登場する。安徳帝追憶の語りでは、建礼門院は母二位殿と、子安徳帝との離別による悲歎や、親子の恩愛を語り、安徳帝の入水を回想する。ここで注目すべきは、実際の入水の場面には記されていないことを、建礼門院がこの回想の場面で語っていることである。

（建礼門院：執筆者注）一日片時モ世ニナガラフベシトモ不覚侍シカバ、『共ニ底ノミクヅト成ム』ト取付奉シヲ、二位殿、『人ノ罪ヲバ、親ノ留リ子ノ残リテ訪ワヌカギリハ、苦患遁レザムナル物ヲ。サレバ我身コソ今ハ空ク成ルトモ、残留テ、ナドカ先帝ノ御菩提ヲモ、我等ガ苦患ヲモ訪給ハザルベキ』トテ、引放テ出給シカバ

〔第六末　「法皇小原へ御幸成ル事」五二八‐五二九頁〕

右のように、建礼門院は自分も母と子とともに入水しようとするが、二位殿の遺言によって説得されたことを告白する。二位殿は、傍線部「人の罪とは、親が留まって弔う、あるいは子が残って弔うものである。そうでなければ、苦悩を免れえない。」とあるように、親子の関係を持つ者によってなされる後世救済を説く。ここで問題なのは、波線部「残留テ、ナドカ先帝ノ御菩提ヲモ」に続く、「我等ガ苦患」が二位殿自身と平家の人たちの両方を指しているのかという点である。平家の人たちの救済に関する二位殿の願望は、この箇所以外には見当たらない。ところが、「天子聖霊、成等正覚、一門尊霊、出離生死悲願」と建礼門院が念仏した箇所を見れば、物語は二位殿の遺言をその悲願と通じ合わせるために、「我等ガ苦患」いわゆる二位殿と平家の人たちの救済を語ると推定できる。

延慶本との影響関係がある『閑居友』[8]においても二位殿の遺言が登場し、その中に延慶本と同様に親子の恩愛が取り上げられている。『閑居友』における二位殿の遺言は次の通りである。

我も入なんとし侍しかば、「女人をば昔より殺す事なし。構えて残り留まりて、いかなるさまにても後の世を弔ひ給べし。親子のする弔ひは、必ず叶ふ事也。誰かは今上の後世をも、我後世をも弔はん」とありしに

〔第八話「建礼門院女院御庵に、忍びの御幸の事」四四〇頁〕

傍線部のように、親子の関係を持つ者がする後世救済について記されている。ただし、波線部、「誰かは今上の後世をも、我後世をも弔はん」には、平家一門ではなく、安徳帝と二位殿自らの救済のみ示されている。このように、親子関係の間の救済を重視する『閑居友』を、延慶本の二位殿の遺言と比較してみると、親子関係にとどまらず、母の恩愛を子の後世救済のきっかけとして、一門の救済へと結びつける延慶本の態度が浮かび上がってくる。では、そのような延慶本の態度は、他の諸本の中にも見られるのだろうか。

延慶本以外に、二位殿の遺言が記されるのは、覚一本のみである。覚一本における二位殿の遺言は延慶本と異なり、六道語りの中に見られる。建礼門院は二位殿が入水した出来事を回想し、平家の人々の泣き叫んだ声を、叫喚地獄の炎の底で苦しむ罪人に喩えた。建礼門院に残した二位殿の遺言は次の通りである。

さても門司、赤間の関にて、いくさはけふを限と見えしかば、二位の尼申しおく事さぶらひき。『男のいきのこらむ事は、千万が一つもありがたし。設ひ又遠きゆかりは、おのづからいき残りたりといふとも、我等が後世をとぶらはん事もありがたし。昔より女はころさぬならひなれば、いかにもしてながらへて、主上の後世をもとぶらひ参らせ、我等が後生をもたすけ給へ』

〔灌頂巻「六道之沙汰」五二一頁〕

二位殿は、傍線部「男が生き残るいうことは、千、万に一つも難しい。又遠い親類はたとえたまたま生き残ったといっても、我々の後世の冥福を弔うということもありえないことだ。昔から女は殺さないのが常だから」とあるように、女性を殺さないという戦の習いと、血縁関係のことを述べる。又、延慶本と同様に、波線部、安徳帝の後世を弔い、「我等が後生」を救済するようにと遺言をする。後世救済という二位殿の願望はこの記述に続く、畜生道になぞらえる場面にも見られる。平家一門の人々が龍宮城にいる夢を、建礼門院が語った記述は次の通りである。

播磨国明石浦について、ちッとうちまどろみてさぶらひし夢に、昔の内裏にははるかにまさりたる所に、先帝をはじめ奉ッて、一門の公卿殿上人、みなゆゆしげなる礼儀にて侍ひしを、都を出でて後、かかる所はいまだ見ざりつるに、『是はいづくぞ』と問ひ侍ひしかば、弐位の尼と覚えて、『竜宮城』と答へ侍ひし時、『めでたかりける所かな。是には苦はなきか』と問ひさぶらひしかば、『竜畜経のなかに見えて侍ふ。よく〳〵後世をとぶらひ給へ』と、申すと覚えて夢さめぬ。其後はいよいよ経をよみ念仏して、彼御菩提をとぶらひ奉る。

〔灌頂巻「六道之沙汰」五二三頁〕

右のように、安徳帝と一門の公卿が現れた背景に、二位殿が波線部「よく〳〵後世をとぶらひ給へ」と建礼門院に命じた箇所から、平家一門を救済してもらいたいという二位殿の願望が捉えられるだろう[9]。よって、「我等が後生をもたすけ給へ」という二位殿の遺言は、平家一門の救済を指していることが明確になる。

要するに、両本における二位殿の遺言から、平家一門の救済に対する二位殿の役割が見て取れる。ただし、建礼門院を生き長らえさせる理由には相違点がある。すなわち、延慶本は、上述のように、親子関係を持つ者が弔わなければ救済はできないと言い、親子の恩愛を後世救済へと導くものとして提示しているのである。一方、覚一本は、血縁関係に触れるものの、延慶本のように、親子間には特定していないのである。このように、両本における二位殿の遺言は、親子の恩愛の有無という点で異なると言えるだろう。その上に、親子の恩愛を平家一門の救済へと押し広げていることが、延慶本における二位殿の遺言の特質であると確認できる。

以上のように、延慶本では、二位殿は建礼門院に親子の間の救済を説き、安徳帝と二位殿のみならず、平家一門の救済を課する者として設定される。平家の後家として、一門を後世救済へ導き出す二位殿の役割を読み取ることができるのである。

三-二　平家の悪行の応報に対する意識

平家の救済に関する二位殿の役割において、もう一つ重要な問題点は、平家の悪行の応報を認識する態度である。二位殿の「応報観」を考察する前に、まず法皇と対面する場面における建礼門院の恨みの存在を確認しておく。

『源平盛衰記』をはじめ読み本系には、法皇が都落ちの際に西国へ同行せず平家を見捨てる事や、また大宰府落ちの際に尾方維義に平家の攻撃を命令した恨みを、建礼門院が告白したという恨み言の語りがある。しかしながら、延慶本は他の読み本系と異なり、法皇への恨みを語っていない。ただし、延慶本にも本来恨み言の語りがあっただろうという仮説は、佐伯真一氏の論考[10]で指摘されている。佐伯氏が挙げた一つ目の理由は、六道語りの中で何道の記述ともつかない大宰府落ちの記述に、法皇の命令による維義の攻撃と、その苦難が記されていること

である。もう一つの理由は、建礼門院の往生の際に、「今生ノ御恨ハ一旦ノ事也。」という文脈からの「御恨」が存在し、恨み言の語りがある他の読み本系と呼応していることである。佐伯氏の指摘のように、延慶本における勝利者への恨みは、他の読み本系のように注目されていないが、建礼門院の回想の記述に潜んでいることは否定できないだろう。一方、覚一本などの語り本系は、餓鬼道に喩えられる維義の攻撃には、法皇の命令のことを記していない。覚一本では、恨みではなく、建礼門院の過去の人生とその苦悩の語りに重点が置かれているのである。

では、建礼門院は平家滅亡を回想するに際して、勝利者に対してどのような反応をしたのかを考察する。延慶本における、建礼門院が語った入水の直前の出来事は次の通りである。

『イヅクヘ行ベキゾ』ト先帝被仰シカバ、『浄土ヘ具シ進ベシ』トテ、先伊勢大神宮ノ方ヲ伏拝奉リ給テ、西ニ向テ、『流転三界中、恩愛不能断、奇恩入無為、真実報恩者、南無西方極楽教主阿弥陀仏』ト、十念高声ニ唱給テ、『設我得仏、十方衆生、至心信楽、欲生我国、乃至十念、若不生者、不取正覚、光明遍照十方世界、念仏衆生摂取不捨ノ御誓タガヘ給ワズ、必ズ引摂ヲ垂給ヘ』ト唱モアヘ給ハズ、海ニ飛入リ給シ音計ゾカクカニ船底ニ聞ヘシカドモ、消ハテ絶入ニシ心ノ内ナレバ、夢ニ夢ミル心地シテ、貞ニモ覚ヘ不侍キ。世々生々ニモ其面影争カ忘レ侍ベキ。誠ニ振旦高麗ニハ賢ヲエラビ智ヲ尊ビテ、其氏ナラネドモ天子ノ位ヲ践トカヤ。我朝ニハ御裳濯川ノ御流之外ハ、此国ヲ治メ給ワズ。然ニ先帝ハ神武八十代之正流ヲ受テ、十善万機ノ位ヲ践給ナガラ、齢未幼少ニマシ〳〵シカバ、天下ヲ自治ル事モナシ。何ノ罪ニ依テカ、忽ニ百皇鎮護ノ御誓ニ漏レ給ヌルニヤ。是即我等ガ一門、只官位俸禄身ニ余り、国家ヲ煩スノミニアラズ、天子ヲ蔑如シ奉リ、神明仏陀ヲ滅シ、悪業所感之故也。

〔第六末　「法皇小原ヘ御幸成ル事」五二九頁〕

傍線部のように、実際の入水の場面に記されていない、阿弥陀の救済に関する経典の言葉が、二位殿の発言として語られている。[11] それに続き、建礼門院は安徳帝が正当な帝であることを主張し、何の罪も犯していないのに、なぜ神々の誓いに漏れ、悲惨な運命に到ったのかと問いかける。その問いに対して、波線部のように、その原因は「我等一門が高い位に昇り、多くの禄を受けて国家を煩わせたのみならず、天子

を侮り軽んじ、神仏を滅ぼした悪行の報いからだ」と、彼女自身で答える。ここに、自ら平家一門の罪を認め、それを法皇に懺悔する建礼門院の態度が表されている。小林美和氏と佐伯真一氏[12]は、平家の滅亡後、勝利者の代表たる法皇に懺悔する建礼門院の行動を、勝利者への恨みの解消と読み取り、恨みの解消から、往生・鎮魂へ展開する物語の構造を指摘している。

これに対し、前節で見てきたように、延慶本は平家を見守っていた後家たる二位殿の発言によって「応報観」を表明している。又、建礼門院が法皇と対面する場面において、正当な帝たる子安徳帝の死による悲哀の感情をその「応報観」に追加し、国母の苦悩として法皇に伝えている。この二つの場面を見ると、二人の女性のそれぞれの立場を通して、「応報観」を重視している延慶本の姿勢が明確になる。とりわけ、「応報観」の内容については、安徳帝が罪を犯していないことを主張することと、滅亡の原因として、驕り高ぶり、天子などを侮った平家の悪行を認識することで、彼女たちの「応報観」が一致している。仮に、建礼門院の「応報観」を論じた小林氏と佐伯氏の指摘のように、敗北者が自らの悪行を認識することを、恨みを解消する要素とするのならば、二位殿の「応報観」にも、恨みの解消へと展開する仕掛けが施されていると考えられるだろう。

ただし、ここで見過ごせないのは、この回想の記述で「応報観」が建礼門院自身の認識として直接語られることである。二位殿によって一門の救済が建礼門院に託され、又、「応報観」が二位殿ではなく、建礼門院の認識として設定される一連の流れを見れば、物語は一門の救済の役割を二位殿から建礼門院へ移行したことが読み取れる。このような設定により、滅亡の際に重視される平家一門を見守るという二位殿の役割は弱められるのである。

一方、覚一本における入水の回想の記述にも、「応報観」が見られる。ただし、それは建礼門院の立場からではなく、入水の場面と同様に二位殿の発言として語られている。建礼門院が語った二位殿の発言は次の通りである。

『尼ぜ、われをばいづちへ具してゆかむとするぞ』と仰せさぶらひしかば、いとけなき君にむかひ奉り、涙をおさへて申しさぶらひしは、『君はいまだしろしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御力によッて、今万乗の主とは生れさせ給へども、悪縁にひかれて、御運既につき給ひぬ。

〔灌頂巻「六道之沙汰」五二二頁〕

ここでの二位殿の発言は、実際の入水の場面のものと同じ（前掲）で、その「応報観」は波線部「悪縁にひかれて」という言葉に認められよう。一方、建礼門院自身の「応報観」は、延慶本のように法皇と対面をする場面ではなく、彼女の往生前の場面に見られる。

是はただ、入道相国、一天四海を掌ににぎッて、上は一人をもおそれず、下は万民をも顧みず、死罪流刑、思ふ様に行ひ、世をも人をも憚られざりしがいたす所なり。父祖の罪業は、子孫にむくふといふ事、疑なしとぞ見えたりける。

〔灌頂巻　「女院死去」五二六頁〕

法皇が帰った後、建礼門院は生き残った平家の人々の苦しい生活を語る。話の終わりに、波線部に見られるように平家の不幸の根源は父清盛の「罪業」であると特定し、清盛の傲慢な態度を詳細に説く。ここには、執着の解消から往生へという物語の展開が設定されていると考えられる。前述のように覚一本では、そもそも建礼門院の恨みが語られていないし、又、執着の解消は往生の直前に語られる建礼門院の「応報観」に表明されていることから、覚一本における二位殿の「応報観」は、延慶本のように恨みの解消へ展開する仕掛けとは考え難い。それはむしろ単なる一連の滅亡の出来事として語られているのだろう。ところが、覚一本において滅亡の場面における「応報観」が、建礼門院の回想の中で二位殿の口から語られているゆえに、平家滅亡の際における二位殿の役割は弱化しないのである。

以上のように、延慶本における二位殿の「応報観」は覚一本には見られない、恨みの解消から後世救済へと展開する仕掛けと見做される。ただし、延慶本は滅亡の場面における「応報観」を建礼門院の認識とし、一門救済の役割を後家たる二位殿から、国母たる建礼門院へ移行した際に、家を見守っていた後家としての二位殿の役割が弱められることは認めざるを得ないだろう。

おわりに

以上のように、延慶本における二位殿の苦悩と、苦悩の克服としての遺言、及び平家の悪行の応報に対する意識を考察してきた。平家の滅亡前、二位殿は、夫と子への深い恩愛によって悲歎に暮れると同時に、平家一門を見守る役割により家の没落に直面するという、両方の立場を通して苦悩の様相が描き出されている。滅亡後、二位殿によって一門の救済が建礼門院に託され、又、「応報観」が建礼門院自身の認識として語られる設定になっているため、二位殿は表立った役割を演じていない。しかし、延慶本は、母としての建礼門院の恩愛を、子安徳帝と平家一門の後世救済へと結びつける装置として、二位殿の遺言を利用している。加えて、二位殿の「応報観」は建礼門院の「応報観」と共通し、恨みの解消へ向けての仕掛けの一つと見做される。このような遺言、及び「応報観」の存在によって、一門を鎮魂救済へ導き出す二位殿の姿が浮き彫りになる。その意味で、延慶本における二位殿は、建礼門院のように一門の救済を果たす者ではないが、恨みの解消・平家一門の救済の主題を支えている存在として位置づけられていると言えるだろう。

注

（1）『平家物語』は主に平時子を「二位殿」と称しているが、六道之沙汰の記述では「二位の尼」となっている。

（2）趙文珠「平家物語における二位尼平時子―覚一本と延慶本を中心に―」（『梅光女子院大学大学院新樹』十三　一九九八年十月）

（3）鷹尾純「二位尼と宗盛」（『解釈と鑑賞』四七‐七　一九八二年六月）

（4）長門本では「肥後守貞能、飛騨守景家、越中前司盛俊以下、侍どもをめして、二位殿、おほせられけるは」とあるように、演説を行った人は、宗盛ではなく、二位殿となっている。（長門本　巻第十四「朝綱重能有重被〻免事」）

（5）鈴木啓子「『平家物語』と〈家〉のあり方―建礼門院と二位殿をめぐって―」（『文学』三‐四　二〇〇二年七月）

（6）前掲注（2）

（7）佐伯真一『建礼門院という悲劇』（角川選書　二〇〇九年）は、建礼門院が法皇と対面する場面における建礼門院の語りを、「六道語り」、「恨み言の語り」、「安徳帝追憶の語り」という三つの語りに分けて考察する。

（8）『閑居友』巻第八には「建礼門院女院御庵に、忍びの御幸の事」がある。法皇が建礼門院を訪ね、建礼門院が平家の滅亡の出来事を回想して語るという設定は『平家物語』の大原御幸に通じているが、六道語りは存在していない。『閑居友』のこの記事と、『平家物語』の関係については、『閑居友』が『平家物語』の典拠であるか、それとも両本は直接的な関係ではなく、同じ一つの材料を持っている等の問題点が論じられている。麻原美子「『閑居友』と『平家物語』―典拠説をめぐって」（『日本女子大学紀要（文学部）』一九号、一九七〇年三月）、水原一「建礼門院説話の考察」（『延慶本平家物語論考』加藤中道館　一九七九年）、武久堅「壇ノ浦合戦後の女院物語の生成―『閑居友』と延慶本平家物語の関係・再検討」（『平家物語発生考』おうふう　一九九九年）を参照。

（9）延慶本の龍宮城の夢の記述には、二位殿と安徳帝が存在していない。後世救済を託する人は新中納言知盛となっている。

（10）前掲注（7）

（11）生形貴重「「先帝入水伝承」の可能性―延慶本『平家物語』「先帝入水」をめぐって―」（『軍記と語り物』二四　一九八八年三月）は、二位殿の言葉として記された経典の言葉と、平家一門の後世救済との関連性を、次のように論じている。

「流転三界中、恩愛不能断、奇恩入無為、真実報恩者、南無西方極楽教主阿弥陀仏」は『清信士度人経』に見られるという偈である。（中略）ここで母親の建礼門院に先立って入水する安徳天皇の霊魂を弔うために書き込まれているのであろう。「設我得仏、十方衆生、至心信楽、欲生我国、乃至十念、若不生者、不取正覚」は周知の通り、『大無量寿経』に語られる弥陀第十八願であり、入水する安徳天皇を極楽へ往生させんとするものである。これらの経典の引用は、まさに物語を貫いている安徳帝・平氏一門への鎮魂の想いの延長線上に据えられるべき文脈である。

（12）小林美和「『平家物語』の建礼門院説話―延慶本出家説話考―」（『平家物語生成論』三弥井書店　一九八六年、初出一九八〇年）と、佐伯真一前掲注（7）著書

使用テキスト

『新編日本古典文学全集４６　平家物語２』（小学館　一九九四年）

『延慶本平家物語本文篇下』（勉誠社　一九九〇年）

『平家物語長門本・延慶本対照本文　中』（勉誠出版　二〇一一年）

『新日本古典文学大系４０　宝物集・閑居友・比良山古人霊託』（岩波書店　一九九三年）

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。

第二章　延慶本『平家物語』の平重衡をめぐる女性たち
―重衡救済における役割―

はじめに

平家の悪行の中で、一門滅亡の最大の要因として注目されるのは、三井寺と南都焼打である。その罪業の報いにより、張本人たる清盛は熱病で悶絶して夢告で無間地獄に落ち、攻撃の総大将たる重衡は生捕、斬首される。二人とも仏罰に当たった者とされているものの、罪の報いに対する態度は異なる。清盛は死去の直前に救済を否定して恨みを残す。それに対して、重衡は重罪を深く認め、後世救済を求めた上に、周囲の人々から同情を受け、後世菩提を弔ってもらう。つまり、重衡は救済される存在として造型されている。

重衡救済の設定について、池田敬子氏[1]は法然に向かっての重衡の懺悔と、斬首の場での独白に着目し、物語は重衡を悪人往生の例証として位置づけていると指摘している。佐伯真一氏[2]は、諸本における重衡の記述から共通項目を抽出した上で、滅罪・救済を目指す重衡の行動と、諸本に共通している重衡救済という設定について、「覚一本における焼打弁明・女性の出家の繰り返しは目立つところであり、覚一本では、常に焼打の罪業を意識しつつ、それに対する弁明と、滅罪をめざす種々の行為を試み、ついには敵の憎しみも消えて往生へ向かう重衡の姿、そしてその亡魂供養に努める周囲の人々―といった叙述が完成していると言えよう。しかし、そうした性格は覚一本に限られるものではなく、救済に向かう重衡を描き出すという点では、諸本は基本的に同様の性格を有すると思われる。」と指摘している。小林美和氏[3]は、内裏女房、大納言佐（以下、「北の方」）、千手前などが重衡の生捕以後、死にいたるまでの過程に登場することに着目し、その女性たちは「刻々と死に近付いていく重衡の心情吐露の聞き手、もしくは代弁者として機能している（中略）この魂の救済とは、けっして重衡死後のことばかりではない。すなわち、この女性たちこそ、重衡の顔を見、そのことばを聞くことによって、死に瀕した重衡の心を鎮める役割を担っているのである。」と述べ、重衡の心情を聞く、語る女性の役割と救済の構想との関わりを論じている。

以上の先行研究から、重衡自身の告白と、法然や多くの女性との対面を通じて、重衡救済が物語に設定されていることは明確である。ただし、罪業に関する苦悩については、北の方、内裏女房が重衡から罪の告白を聞いた際に、歎いてはいるものの、その苦悩を慰める役割までは担ってないことに注目すべきである。一方で、重衡が法然に懺悔する場面、あるいは、千手に出会う場面においては、重衡の罪業による苦悩を慰める様子が明確に描かれている。

法然に懺悔する場面において、重衡は現世かつ前世から重ねてきた罪業は須弥山より高いと、罪業の深さを認識し、死後の堕地獄による苦しみを覚悟している。重衡の懺悔に対し、法然は悪心を翻して善心を起し、極楽往生を願うことは諸仏が喜ぶと励まし、又、滅罪・悪人往生の方法として専修念仏を教える。法然の励ましを聞いた重衡は喜びの涙を流し、最後に後世救済を依頼する。その他、重衡は千手に出会う場面においても、朗詠の応酬を通じて罪業に関する彼の苦悩を千手に受け止めてもらい、心を癒してもらっている。

このように、物語は罪に関する重衡の苦悩を慰める役割を、法然、千手に与えていることが窺われる。では、内裏女房、北の方との再会は、実際に罪業に苦しむ重衡の心を慰めるものとして機能しているのだろうか。また物語は重衡救済のために、それぞれの女性、特に北の方にどのような役割を与えているのか。これらの問題について、個別に考察する必要がある。

以上のような問題意識から、本章では、延慶本を中心に、重衡救済における女性たちの役割を個別に検討する。さらに、第二節で、先行研究であまり注目されていない彼女たち自身の苦悩とその克服は、どのように描かれているのかという問題点にも触れたい。

なお、北の方、内裏女房、千手前の三人の女性それぞれは重衡との関係が異なるため、彼女たちの位置づけを確認しながら、重衡救済における女性たちの役割を検討する。以下、物語に登場する順序に従って取り上げる。

一　重衡救済における役割

一 - 一　内裏女房

内裏女房は重衡の愛人であり、重衡の南都焼失に関する苦悩を聞く者として位置づけられている。このような役割は次の場面に見られる。

捕虜となった重衡は都を引き回された後、昔仕えた信時を介し、内裏女房と再会する。信時は重衡の手紙を持って内裏へ入った時に、内裏女房が語った重衡の告白の話を聞く。

人ハ皆『奈良ヲ焼タル罪ノ報ヒニヤ』ト云也。ゲニモサヤラムトオボユ。是ニテ中将ノ宣シニハ、『我心ニモ発ラズ、焼ケトモ云ザリシカドモ、多勢ナリシカバ、心ナラズ火ヲ出シタレバ、多ノ伽藍滅給ヌ。末ノ露、本ノシヅクナレバ、誠ニ我罪ニコソナラムズラメ』ト云シガ、ゲニモサトオボユルゾヤ」トテ、サメ〴〵ト泣給ケレバ、「穴糸惜シ。サテハ女房モ同ジ御心ニテ歎給ケリ」ト哀ニ覚ヘテ

〔第五末　「重衡卿内裏ヨリ迎女房事」三〇四頁〕

右のように、以前、重衡が彼女に告白したのは、南都焼失は自分の本意ではなかったが、部下が大勢いて、不本意にも火をつけて寺院を焼失してしまった、部下の罪は大将だった自分の罪になるという内容である。物語はこのように重衡の弁明を彼女の口を通じて描いた上で、内裏女房の姿を傍線部「同ジ御心ニテ歎給ケリ」と信時が言うように、罪に関する重衡の苦悩を受け止め、同情する彼女の姿を示している。

罪に関する重衡の苦悩に共感する内裏女房の行動の他に、重衡と離別する際の心情描写にも注目したい。重衡は内裏女房との再会の前に、「於今一二者被切一事必定也。但最後ノ妄念トナリヌベキ事アリ。」と信時に述懐したように、死を覚悟しているものの、恋愛の執着が残っている。そこで、信時は仲介役として、重衡と内裏女房との文を交換し、再会を実現させる。

（重衡：執筆者注）「何ナラム野山ノ末、海河ノ底マデモ、甲斐ナキ命ダニアラバ、申事モ有ナムトコソ思シニ、夫モ叶ワズ。生ナガラ被取一テ、恥ヲサラス事ノ心憂サ、此世一ノ事ニハアラジ。先世ノ宿業ニテコソ有ラメト思ヘバ、人ヲモ恨ベカラズ。此世ニ有ム事モ今日ト明日ト計也。如何ニシテカ今一度相見奉ラム」ト、哀ナル事共ツキセズ書給テ。

（中略）

（内裏女房：執筆者注）「イヅクノ浦ハニモオワシマサバ、自ラ申事コソカタクトモ、露ノ命、草葉ニ消ヤラズナガラヘテアラバ、風ノ便ニハトコソ思ツルニ、サテハ今日ヲ限ニテオワスラムコソ悲ケレ。サモアラバ我身トテナガラエム事モ有ガタシ。何ニシテカ今一度可奉見」ト書給テ。

〔第五末　「重衡卿内裏ヨリ迎女房事」三〇四－三〇五頁〕

重衡の手紙には、前世の宿業の結果として不幸を自覚する姿と、最後に内裏女房に会いたいという願いが表されている。一方、内裏女房の返書には、重衡の安否を心配して便りを心待ちにしていたということが語られ、傍線部のように死別による悲歎を露呈している。離別による内裏女房の悲哀は、重衡と対面する場面においてさらに語られている。

（重衡：執筆者注）「西国ヘ向シ時モ隙ノ無リシカバ、乍」思何事モ申ヲカズ。合戦ノ日モ矢ニ中（ツ）テ死ナバ、又モ音信申サデ、年来申契シ事共モ皆浮言ニテ、サテヤハテムズラント思ツルニ、乍」生トラレテ大路ヲ渡サレケル事ハ、人ニ再ビ見参スベキ事ニテ侍リケル物ヲ」（中略）「此比ハ夜深ヌレバ大路ノ狼藉ニアンナルニ、シヅマラヌ先ニトク〳〵参ラセ給ヘ。①来ム世ニハ必ズ一蓮ニ」（中略）「命アラバ又モ奉見ラム宇礼敷コソ。世ニ無キ者ト聞給ハヾ、②後世訪ヒ給ヘ」ト宣テ、中将。

逢事モ露ノ命モ諸共ニ今夜計リヤ限ナルラム

女房。

カギリトテ立別ナバ露ノ身ノ君ヨリ先ニ消ヌベキ哉

「③契アラバ来ム世ニ」ト宣テ、内裏ヘ帰シ奉ル。

〔第五末　「重衡卿内裏ヨリ迎女房事」三〇六頁〕

重衡は西国に落ちた際に、何も伝言しなかった事情を語り、さらに、波線部のように、仮に自分が合戦で亡くなったら、日頃から言い交わして約束していたことは皆偽りになってしまうと述懐する。この箇所を前掲の「妄念」と合わせて見ると、重衡の執着は内裏女房に対する変わらない愛慕の情を告げることにあると考えられる。それに続き、①傍線部、共に往生したいという願望と、②傍線部、後世を弔ってもらいたいという依頼が記されている。それに対して、「カギリトテ」という内裏女房の歌に見られるように、死別を歎き悲しみつつ、重衡の願いに応え、③傍線部のように来世で再会するようにと願っている。

以上のように、重衡が内裏女房と再会する場面において、物語は愛別離苦とそれによる妄念を提示した上で、重衡の菩提を弔う役割を彼女に与えている。さらに、小林氏の指摘のように、内裏女房の口を借りて重衡の寺院焼失の弁明を語り、彼女の同情を提示する設定には、重衡の罪業に関する苦悩を解消させる要素がある。ただし、彼女は実際に重衡と対面する際に、罪業に関する苦悩を慰める言動が描かれていない。では、物語は実際に罪に苦しむ重衡の心を慰める役割を、彼女に与えているのだろうか。この点については、他の二人の女性と合わせて考えることとする。

一-二　千手前

千手は遊女であり、頼朝に仕えている。[4] 重衡は関東へ護送された際に、彼女に出会う。

重衡は伊豆の国で南都焼打の事件を頼朝に尋問された後、鹿野宗茂に預けられ、頼朝の命令により手厚いもてなしを受ける。湯浴みの場面において、千手は重衡の介抱をした際に、「『何事モ思食候ハム事ハ被仰候ヘ』ト、兵衛佐殿ノ仰候ツル」と語り、頼朝の命令に従い、重衡の希望を聞く。それに対して、重衡は「何事ヲカハ。明日頸被切事モヤ有ラムズラン」と答え、生きることに絶望している。重衡の絶望感は酒宴の場面において、より強調されている。

酒宴で宗茂は重衡を慰めようとして、酒をすすめて千手に朗詠を歌わせる。

（千手：執筆者注）「羅綺ノ重衣タル無情機婦ニ妬ミ、管弦ノ長曲ニアル、不終事ヲ伶人ニ嗔」ト云朗詠ヲシタリ。三位中将被仰ケルハ、「重衡今生ハ依罪業被捨三宝奉リヌ。罪業軽ミヌベキ事ナラバナビキ奉ラム」ト被申ケレバ

〔第五末　「重衡卿千手前ト酒盛事」三一八頁〕

千手が朗詠した、傍線部「羅綺ノ重衣タル」という句は『和漢朗詠集』にある菅原道真の作である。[5] 千手が朗詠したこの歌の意味合いについて、佐伯雅子氏[6]は「「羅綺」とは薄い織物である。それを重く感じるほどたおやかな舞姫に対して、それを織った女性を非難している。下句は、音楽が長引くと、それを終わらせない演奏家を怒るという心情を述べている。これを『平家物語』本文に即してそのまま解釈すると、「お疲れでしょう」という意味になる。演奏をやめて休みたいということである。」と述べ、重衡への千手の思いやりを読み取っている。さらに、佐伯氏は、『国会図書館本和漢朗詠集注』ではこの句を唱えれば、北野天満宮の祭神菅原道真の利益があるとされていることから、「千手は「おつかれでしょう」という言葉の中に、天神の奇跡を待った祈りを込めている」と解釈している。これらの佐伯氏の指摘から、この朗詠を通じて長い旅による重衡の疲れを癒した上に、命の無事を祈り、彼の苦悩を慰めようとしている千手の姿勢が見て取れる。

それに対し、重衡は波線部のように、自分は現世で罪業により仏に捨てられた身であり、仮にその罪業が軽くなるならば、それに従って歌ってみようと言っている。佐伯雅子氏や関口忠男氏[7]の指摘のように、ここに重衡は神々の奇跡への期待、いわゆる現世的な救済を否定していることが読み取れる。こうして、絶望感で沈鬱している重衡の心情が一層強調されている。

重衡の絶望感を察知できた千手は次のように朗詠する。

千手ノ前、①「雖十悪猶引接ス」ト云朗詠ヲシテ、「極楽ヘ参ラン人ハ皆」ト云今様三反、歌澄ヒタリ。其時三位盃ヲ傾ケ給。千手琴ヲ取テ、②五常楽ノ急ヲ引澄ス。中将ハ琵琶ヲ取テ掻鳴サル。

〔第五末　「重衡卿千手前ト酒盛事」三一八頁〕

①傍線部のように、千手は十悪を犯した人でも阿弥陀仏は極楽浄土に導いてくれると朗詠し、又、②傍線部のように、「五常楽ノ急」を弾く。ここに、重衡の苦悩に同情し、早く往生できるようにと祈る千手の姿が端的に表されている。後世救済の励ましの朗詠を聞いた重衡は、盃を取って酒を飲みほし、さらに、千手が「五常楽ノ急」を弾くのに合わせて琵琶を奏でる。そのような重衡の反応を見ると、鬱屈した心が徐々に晴れてきたことを読み取ることができるのである。[8]

夜が更けて、重衡は静かに心を澄まし、「廻骨」という曲を弾く。また、「燈暗シテハ数行虞氏ノ涙、夜深テハ四面楚歌ノ声」とあるように重衡は千手を、敗戦を覚悟して歎く項羽に同情し、涙する妻の虞氏になぞらえて朗詠する。[9]

ここで注目したいのは、千手との朗詠、演奏の応酬を通じて、重衡に源氏側の人たちから同情が集まる点である。重衡が「燈暗シテハ」を朗詠した際に酒宴の場にいた人々の反応は、次のように描かれている。

西国ニテ如何ニモ可成給人ノ、離一門一ヲテ、人シモコソアレ、被生取一給テ、見馴レヌ軍兵ニ伴テ下給ツラム道通、如何心細ク思給ツラン。雪山ノ鳥ノ『今日ヤ明日ヤ』ト鳴ラムモ、又蜉蝣ノアダナル露命思合セラレ給覧ト哀也

〔第五末　「重衡卿千手前ト酒盛」三一八頁〕

右のように、周囲の人達は生け捕り、見慣れぬ軍兵に連れて行かれた重衡の孤独と、斬首されることによる不安感に同情している。

又、翌日、千手が頼朝に重衡の事を報告した際に、大善太夫広元は項羽と虞氏の故事や、「廻骨」の曲の意味合いを解説し、重衡の心情を推し量る。ここに重衡の深い苦悩に同情する頼朝をはじめ、源氏側の人々の姿が示されている。[10] このように、千手が朗詠、演奏を通じて重衡の気持ちに寄り添ったからこそ、重衡の孤独、不安感などによる苦悩が披瀝され、源氏側の人々へ伝わったと言えるだろう。

以上のように、物語は千手の朗詠、演奏を通じて、重衡の後世救済を祈願し、彼に「今生ノ楽ミ」を感じさせている。さらに彼の苦悩や孤独感を頼朝ら、いわゆる敵の側へ伝え、同情、共感させる千手の役割を描いている。こうして、千手は罪業に苦しむ重衡の心を慰める者、それと同時に、源氏の人々を重衡の苦悩に同情させる媒介者として位置づけられていると認められよう。

一-三　北の方

彼女は重衡の正妻であると同時に、安徳帝の乳母ともされている。重衡救済における役割について、北の方は夫の罪に関する述懐を聞くだけでなく、亡魂供養の役割を果たす者として位置づけられている。まず、重衡の生前における役割から見ていく。

重衡は南都の大衆の要請によって奈良へ護送される際に、途中、日野に住む北の方との対面を許してもらう。

中将泣々宣ケルハ、「コゾノ春何ニモ成ベカリシ身ノ、①セメテノ罪ノ報ニヤ、生ナガラ被取テ、京田舎恥ヲサラシテ、ハテニハ奈良ノ大衆ノ中ニ出シテ被切ベシトテマカルヲ、命ノアラン事モ只今ヲ限レリ。此世ニテ今一度見奉ムト思ツルヨリ外ハ、又二思事無リツ。今ハ思ヲクベキ事ナシ。ヨミヂモ安ク罷ナンズ。②人ニ勝テ罪深コソ有ンズラメドモ、後世問ベキ者モオボヘズ。何ナル御有様ニテオワストモ忘レ給ナ。出家ヲモシタラバ、カタミニ髪ヲモ進セ候ベケレドモ、夫モユルサレヌゾ」トテ、袖ヲ顔ニ押アテ給フ。

〔第六本　「重衡卿日野ノ北方ノ許ニ行事」四四四頁〕

重衡は波線部のように、北の方と再会でき、この世に思い残すことはない、安心して冥途へ行くことができると北の方に述懐する。ここに、重衡が妄念による苦悩を克服する過程が窺われる。

北の方に対する愛情の他に、寺院焼失による罪も述懐する。重衡は生け捕られた後、京都、鎌倉へ引き回されて恥をさらしたことを語り、傍線部①「セメテノ罪ノ報」と、②「人ニ勝テ罪深」と述べ、寺院焼失の重罪を自覚している。さらに、このような重罪を背負っているが、後世を弔ってくれる人が心に思い浮かべられないので、二重傍線部のように、北の方に供養を託する。

以上のような重衡の述懐を見ると、北の方の記述においても、内裏女房の記述と同様に、重衡の妄念による苦悩を克服する過程が設定されていることが明らかである。また、北の方は罪についての重衡の述懐を聞いたが、内裏女房と同様にその苦悩を慰める役割を演じていない。

こうして見ると、北の方も内裏女房も、重衡の罪業に関する苦悩を解消させるというより、妄念による苦悩を克服させる者として位置づけられていると認められよう。

このように、彼女たちは重衡の愛する者として同様の役割を担っているが、北の方は内裏女房のように単に菩提を弔うことを託されるだけでなく、亡魂供養という重要な役割を果たしたことに相違点がある。重衡の供養を果たす北の方の姿は次のとおりである。

木公馬允時信（ママ）ト云侍ヲ北方召テ、「中将ハ木津河、奈良坂ノ程ニテゾ被切給ワンズラン。頸ヲバ奈良ノ大衆請取テ、奈良坂ニ可懸ト聞ユ。跡ヲ隠ベキ者ノ無コソウタテケレ。サリトテハ誰ニカ云ベキ。行テ最後ノ恥ヲカクセカシ。ムクロヲバ野ニコソ捨ンズラメ。夫ヲバイカニシテカキ返セ。教養セン」トテ

〔第六本　「重衡卿日野ノ北方ノ許ニ行事」四四六頁〕

重衡と別れた後、傍線部のように北の方は信時に遺骸の回収を依頼し、重衡の後世を供養したいと言って出家する。重衡が斬首された場面の末尾で、彼女は悲歎に暮れつつ、重衡の遺骸を火葬し、墓を造って骨を高野山に納める。又、春乗房上人に頼んで、南都大衆から重衡の首を返してもらう。

重衡の死後、覚一本においては、北の方だけが重衡の供養を果たす者とされているが、三人の女性全員が出家して、重衡の菩提を弔うと描かれている。それゆえに、重衡の後世を弔う役割は北の方に特定していないと言える。それに対し、延慶本は菩提を弔い、供養を行う役割を北の方のみに与え、重衡が救済されることを確信させている。よって、重衡救済における最も重要な役割を北の方に果たさせようとする延慶本の意図が窺われる。

以上のように、重衡の生前において、三人の女性それぞれが役割を果たしたことによって、彼が生け捕りされてから斬首されるまでの苦悩を克服する過程を見てきた。重衡がすべての苦悩を克服できたことは、次の斬首される場面で確認できる。

重衡は斬首される際に、近くから阿弥陀三尊を請じ、袖の括りを解いて仏の手に結びつける。ここで注目したいのは、斬首直前の重衡の告白である。

「達多ガ五逆罪、還テ天王如来ノ記別ニ預ル。是則仏ノ御誓ノ空カラザル故也。然バ重衡ガ年来ノ逆罪ヲ翻テ、必ズ安養ノ浄土ヘ引導シ給ヘ。弥陀如来ニ四十八ノ願マシマス。第十八ノ願ニハ『欲生我国』ト『乃至十念、若不生者、不取正覚』ト誓アリ。重衡ガ只今ノ十念ヲ以テ、本誓誤セ給ハズ、早引接シ給ヘ」トテ、十念高声ニ唱給ケル、其御声ノ未終ザルニ、御頸ハ前ニ落ニケリ。

〔第六本　「重衡卿被切事」四四七頁〕

重衡は五逆の罪を犯した提婆達多の救済の叙述や阿弥陀の本願を語り、傍線部のように、日頃の罪を翻し、浄土に導くようにと願って十念を唱える。

このように、臨終の際に、罪による苦悩から離れ、救済に向かおうとする重衡の様子が明確に示されている。それと同時に、北の方、内裏女房に述懐した「最後ノ妄念」や、離別による悲哀も、救済の妨げとされていないことも確認できる。

以上見てきた、重衡救済における女性たちの役割をまとめると、次のようになる。罪による苦悩について、三人の女性全員が彼の苦悩に同情するが、実際に罪に苦しむ心を慰めて、その苦悩から救われるよう言葉に表し、願っているのは千手だけである。重衡は演奏を通じて千手に心を癒してもらい、さらに、彼女を媒体として源氏の人々に同情してもらうのである。妄念による苦悩については、重衡が北の方と再会した際に「今ハ思ヲクベキ事ナシ。ヨミヂモ安ク罷ナンズ」と述懐する、あるいは、重衡が「最後ノ妄念トナリヌベキ事アリ」と述べ、内裏女房との再会を望んでいるところから見ると、臨終時、恋愛の執着から離れることができたのは、愛する内裏女房、北の方と再会でき、最後に思いを語り合ったからだと考えられる。このように、北の方も内裏女房も妄念を解消する役割を担っているが、北の方のみが供養の役割を担っている。重衡の斬首後の遺骸を回収して骨を納めることはもちろん、出家する、菩提を弔うなどの後世救済の役割も正妻だけに特定している。ここに、後世救済の重要な役割を正妻に果たさせようとする延慶本の意図を読み取ることができる。

二　女性たちの苦悩の様相とその克服

重衡救済における三人の女性の役割は前節で見てきたように、詳細に描かれている。では、彼女たち自身の苦悩とその克服はどのように描かれているのか。

後日談において、内裏女房は覚一本のように出家するのではなく、「内裏ヘハ参給ハズ、里ニゾ住給ケル。責テノ事ト覚ヘテ、押量ラレテ哀也。」とあるように、悲嘆に浸っている。[11] 千手の場合は、重衡に出会って以来の感情や、彼の死を契機として出家・往生を遂げたことに言及せず、重衡の苦悩に同情する姿に留まっている。[12]

北の方の苦悩について、彼女は重衡の正妻のみならず、安徳帝の乳母にも位置づけられているため、愛別離苦の他に、安徳帝に関する苦悩などが多様に描かれており、内裏女房と千手より注目されている。まず、北の方の愛別離苦から見ていく。

北の方の悲哀は捕えられた重衡と再会する場面だけでなく、その前の、重衡を神器と交換する場面と入水の場面にも表されている。重衡の身を神器と交換せよという院宣が平家へ送られる際、そのついでに、重衡は次のように北の方へ言伝をする。

此六日ヲ必ズ限トモ思候ワズ。申承シ事ノハカナサ、憑シキ人モナクテ、イツトナク旅ノ空ニ明シ晩シ給コソ心苦ケレ。心ノ中モ身ノ有様モ只押量リ給ヘ

〔第五末　「重衡卿賜院宣西国へ使ヲ被下事」二九九頁〕

北の方への重衡の述懐には、捕虜となった苦渋と頼れる人がいない孤独が表されている。ここに、北の方の反応は描かれていないが、その交渉が平家一門に拒否されたことを聞いた後、「北方大納言典侍殿ハ只泣ヨリ外ノ事ナクテ、ツヤ〳〵返事モノ給ワズ。」とあるように、捕虜になった夫重衡の解放が叶わないことに絶望して歎く北の方の姿が表されている。

このように、夫を救えない北の方の悲哀は若干表されているが、重衡と再会する場面以降、北の方の苦悩がさらに表面化する。

重衡は北の方と再会する際に、罪や夫婦の愛情を語る。それに対して、北の方の反応は次のように描かれている。

北方モ日来ノ思歎ハ事ノ数ナラザリケリ。堪忍ベキ心地モシ給ハズ。「軍ハ常ノ事ナレバ、必シモ去年二月六日ヲ限トモ不思シカドモ、別奉リニシカバ、越前ノ三位ノ北方ノヤウニ、水ノ底ヘ入ベカリシニ、先帝ノ御事モ心苦ク思進セテ有シ上ニ、正ク此ノ世ニオワセヌトモ聞ザリシカバ、命有バ今一度見奉事モヤト、今日マデハ憑方モ有ツルニ、今ヲ限ニテオワスラン事ノ悲サヨ」トテ、中将ノ上ニ顔ヲアテ、涙ニ咽給フ。

〔第六本　「重衡卿日野ノ北方ノ許ニ行事」四四四－四四五頁〕

北の方は重衡と別れて以来、小宰相のように入水したかったが、今まで生き長らえていたのは、傍線部のように、安徳帝のことを心配し、重衡ともう一度会えるだろうと思っていたからだと述懐する。ここに、物語は重衡との離別による悲哀を描写すると同時に、安徳帝の乳母として帝のことを悩んでいる姿も示している。

重衡と別れる直前に、北の方の悲哀は一層高まってくる。重衡は北の方と別れる際に、着替えた小袖を形見として渡し、思い切って出発しようと思っている。

中将ハ、「イカニモ可遁一道ニアラネバ」トテ、心ヅヨク引チギリテ立給フ。北方縁ノ際ニ臥マロビテ叫給フ。三位中将庭マデ被出一タリケルガ、又立帰給テ、御スダレノキワヘ立寄テ、日来思設タリツルゾカシ。今更歎給ベカラズ。契有バ後ノ世ニモ又生合事モ有ナン。必ズ一蓮ト祈給ヘ」トテ出給ニケリ。北方此ヲ見聞給テ、恥ヲモ顧給ワズ、御簾ノキワニマロビテ出給テ、モダヘコガレ給フ。御音ノ遙ニ門外マデ聞ヘケレバ、馬ヲモエスヽメ給ワズ。ヒカヘ〳〵涙ニ咽バレケレバ、武士共モ鎧ノ袖ヲゾ湿シケル。

〔第六本　「重衡卿日野ノ北方ノ許ニ行事」四四五－四四六頁〕

右のように、重衡は一旦立ち去って庭まで出たが、北の方があまりにも悲しんでいるので、再び立ち返る。波線部、後世で共に往生することを祈るようにと託して慰める。そして、重衡は意を決して門を出たが、北の方の悶え泣く声が聞こえて、馬を進められず涙するとある。

尾崎勇氏の指摘のように、物語は悶え泣く北の方の姿と、悲哀に耐えず立ち返る重衡の行為を描き、離別による悲哀を際立たせようとすることが窺われる。[13]

重衡との離別以外に、平家の没落も北の方の苦悩の原因とされている。北の方は一門と共に、壇ノ浦合戦で滅亡を迎える。入水する直前の北の方の姿は次のように描き出されている。

（二位殿が安徳帝を抱いて、入水をしたこと:執筆者注）是ヲ見奉給テ、国母建礼門院ヲ始奉テ、先帝ノ御乳母帥典侍、大納言典侍以下ノ女房達、声ヲ調テヲメキ叫給ケレバ、軍ヨバヒニモ不劣ケリ。

〔第六本　「壇浦合戦事付平家滅事」四〇二頁〕

右のように、二位殿と安徳帝の入水を見た北の方の苦痛は、建礼門院（以下、女院）や、女房たちと共に描写されている。

その他、重衡の死後、北の方は後白河法皇が女院と対面する場面に登場している。彼女は、信西の孫である阿波弁内侍と共に、寂光院で女院に仕えて修行する。北の方の登場は次のように描かれている。

後ノ片山ノ嶮キヨリ、コキ墨染ノ衣キタル尼二人下降ル。何ナル者ナル覧ト御覧ゼラレケルニ、一人ハ樒ニ樗ジ藤ノ花摘入タル花籠ヒヂニ懸タリ。是ゾ女院ニ渡セ給ケル。一人ハ妻木ニ蕨折具シテ持タリ。是ハ大宮大政大臣伊通卿御子息、鳥飼中納言伊実娘、先帝御乳母、大納言典侍ト云人也。

〔第六末　「法皇小原へ御幸成ル事」五一六頁〕

右の引用文は、女院を訪れた法皇が、北の方と共に山から降りてきた女院を見る場面である。花籠を持っている女院と、柴木に蕨を折りそえて持っている北の方の姿の描写に続き、彼女の名前と出自が安徳帝の乳母として取り上げられている。延慶本において、出家した北の方はこの場面のみに登場して、覚一本のように、最終的に往生を遂げたことは描かれていない。このように、延慶本は夫の死を契機として出家し、女院と共に修行するという仏道に帰依する北の方の姿を描き出しているものの、修行の利益によって往生を遂げたという苦悩の克服から来世救済への展開を提示していない。

以上のように、女性たち自身の苦悩の様相とその克服を考察すると、物語は内裏女房と千手の苦悩の克服に注目していないことが明らかである。北の方の場合は、他の二人の女性と対比して、苦悩の様相が多様に描き出されている。夫との離別を歎く、家の没落に苦しみ、安徳帝のことを心配するという重衡の正妻、および安徳帝の乳母の両立場からの苦悩が明示されている。とはいえ、彼女の後日談には苦悩の克服の過程、あるいは、女人救済への展開が提示されていない。よって、延慶本は覚一本のように重衡をめぐる女性たちの救済を描こうとせず、重衡救済における役割に重点を置いていると認めざるを得ない。

おわりに

以上、重衡救済における女性たちの役割、および彼女たち自身の苦悩の様相とその克服を検討した。重衡救済における女性たちの役割について、小林氏の論考では、物語が重衡救済を提示するために、三人の女性たちに、彼の死後ばかりではなく、生前の心境を聞く・語る役割を果たさせることは指摘されている。氏の指摘の通り、重衡は生前、三人の女性全員に悲しみ、特に罪に関する苦悩を述懐していることが重要な点である。ところが、それに対する彼女たちの反応に着目して考察すると、物語は重衡救済における役割を三人の女性それぞれに与えていることが窺われる。特に注目したいのは、女性全員が罪を解消する役割を担っていない、また、後世救済を果たす者は北の方に特定していることである。物語が実際に罪業に苦しむ重衡の心を慰める役割を与えるのは千手だけである。彼女は重衡の心を慰め、又、源氏側の人々の同

情心を誘発させる役割を果たしている。一方、愛する内裏女房と北の方は、妄念による苦悩を解消させる役割を担っている。殊に、延慶本は重衡の後世救済という重要な役割を北の方のみに果たさせ、重衡が救済されることを確信させている。このように、延慶本は覚一本のように、重衡の菩提のために、出家・後世を弔う役割を女性全員に与えるのではなく、北の方だけに特定していると言える。ここに、北の方の位置づけで両本の相違が窺われると同時に、北の方の役割を前面に打ち出そうとする延慶本の姿勢も見出すことができる。以上のように、重衡救済における女性たちの役割は個別に分けられ、丹念に描かれているが、女性たち自身の苦悩の克服、特に来世救済は描かれていない。北の方の場合は、重衡の正妻および安徳帝の乳母の両立場としての苦悩が描かれているにもかかわらず、後世救済への展開は存在していない。よって、延慶本は重衡救済に焦点を絞っており、女性たちはそれぞれに重衡救済の物語に資する役割を担い、女性たち自身の救済には触れないことで一貫していると言えるだろう。

注

（1）池田敬子「悪人往生―重衡」（『軍記と室町物語』清文堂　二〇〇一年、初出一九七七年）

（2）佐伯真一「重衡造型と『平家物語』の立場」（『平家物語遡源』若草書房　一九九六年、初出一九八五年）

（3）小林美和「『平家物語』の重衡像」（『平家物語の成立』和泉書院　二〇〇〇年、初出一九九七年）

（4）千手の出自について、頼朝の側近である鹿野介は、重衡の問いに対して、「手越宿ノ君ノ長者ガ娘、千手ト申者ニテ候。心立テ痛気シタル者ニテ候之間、兵衛佐殿ノ御前ニ此四六ケ年被召仕進セテ候也」[五]と答える。

（5）この句は『和漢朗詠集』巻下「管弦」に次のように記されている。「羅綺之為重衣　妬無情於機婦　管弦之在長曲　怒不関於伶人」（四六六、菅原道真）

（6）佐伯雅子「『平家物語』における千手前と重衡―「死」のプロセスと『和漢朗詠集』―」（『人間総合科学』二〇〇四年十月）

（7）関口忠男『中世文学序考』（武蔵野書院　一九九二年）

（8）千手が朗詠した「雖十悪」猶引接ス」という句は『和漢朗詠集』巻下「仏事」から引用されている。原詩は次の通りである。「雖十悪兮猶引摂　甚於疾風被雲霧　雖一念兮感応　喩之巨海納涓露」（五九一、具平親王）

（9）『和漢朗詠集』巻下「詠史」においては、「灯暗数行虞氏涙　夜深四面楚歌声」（六九三、橘広相）とある。

（10）翌日、千手が頼朝に重衡の事を報告した際に、大善太夫広元は項羽と虞氏の故事を次のように頼朝に解説する。

アレハ、昔大国ニ楚ノ項羽ト申ケル帝、虞氏ト申ミメヨキ后ヲ被寵愛候ケリ。漢ノ高祖ト申敵、項羽ヲ襲候ケルニ、馬ノ一日ニ千里ヲ飛ニ乗テ、此虞氏ト倶ニ去ントシケルニ、馬イカヾ思ケム、足ヲ調テハタラカザリケレバ、項羽涙ヲ流テ、『我威勢既ニ尽タリ。今ハ可遁一方ナシ。敵ノ襲ハムハ事ノ員ナラズ。此虞氏ニ別ナム事コソ悲ケレ』トテ、終夜歎候ケル程ニ、燈ノ闇ク成ルマヽニ、心細テ、虞氏涙ヲ流ス。夜深ルマヽニ四面ニ時ヲ作リ候ケルナリ。

（第五末「重衡卿千手前ト酒盛」三一九頁）

さらに、「廻骨」という曲の意味合いについて、広元は次のように解説する。

彼廻骨ヲバ、文字ニハ『カバネヲ廻ス』ト書テ候。大国ニハ葬送之時必ズ用ル楽也。而ニ中将今生ノ栄花尽テ、只今被誅一給ナムズル事ヲ思給テ、彼異朝ノ例ヲ尋テ、葬送ノ楽ヲ弾レケルコソ哀ナレ

（第五末「重衡卿千手前ト酒盛」三一九－三二〇頁）

「廻骨」という曲は葬送の際に用いられる曲であると解説し、この曲を奏でたのは現世の栄華が尽きて、斬首されるという自らの最期を省みるからだろうと重衡の心境を推し量る。

（11）覚一本における内裏女房の後日談は次のとおりである。

されば中将、南都へわたされて、きられ給ひぬと聞えしかば、やがて様をかへ、こき墨染にやつれはて、彼後世菩提をとぶらはれけるこそ哀れなれ。

（巻第十「内裏女房」二七十－二七一頁）

（12）重衡に出会って以来の感情や、後日談については、『吾妻鏡』文治四年四月二五日の条には、

廿五日、辛卯、今暁千手前卒去年廿（吉川、本卅）四、其性大いに穏便、人々の惜しむ所也。前の故三位中将重衡参向の時、不慮に相馴み、彼の上洛の後、恋慕の思ひ朝夕休まず、憶念の積もる所、若しくは発病の因と為るかの由人これを疑ふと云々

とあるように、重衡への恋愛と、その思いが積もっていたことが発病の原因だったのかという重衡との離別による悲しみが記されている。

さらに、覚一本は、

千手前はなか〳〵に物思のたねとやなりにけん。されば中将南都へわたされて、きられ給ひぬと聞えしかば、やがて様をかへ、こき墨染にやつれはて、信濃国善光寺におこなひすまして、彼後世菩提をとぶらひ、わが身もつひに往生の素懐をとげけるとぞきこえし。

（巻第十「千手前」二九四頁）

とあるように、恋愛と死別による苦悩に加えて、重衡の菩提救済を契機として出家・往生を遂げたという女人救済を提示している。

（13）延慶本における一旦去って立ち返った重衡の態度について、尾崎勇「平重衡と女性たち（下）」（『防衛大学校紀要』四二　一九八一年三月）は、「大納言佐（北の方：執筆者注）に対して、なお思いが断ち切ることができないで遅疑する」と捉えて、覚一本で立ち返りたいと思っていたが、実際には行動を起こさなかったことと比較し、「重衡の北の方への断ち難い思慕の念を際立たせている」という延慶本の姿勢を指摘している。氏の指摘の通り、この場面に延慶本は重衡の愛執を打ち出している。しかしながら、斬首される際に一途に念仏する重衡の姿から、愛執は後世救済の妨げとされていないことが確認できる。

使用テキスト

- 『延慶本平家物語本文篇下』（勉誠社　一九九一年）
- 『新編日本古典文学全集４６　平家物語２』（小学館　二〇〇六年）
- 『新編日本古典文学全集１９　和漢朗詠集』（小学館　一九九九年）
- 『岩波文庫　吾妻鏡２』（岩波書店　一九三九年）

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。

第三章　延慶本『平家物語』における平維盛北の方
―愛する者を救済する・愛する者に救済される存在―

はじめに

平維盛北の方は、重盛の嫡男維盛に嫁ぎ、六代という男の子と女の子を産む。しかし、彼女の境遇は決して恵まれたものではない。幼い頃に父大納言成親が殺され、都落ちの際には夫と離別、夫の死後は息子が源氏側に渡され、不安や離別に苦しんで不幸を背負う女性として描き出されている。

北の方の造型に関して、彼女のみに重点を置いて考察する論考は少ない。その中で、郭順伊氏[1]の論考では、次のように、諸本における彼女の造型が論じられている。

> 維盛北の方は物語内であくまで脇役としての立場にある。相当量を占める維盛描写の中で、維盛の妻は頻繁に登場するものの、その姿は合戦に臨む夫を気がかりに思い、常に涙する、非力な印象の妻としての表れでしかないのである。維盛北の方は、『平家物語』に描かれる他の女性説話の主人公達に比べ、特に目立った特徴や個性を持つわけでもなく、夫を慕うごく平凡な決まりきった形で描かれる傾向にある。（中略）その姿はどの諸本も、離れてしまった夫への恩愛と危惧の念を抱く薄幸な妻の姿が強調されたものである。

右のように、夫との離別による苦渋を抱える姿を強調し、非力な印象を与える北の方造型の共通点が指摘されている。さらに、夫を思慕し、最終的に亡くなった夫のために出家し菩提を弔う点で、他の女性登場人物と同様に設定されていることが論じられている。

多くの論考で、北の方の造型は、妻子へ深い恩愛を持つ維盛の性格を論じる際に取り上げられている。維盛の造型に関して、池田敬子氏[2]と牧野淳司氏[3]は、入水の直前、維盛は念仏している際に、妻子のことを思い煩い、心が揺れ動いてしまった場面に着目し、妄念とされる妻子への恩愛を論じている。又、妻子を浄土に導くという滝口入道の説法により、その妄念を翻し、一心念仏することができたことに、往生の構想が捉えられると指摘している。ここで興味深いのは、往生へと向かうきっかけとされる、妻子を浄土へ導きたいという維盛の意志である。この点を考慮すると、北の方は郭氏が指摘した他の女性登場人物のように、単に男性から後世救済を求められる存在としてだけではなく、夫に救済される存在としても造型されていると考えられ、北の方の造型を再検討する余地はある。

妻子への深い恩愛を持つ維盛の性格自体についてだけでなく、物語が維盛と平重衡の対比を意識して描き出しているとする見解もある。秋山寿子氏[4]は、『平家物語』及び多くの文献を参照し、「二人（重衡と維盛：執筆者注）の出自のみならず、容姿、才能にも極めて恵まれたこのペアが一門内部だけでなく、同時代の人々にも強く印象づけられた」と述べている。さらに、鈴木則郎氏[5]は、維盛と重衡の記述に着目し、「一の谷の合戦敗北後の平氏一門の没落の運命を、維盛と重衡の悲劇的生の展開に焦点を合わせて語ろうとした」という物語の姿勢を指摘した。その他に、四重田陽美氏[6]は、延慶本における維盛と重衡の記述を対照し、次のように述べている。

> 妻子に対する恩愛の情を抑えきれずに悩みつつ、妻子に逢う事なく出家し熊野の海に身を沈める維盛と、生け捕りの憂き目に逢い、出家も許されないまま、内裏女房や妻に別れを告げるために逢うことのできる重衡は、『延慶本』では、類似的な表現や文体を用いながら、全く対照的に描かれていた。維盛の物語と重衡の物語という二つの物語は、おそらくはそれぞれ全く別個の説話から成り立ってきたのであろうが、それを、あえて対照的に描きあげる事によって、二つの物語が絡まり合いながら、またそれぞれの物語としての色合いを深めていく構造を見る事ができる。

右のように、重衡が死の前に、愛する者との再会を果たしたのに対し、維盛が妻子との再会を断念して入水したことに、彼らの対照性が捉えられると論じている。ここで見過ごすことができないのは、重衡の生捕りのことをきっかけに、維盛が妻子との再会を断念するという設定

であり、二人を結びつけようとする物語の姿勢である。四重田氏の論考では、重衡の生捕りの出来事と、維盛が妻子との再会を断念することとの結びつきは高野山へ導線を変更する場面との関わりでのみ着目されているが、実際は他の場面にも表されており、特に維盛の入水の直前に強調されている。よって、物語が重衡の生捕りの出来事を繰り返して語ることはどのように捉えられるのか、維盛の最期における妄念の存在や、妻子を救済したいという願望に関わっているのかを考察する必要がある。

以上の問題意識から、まず北の方の行動を中心に、彼女の苦悩とその克服の様相を第一節において考察する。第二節において、妻子を救済するという維盛の造型を検討する。さらに、維盛と重衡の愛する者との再会をめぐる対照性、重衡生捕りの出来事と維盛が妻子と再会することとの結びつきを考察し、それは維盛の入水前の妄念と、妻子を救済するという造型とどのように関連しているのかを明らかにする。

一　北の方の苦悩とその克服の様相

本節では、維盛の生前とその死後の二つの項目に分けて、北の方の苦悩とその克服の様相を考えることとする。

一-一　夫の生前

まず、北の方が平家の都落ちの前に維盛と別れる場面を見ていく。平家は木曽義仲の軍が都に迫ってくることを聞いて都落ちを決定する。その時、一門の多くが家族を都落ちに同行させるが、維盛は妻子を都に残すと決意する。別れる際に、維盛はどこにでも妻を連れていきたかったという思いを吐露しながら、流浪の旅や敵襲の危険を考え、都に残るようにと北の方を説得する。又、次のように遺言を残す。

世ニナキ者ト聞ナシ給トモ、アナカシコサマナムドヤツシ給ナ。イカナラム人ニモミヘ給ヒテ、少キ者ドモヲモハグヽミ、我身ノ後世ヲモ助給へ。

〔第三末　「惟盛北方事」六四頁〕

右のように、もし自分が亡くなったと聞いても、出家せず再婚し、子供を育てて菩提を弔うようにと北の方に遺言をする。その遺言を聞いた北の方の反応は次のように描かれている。

年来日来ハ志シアサカラヌヤウニモテナシ給ツレバ、我モサコソタノミ奉リツルニ、イツヨリ替リケル心ゾヤト思コソ口惜ケレ。前生ニ契アリケレバ、我ヒトリコソ哀ト思給トモ、人毎ニナサケヲカクベキニアラズ。又人ニミヘ候ベシトモ思ワズ。少者共モ打捨ラレ奉リテハ、イカニシテカハアカシクラスベキ。誰ハグヽミ、誰アワレムベシトテ、カヤウニ留メ給ゾ

〔第三末　「惟盛北方事」六四頁〕

北の方は都に残されることと、再婚せよという夫の思いを承諾できず、夫婦の契りによる深い恩愛を訴える。場面の終わりに、北の方と維盛の馴れ初めが記されている。北の方は維盛と結ばれる前に、かつて後白河法皇から文を送られたことがある。しかし、その文の返事を拒否したがゆえに、父に親子の縁を切られる。法皇の申し出を無視する態度を取った原因は、彼女が維盛に思いを寄せていたからである。その思いを彼女に仕える女房から聞いた維盛は、密かに北の方を迎えにきた。再婚を承諾しない北の方の言葉に続き、この馴れ初めが置かれていることを見ると、死別しても変わらない夫に対する深い恩愛を示唆する物語の意図が窺われるだろう。

ここで注目すべきは、北の方が維盛と別れる際に、抱え込んだ苦悩を告白することである。

父モナシ、母モナシ。都ニ残留リテハ、イカニセヨトテ、フリステヽ出給ゾ。野末山末マデモ引具シテコソ、トモカクモミナシ給ハメ」トテ、人目モツヽマズナキモダヘ給ヲ、見ステガタク心苦クテ、「サリトテハ、イヅクニモ落付ム所ヨリ忿ギ迎取ムズルゾ」ト、ナグサメ給ホドニ

〔第三末　「惟盛与妻子余波惜事」七三頁〕

北の方は維盛の袖にすがりついて、波線部のように、恵まれない境遇を吐露する。「成親卿ノ北方君達等出家事」において、北の方の父大納言成親は、平家打倒の陰謀を企てた罪によって流罪となり、後に殺されたことが描かれている。彼女の母が父の死を聞いた場面は次のように記されている。

自ラ御グシヲ切給テケリ。雲林院ト申テ、寺ノ有ケルニ、忍テ参給テゾ、戒ヲモ持給ケル。又其寺ニテゾ、如形ノ追善ナムドモ営テ、彼ノ菩提ヲ訪奉リ給ケル。若君閼伽ノ水ヲ結ビ給ケル日ハ、姫君ハ樒ヲツミ、姫君水ヲ取給日ハ、若君花ヲタヲリナムドシテ、父ノ後世ヲ訪給モ哀也。

〔第一末　「成親卿ノ北方君達等出家事」二〇三頁〕

父の死を聞いた彼女の母は出家をして、子供とともに菩提を弔う。引用文に、北の方のことは明確に示されていない。しかし、維盛と別れる際の、北の方の恵まれない境遇についての告白から、父の死を歎いた子は北の方のことと知られるだろう。

以上の北の方の告白から、そもそも持っていた孤独感と、これから頼れる人がいなくなる不安感を抱いていることが読み取れる。維盛はそのような悲歎に暮れる北の方を見ると、傍線部のように、落ち着いたら迎えをよこすと約束して彼女の悲しみを慰める。

以上のように、維盛と別れる場面において、物語は単に離別を歎く北の方の姿を描き出すだけでなく、その苦悩の根本的な原因として、彼女の孤独感、不安感、夫婦の恩愛を示している。

維盛は都落ちして以来、都に残した妻子を恋しく思い、悲歎に暮れるばかりである。北の方も「相構テ迎取給ヘ。少キ者共モナノメナラズ恋シガリ奉ル。ツキセヌ歎ニナガラウベクモナシ」とあるように、自らと子の悲歎を維盛宛ての文に語る。又、一の谷合戦で討ち取られた平家の人々の首が都の中に晒されたことを聞くにつけて、「イカニモ此人ハノガレジ物ヲ」とあるように、維盛の安否を思い煩い、使いをつか

わして確認させる。その使いは維盛の首が見当たらないと報告し、人に聞いたところによると、維盛が病気になり、戦場に出ていないということを語る。維盛の病気を心配している北の方の姿は次のように描かれている。

①穴心ヅヨノ人ノ心ヤ。所労アラバ、『カウコソアレ』ト、ナドカ告ザルベキ。軍ニアワヌホドノ所労ナレバ、大事ニコソ有ラメ。思歎ノツモリニヤ、病ノ付ニケルコソ。都ヲ出デヽヨリ、②我身ノワビシキト云事ヲバ一度モイワズ。『只少者共コソ心苦ケレ。終ニハ一所ニコソスマセウズレ』トノミナグサメシカバ、サコソ憑ミタルニ、サテハ身ノ煩ヒケルニコソ。皆人モ具スレバコソ具シタルラメ。野ノ末、山ノ末マデモ、一所ニ有バ互ニ心苦サヲモナグサムベキニ、カヤウニノミナク悲シサヨ」トテ泣給ヘバ、

〔第五本　「維盛ノ北方平家ノ頸見セニ遣ル事」二八九頁〕

ここで注目したいのは、北の方が維盛の心中を推し量った箇所である。北の方は、維盛が病のことを知らせなかったことを、①傍線部「穴心ヅヨノ人ノ心ヤ」と述べ、又、都を出て以来、②傍線部「我身ノワビシキト云事ヲバ一度モイワズ。」と語っている。これらにより、心強いという維盛の外面的な性格が示されている。さらに、二重傍線部「思歎ノツモリニヤ、病ノ付ニケルコソ」とあるように、彼女は妻子との離別に苦しむ維盛の心底を推し量ることができる。場面の終わり、波線部に、維盛と一緒にいることができれば彼が抱え込んだ苦悩を慰めたい、という北の方の願望が窺える。

一方、北の方の安否を気遣う維盛の姿は次のように描かれている。

中将モ通フ御心ナリケレバ、「都ニイカニオボツカナク思ラム。首共ノ中ニモナケレバ、水底ニ入ニケルトコソ思ラメ。（後略）」

（北の方への文：執筆者注）「今日マデハ露命モ消ヤラズ。少キ人々何事カアルラム」ナド細々ト書給テ、ヲクニ、

イヅクトモシラヌナギサノモシヲグサカキヲクアトヲカタミトハミヨ

ト書給ヘリ。

〔第五本　「維盛ノ北方平家ノ頸見セニ遣ル事」二九〇頁〕

傍線部のように維盛も、北の方が不安感を抱きながら安否を気遣っているだろうと推し量る。そこで、自らの安否を知らせるために、妻子へ文を書いて歌を添える。この歌の内容から、北の方の再会への期待に応えられないだろうという不安感が読み取れる。

以上のように、維盛と北の方が互いの気持ちを察しているが、これは単なる夫婦の深い恩愛を示すものではない。互いの気持ちが通じ合うからこそ、彼らの苦悩が一層高まるのである。

延慶本においては、維盛入水の場面の終わりに、夫の便りがないことで不安になった北の方が、維盛が入水したことを使者から聞き、「サマヲモ傷、身ヲモ投給ヌベクゾ覚ヘシ」と述べて泣き悲しんだことが記されている。しかし、覚一本のように、すぐに出家して夫の供養を果たしたとは描いていない。

維盛の死後における北の方の経緯について、山根対助氏[7]は『尊卑文脈』をふまえて、北の方が吉田大納言経房と再婚したという史実を取り上げ、彼女の再婚は六代の生命を守るためだと論じている。山根氏の指摘によれば、延慶本は覚一本のように北の方が出家したことを虚構として語らず、しかしながら、再婚するという事実にも言及しないのである。では、物語において、夫の死後、再婚しない北の方はどのように苦悩を克服して、子を守っているのかという問題点を考察する。

一-二　夫の死後

平家の滅亡後、平家の残党狩りが行われ、その中で、維盛の息子、六代の捜索に力が注がれる。北の方は子とともに大覚寺にひっそりと暮しているが、北条時政に見つけられ逮捕される。六代が連れていかれることを歎いた北の方の姿は次のように描かれている。

責テノ事ニ、手箱ヨリ黒キ念珠ノ少(小)ヲ取出テ、「何ニモナラムマデハ是ニテ念仏申テ、極楽ヘ詣レヨ」トテ、若君ニ献リ給ヘバ、母ニハ、「只今離マヒラセナムズ。何クニモ父ノオワシマサム所ヘゾ参リタキ」ト宣ケルニゾ、イトゞ哀ニ思シケル。今年ハ十二ニコソナリ給ヘドモ、十四五計ニミヘテ、ナノメナラズウツクシクテ、故三位中将ニ少モ違給ハネバ、「穴悲ヤ。アレヲ失テムズル事ノ悲サヨ」トオボスニ、目モ晩心モ消テ、夢ノ心地ゾセラレケル。

〔第六末　「六代御前被召取事」四八三頁〕

右のように、北の方は家の滅亡により夫と死別し、又、子を捕らわれて離別するという幾重もの苦悩をしている。特に、傍線部「故三位中将ニ少モ違給ハネバ」と描写される六代の容貌は亡き夫を思い起こさせることによって、彼女の悲しみがより一層強調されている。ここで見過ごすことができないのは、北の方が夫のように子を亡くすのを恐れて歎いたものの、夫と別れる際と異なる行動をすることである。六代と別れる前に、彼女は数珠を渡して、波線部「何ニモナラムマデハ是ニテ念仏申テ、極楽ヘ詣レヨ」と述べる。このような北の方の言葉から、子の死を覚悟して、仮に彼が殺されるとしても、仏の力によって子を極楽へ導いてもらいたいという意志を持っていることが読み取れる。このように、悲哀に暮れるばかりであった夫の存命中と異なり、離別による苦悩に向き合い、その苦悩を仏の力によって克服しようとする北の方の姿勢が見出される。このような姿勢はその後の場面において明確化される。六代が連れていかれた後、北の方の反応は次のように描かれている。

「哀、我子ヲバイカニシテカハ失ワムズラム。是ハヲトナシケレバ首ヲゾ切ムズラム。イタシトヤ思ワムズラム。怖シトヤ思ムズラム。何ナリケル契、イカナリケル罪ノ報ヒニテ、カヽルウキメヲミルラム。観音コソサリトモ助給ワムズラムト、深ク恃奉リツルニ、遂ニ取ラレタル事ノ悲シサヨ。（中略）是ハ生ヲトシテ後ハ今ニ至ルマデ、一日片時身ヲ放タル事モナシ。朝夕二人ノ中ニヲヽシ立テ、明テモ晩テモ見ニアキダラズ。持マジキ物ヲ持タル様ニ覚テ、糸惜悲ト思ハ愚也。此三年セハ、今ヤ今ヤト、夜昼肝心ヲケシテ、明シ晩シツレドモ、只今俄ニ出来タル不思議ナムドノ様ニサヘ覚ルゾヤ、コヨヒニモヤ失テムズラム」ト、心中ニハナノメナラズ思ナガラ、遁ガタキ

事ト思テ、「我ヲナグサメムトテ、イタクナゲカヌサマニモテナシテ、出ヅル面影、生々世々ニモ妄ルベシトモ不覚」。遂ニハ世ニアルマジキ者ナレドモ、責テハ今一度イカヾシテ可見」ト、音モ不惜」泣モダヘ給モ、ゲニ理ト覚ヘテ、ヨソノ袂モシホレケリ。

〔第六末　「六代御前被召取事」四八四 - 四八五頁〕

北の方は子の命を心配し、大切に育ててきた子への恩愛の情を語る。傍線部のように、彼女はいつか子が殺されるだろうと、以前から覚悟しながらも、不安を抱えている。波線部では、観音こそ子の命を救うことができると深く信じていたのに、とうとう捕えられたことが悲しい、と北の方は歎く。後に観音の利生により、六代の助命が実現されたことを見ると、物語は観音の救済に対する彼女の疑心というより、観音の利生によって子の命を守ることができる、と以前から信じていた態度を暗示していると考えられる。

観音の利生に対する北の方の信心に関しては、文覚上人が六代の助命を引き受ける場面と、子の無事を聞く場面においても、明確に表されている。頼朝と懇意の文覚上人が六代の助命を引き受けたことを聞いた北の方は、文覚の行動を「是直事ニ非ズ、偏ニ長谷寺観音ノ御助ニテアレバ、始終モタノモシク」とあるように、観音の利生として受け取っている。

又、六代が頼朝に赦免されたことを聞いた北の方の反応は、次のとおりである。

若君都ヲ出給ニケル日ヨリ此寺ニ籠給テ、夜昼御堂ニ臥沈テ、血ノ涙ヲ流テ祈申給ケル験ニヤ、大慈大悲ノ御誓、罪アルモ罪ナキモ助給事ナレバ、昔モ今モカヽルタメシ多カリケリ。法花ノ普門品ニ云ク、「設復有人、若有罪、若無罪、杻械枷鎖、検繫其身、称観世音、菩薩名者、皆悉断壊、即得解脱」ト云ヘリ。末代ト云ナガラ、不思議ノ利生ト覚ヘタリ。観音ニ暇申テ泣々忿出給タレバ、若君ヤガテオハシタリ。

〔第六末　「斉藤五長谷寺へ尋行事」四九七頁〕

長谷寺に参籠中、北の方は六代の使いである斉藤五から子の無事を聞いて、子の助命の願いを成就させる観音の利生を賞賛する。子が逮捕され、都を出て以来、北の方は長谷寺に参籠してひたすらに子の無事を祈願することや、観音の慈悲、法華経の経文を語ることには、苦悩を克服するために、神仏の力に帰依するという北の方の姿勢が端的に表されている。岡田三津子氏は延慶本のこの場面を通じて、六代の助命および母子の再会の構想と、観音の利生との結び付きを指摘している。[8]

北の方は子との再会を遂げた後、六代に早く出家するようにと勧める場面まで登場している。六代は高雄で文覚上人に育てられ、十六歳になった年に高野山へ参って滝口入道から父の最期を聞く。その後出家修行をして父の菩提を弔うが、最終的に殺され、平家の子孫は永久に絶える。

北の方が亡き夫の代わりに、子を育て、又、子の命を守るために観音の利生に帰依して苦難を乗り越えるという設定については、他の女性登場人物の記述にも存在している。例えば、『平治物語』においては、源義朝の妻である常葉は夫の死後、清水寺に参籠して子供の無事を祈ったという記述がある。最終的に、子が処刑を免れた際に、彼女は「一日片時も、命のあるこそふしぎなれ。これさながら、清水の観音の御助なり」と述べて、子の無事を観音の助けによるものと思っている。このように、北の方の後日談には夫の死後、妻が子の無事のために観音の利生に帰依するという典型的な設定が据えられていることが窺われる。

以上のように、北の方は夫と死別し、又、捕えられた子が殺されるかどうかという不安を抱き、苦悩が重なっている。苦悩の克服については、夫の存命中は、離別により嘆き悲しむばかりで、苦悩を克服しようとする行動が見られない。しかし、夫の死後、彼女は子との離別の苦悩に立ち向かうと同時に、子の命を守るために、再婚せず仏の利益に対する深い信仰を持って苦悩を克服しようとする。又、夫のために菩提を弔う役割を果たしたことは描かれていないものの、以前、夫に託された遺言に見られるように、菩提救済が求められている。このような北の方の言動から考慮すると、北の方は愛する者の無事を祈り、菩提を弔うという愛する者を救済する立場に置かれていることが窺える。それは先行研究の指摘のように、多くの女性登場人物の役割と共通している。では、視点を変えて維盛の立場から見ると、北の方の造型には他の女性登場人物との相違点があるのかを次節で考察する。

二　維盛の最期における苦悩とその克服

本節では、維盛が一門から離脱する場面から、入水の場面までの彼の心情を分析する。先行研究の維盛と重衡の対照性、結びつきに関する見解に基づいて、維盛の恩愛による妄念の存在に着目して探ることとする。

維盛が一門から離脱する場面において、妻子への恋しさが募ったことと、平家を裏切るのではないかという宗盛らの疑惑に耐え切れないという理由により、維盛は三人の従者を伴いひそかに屋島を抜け出す。[9] 紀伊国に着いた時、山伝いに都に戻って一度妻子に会いたいが、重衡のように生捕りとなって恥を晒し、亡き父の名を辱めるべきではないと考えた上で、上京せず高野山に向かう。ここに、妻子と再会するという願望を実現するより、名誉を保つことを決断した維盛の態度が窺われる。しかしながら、妻子と再会できないという悲しみは彼の心から離れない。

出家の場面において、滝口入道が髪を剃った際に、「「北方ニ替ラヌ形ヲ今一度見ヘ奉テ角モ成ラバ、思事アラジ」ト思食ゾ罪深キ。」とあるように、維盛は北の方と再会せずに出家することを後悔する。そのような思いは「罪深キ」と、物語から評されている。

恩愛で揺れ動く維盛の姿は、入水の直前にも繰り返される。

正ク向西一、念仏申給心中ニモ、「既ニ只今ヲ限レバ、争カ知ベキナレバ、風ノ便ノ言付モ、今ヤ〳〵ト待ンズラム。終ニハ隠有マジケレバ、此世ニ無者ト聞テ、幾計歎ムズラム」ト思連ケラレ給ヘバ、主従念仏ヲ止、合掌ヲ乱テ、聖ニ向テ宣ケルハ、「哀、人ノ身ニ妻子ト云者ハ、持マジカリケル者哉。①此世ニテ物ヲ思ハスルノミニ非ズ。後世菩提ノ障ト成ケル事ノ悲サヨ。（中略）本宮証誠殿ノ御前ニテ、夜終後世菩提ノ事ヲ申シニ、少者共ノ事思出サレテ、『吾身コソカク成ヌトモ、妻子平安ニ守給ヘ』ト申サレキ。且ハ神慮モ恥敷コソ覚シカ。只今最後ノ一念ナレバ、又何事ヲカ思ヒ増スベキニ、如何ニ聞テ悶絶コガレムズラムト思出サルヽゾヤ。是ヲホダシト云、是ヲ紀綱ト名付ケルモ今コソ思合ラルレ。②思事ヲ貽ス心二ハ罪深カムナレバ、懺悔スル也」ト宣ケレバ

〔第五末　「惟盛身投給事」三四三‐三四四頁〕

念仏を唱えながらも、傍線部のように、自分の死を聞いた妻子はどのように悲しみ嘆くだろうという妻子への思いが心中に浮かんできた。しかし、①波線部、維盛は妻子を、現世での物思いの原因、来世でも往生を妨げるものと思い、②波線部、念仏を唱えている時に、思い残すのは罪深いことだと自覚している。ここで注目したいのは、仏の力に帰依し、妻子の無事を祈願する維盛の姿である。二重傍線部のように、自らの菩提とともに、妻子の平安も祈ったことに、現世における苦悩から妻子を救いたいという願望が露呈する。

滝口入道は維盛の悲しみを慰めるために、世の慣わしとしての離別を語りつつ、出家の利益や阿弥陀仏の救済を説法する。最後に、次のように述べている。

成仏得脱シテ悟ヲ開給ナバ、娑婆ノ故郷ニ立帰リテ、難去被思食_人々ヲモ導キ、悲ク思召ン人ヲモ奉見_事、環来穢国度人天ノ本願、ナジカハ疑ベキ。侍我閻浮同行人ノ誓約、少モ謬ルベカラズ」トテ、頻ニ輪(鈴)ヲ打鳴シ、隙無ク奉勧_ケレバ、「可然善知識」ト喜テ、忽ニ妄念ヲ翻シテ、向西_叉手_ヲテ、高声念仏三百余反唱澄テ、即チ海ヘゾ入給フ。

〔第五末　「惟盛身投給事」三四六－三四七頁〕

滝口入道は傍線部のように、成仏できれば娑婆の故郷に戻ることができ、悲しみに沈む妻子と再会して導くこともできると説く。ここで注目すべきは、「難去被思食_人々ヲモ導キ、悲ク思召ン人ヲモ奉見_事」という説法を聞いて、波線部のようにすぐに妄念を翻し、念仏を繰り返して唱え、入水を遂げた維盛の姿である。このことから見ると、維盛は妻子との再会への期待と、彼らを極楽往生へと導きたいという意志をもったことにより、一心に極楽往生へ向かうことを決意したと見られる。

妻子を現世における苦悩から救おうとする維盛の行動は、別れる前に頼れる人がいない北の方へ、自らが亡くなっても出家せず再婚せよという遺言をしたことと、仏の利益に帰依し、妻子の無事を祈ったことにも見られる。さらに、最期の場面において、妻子を現世における苦悩から救うに止まらず、極楽往生へと導く、いわゆる後世救済したいという維盛の意志が見て取れる。妻子を救済しようとする維盛の行動は、

物語を通じて一貫していると言えるだろう。又、このような維盛の姿勢を北の方の立場から考えると、北の方の造型には夫に救済される表象が見えてくる。

こうして、北の方の造型には前節で考察した愛する者を救済する他に、夫に救済される表象も見て取れ、愛する者を救済する役割のみ与えられる多くの女性登場人物との相違点が窺われる。では、夫に救済されるという北の方の表象は、物語が女人救済の構想を提示するために作り出されたのか、それとも物語の別の意図から生じたものなのか。

四重田氏は都落ち以後の維盛と重衡の記述の内容を対比し、幾つかの論点を取り上げている[10]。例えば、主従の関係に関しては、維盛が戦場を後にする際に、

常ニハ都ノ事ノミゾ恋ハ被思ケル。此浦ノスマヒ、浪上ノ有様、早晩ヲ可期ナラネバ、是モ三月十日、侍ニハ余三兵衛重景、近習者ニハ石童ト云シ童、舎人ニハ武里ト云シ男、此等三人ヲ召具テ、更闌人定テ、忍ツヽ屋嶋ノ館ヲ出給フ。

〔第五末　「惟盛卿高野詣事」三二〇頁〕

とあるように、三人の従者は共をする。又、重景と石童丸は後に維盛と一緒に出家入水し、武里も出家入水を望む。四重田氏は維盛のこの記述を「腹心の部下との心の絆が強調される」と述べ、それに対し「重衡は、「一所ニテ死ト契深カリケル」後藤兵衛尉盛長に見捨てられて、生け捕りの憂き目に合う。」という彼らの主従関係の対照性を指摘している。

又、重衡と維盛の恩愛や、愛する者との再会についても言及されている。一ノ谷合戦で生捕りされた重衡は、内裏女房と再会する前に「但最後ノ妄念トナリヌベキ事アリ。」と信時に述懐したように、妄念が残っている。又、北の方と対面した際に、「今ハ思ヲクベキ事ナシ。ヨミヂモ安ク罷ナンズ。」とあるように、最後に彼女と再会でき、この世に思い残すことはない、安心して冥途へ行くことができると述懐している。重衡は最後に愛する者と再会でき、互いに思いを語り合ったことによって、妄念から離れることができた。

恩愛による執着に囚われていない重衡の姿については、四重田氏は子がないという重衡の述懐に着目して論じている。「重衡卿千手前ト酒盛事」の末尾において、

サテモ中将ハ御子ノ一人モオハセヌ事ヲ歎給シカバ、二位殿モ無本意事ニ思ヒ、北方、大納言佐殿モ不斜歎給ケリ。神明仏陀ニモ祈請シ給ヒキ。「賢クゾ御子ノ無リケル。有セバ何ニ心苦カラマシ」ト、責ノ事ニハ被思ケリ。

〔第五末　「重衡卿千手前ト酒盛事」三二〇頁〕

右のように、昔、母二位殿と北の方に子がないことを残念に思って歎いたが、生捕りされた今の自分を見て、子がなくてかえってよかったと重衡は吐露する。この重衡の述懐に続く「惟盛卿高野詣事」において、維盛は妻子と再会したいという思いに耐えられず、戦線を離脱して都へ向かうが、「本三位中将ノ被生取テ、京田舎人ノ口ニ乗ダニモ心憂ニ」という理由で、高野山へ道筋を変更するということが記されている。このような設定において、四重田氏は「妻子への恩愛を境として重衡と維盛を対照的に描くという『延慶本』の表現の構造」を指摘している。

先行研究で指摘されたように、子がなくてかえってよかったという重衡の述懐および重衡の生捕りのことをきっかけに、維盛が妻子との再会を断念するという設定から、恩愛の点で維盛と重衡を互いに結びつけながら、対照させようとする物語の意図が読み取れる。

ここで注目したいのは、維盛が重衡生捕りのことを考えて恥を重んじたがために、妻子との再会を断念したという設定である。このような維盛の判断は、維盛が上京しないことを決意する場面、滝口入道に懺悔する場面、そして入水の場面と三つの場面に記されている。

《維盛が上京しないことを決意する場面》

故郷へ上テ、恋キ人ヲモ今一度見ン」ト思食ケルガ、様ヲ傷給ヘドモ猶人ニハ紛ベクモナシ。本三位中将ノ被生取テ、京田舎人ノ口ニ乗ダニモ心憂ニ、我サヘ憂名ヲ流テ、差シモ賢ニオハセシ父ノ首ニ、血ヲアヤサム事口惜テ、千度百般心ハ進給ケレドモ、恋ト恥トヲ比レバ、恥ハ猶モ悲テ、泣々高野山へ詣リ給ヒ

〔巻第五末「惟盛卿高野詣事」三二〇－三二一頁〕

《維盛が滝口入道に懺悔する場面》

古里へ如何ニモシテ尋入、不替形ヲモ今一度見ヘタカリツレドモ、重衡卿ノ被生取テ、京鎌倉嫐ハルヽダニモ心憂ニ、此身サヘ恥ヲサラシテ、父ノ骸ニ血ヲアヤサム事ウタテケレバ、是ニテ出家ヲシ、水ノ底ニモ入ナムト思フゾ。

〔巻第五末「惟盛卿高野詣事」三二一－三二二頁〕

《入水の場面》

若都ヘヤ上テ、今一度見モシ見ヘモセバヤトテコソ、迷出テ有シカドモ、本三位中将ノ被生取テ、京鎌倉恥ヲサラスダニアルニ、我サヘ捕ヘ搦ラレム事モウタテケレバ、思念ジテ加様ニ髪ヲ下シテシ上ハ、今更妄念有ベシトモ覚ヘザリシニ、本宮証誠殿ノ御前ニテ、夜終後世菩提ノ事ヲ申シニ、少者共ノ事思出サレテ、『吾身コソカク成ヌトモ、妻子平安ニ守給ヘ』ト申サレキ。

〔巻第五末「惟盛身投給事」三四四頁〕

ここで重要なのは、維盛が妻子への再会を断念する理由の提示である。三つの場面においても、波線部のように、妻子と再会しないという維盛の決意を語る際に、重衡の生捕りがその理由として取り上げられている。それに対し、傍線部の亡き父の名を辱めるべきではないという理由は、上京しないことを決意する場面と、懺悔する場面において語られているが、入水の場面にはない。入水の場面において、重衡生捕り

という理由のみ取り上げる点から見ると、重衡の生捕りは維盛に妻子との再会を断念させる重要な要因として前面に押し出されていると考えられる。

維盛の入水の場面において、妻子と再会しない理由の語りに続き、二重傍線部のように、出家して妄念があるべきではないが、妻子のことを案じて仏に彼らの無事を祈ったとあり、妄念を露呈する。さらに、入水の直前、一心に念仏を唱える際に、妻子と再会し極楽往生へと導きたいという意志が表明されている。このような一連の出来事を見ると、物語が重衡生捕りのことを、入水の場面で繰り返し語ることは、維盛に妻子との再会を断念させる要因だけでなく、妄念から離れられない維盛の最期へと展開する仕掛けと捉えられる。入水の直前に表される妻子を救済しようとする維盛の行動、あるいは、夫に救済される北の方の存在は、このような仕掛けの結果と考えられるだろう。このように、重衡と維盛を結び付ける仕掛けが設定されたからこそ、恩愛を持って往生を遂げようとする維盛の独自な有様が提示され、一方、夫に救済されるという北の方の独自性も引き出されると推定されるのである。

おわりに

以上のように、維盛の北の方は、恵まれない境遇や、夫子との離別などによる多くの苦悩を背負っているが、最終的に、神仏の利益に帰依して、苦悩を克服しようとする者として造型されている。夫の存命中に死後の供養を託され、又、神仏の利益に帰依し子の無事を守ることは他の女性登場人物の造型にも見られ、類型的な妻母の役割と見做される。しかしながら、そうした類型的な造型以外に、往生を遂げて妻子を救済したいという維盛の意志が示されることによって、夫に救済される存在としての一面も浮かび上がってくる。そのような北の方の表象は物語が女人救済の構想を提示するために作り出すのではなく、重衡と維盛を対照的に結び付け、恩愛による妄念から離れられない維盛の最期へと展開する仕掛けから形成されたものと推測される。このように、夫に救済されるという北の方の表象は単なるその仕掛けの結果でありながらも、夫の菩提を弔って救済する役割のみ果たす多くの女性登場人物とは異なる特質だと言えるだろう。

注

（1）郭順伊「維盛北の方の造型」（『広島女学院国語国文学誌』三六　二〇〇六年十二月）

（2）池田敬子「心弱き人の往生―維盛―」（『軍記と室町物語』清文堂　二〇〇一年、初出一九七七年）

（3）牧野淳司「『平家物語』維盛身投げ物語の位置」（『日本文学』五七‐七　二〇〇八年七月）

（4）秋山寿子「二人の三位中将―重衡と維盛をつなぐもの―」（『軍記文学の系譜と展開』汲古書店　一九九八年）は、重衡と維盛がそろって登場することについて、『公卿補任』や、『山槐記』を取り上げ、立后、中宮の出産、親王の立太子に際して、二人そろって登場し、中心的な役割を担っていることを指摘している。又、『右京大夫集』における二人の記述の位置について、次のように論じている。

「恋人の兄（維盛）との贈答」の記事の後に「重衡の鬼物語」「重衡とのよしなしごと」の記事が続いたり、重衡生捕りの記事の後に維盛入水の記事を置いたりという点からも、二人と個人的に親しくしていた右京大夫にとって、両者が無意識のうちにも連想されやすい間柄であったことが、垣間見える。

（5）鈴木則郎「『平家物語』における平維盛像についての一考察」（『東北大学文学部研究年報』二九　一九八〇年八月）

（6）四重田陽美「『延慶本平家物語』における維盛像の検討」（『大谷女子短期大学紀要』四十　一九九六年十二月）

（7）山根対助「維盛北の方の再婚をめぐって」（『日本文学』二一‐十一　一九七二年十一月）

（8）岡田三津子「『六代御物語』の形成」（『国語国文』六二‐六　一九九三年六月）は、延慶本において、大覚寺と長谷寺の二つの場面で母を探し求める苦労が描き出されることに着目し、

誰もいない大覚寺の宿所での六代の歎きと、長谷寺で一晩中人々の声を聞き分けようとする斉藤兄弟の姿。再会の喜びは、それを妨げるものを克服することで、より一層強調される。大覚寺でも会えない。長谷寺だと聞いて駆け付けても参籠の人々が多くて巡りあえない。その時に再会のきっかけとなるのが、観音経読誦の声である。長谷寺という場で、観音に祈る声に導かれて、つまりは観音に導かれて再会が果たされる。

と述べており、観音の利生が六代助命のみならず、母子との再会にまで及んでいることを論じている。さらに、延慶本は六代助命と母子再会のいずれの構想においても観音の利生を示しているのに対し、他の諸本は観音の利生による六代助命のみを重視することに着目し、延慶本と他の諸本における観音の利生の相違点を指摘している。

（9）平家一門の疎外者としての維盛の存在と、一門から離脱する際の心情について、鈴木則郎（前掲注（5）著書）は、維盛が北の方と離別する場面における、「大臣殿サラヌダニ、惟盛ヲバ二心アル者ト宣ナルニ、今マデ打出ネバ、イトヾサコソ思給ラメ」という維盛の言葉に着目して、次のように論じている。

都落ちの時点から、二心ある者として猜疑の目でみられる自己をはっきりと自覚する維盛が捉えられていたが、都落ち以降の段階に至ると、それは妻子に対する思慕の情とオーバーラップする形で増幅し、維盛の行動を規定するとともに、維盛像に深刻な孤独感と暗い孤独の影を付与する結果となっているといえよう。

（10）四重田（前掲注（6）著書）は、維盛と重衡の記述の内容の他に、表現を対照している。例えば、彼らの妻と別れる場面において、

《重衡の北の方》

「恥ヲモ顧給ワズ、御簾ノキワニマロビテ出給テ、モダヘコガレ給フ。御音ノ遙ニ門外マデ聞ヘケレバ」

《維盛の北の方》

「恥ヲモカヘリミズ、スダレノキワニマロビフシテ、声モヲシマズヲメキ給フ」

四重田氏は別れに堪えきれず御簾の側に駆け寄り、御簾の傍らで悲歎に暮れるという重衡と維盛の妻の姿の描写に着目し、彼女たちの記述における愛し合う夫婦の別れの表現に類似が見られると指摘している。

使用テキスト

- 『延慶本平家物語本文篇上』（勉誠社　一九九〇年）
- 『延慶本平家物語本文篇下』（勉誠社　一九九一年）

- 『新編日本古典文学全集４６　平家物語２』（小学館　二〇〇六年）
- 新日本古典文学大系『保元物語・平治物語・承久記』（岩波書店　一九九二年）

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。

第四章　学習院本『平治物語』における常葉
―母子救済の様相をめぐって―

はじめに

常葉は、平治の乱で夫源義朝が敗死した後、平家による源氏残党の探索から逃れるために、三人の子供を連れて雪の中を逃亡し、険しい道を歩む。又、彼女の母が平家方に捕えられたことや、子の命を犠牲にして母を助けようと決断することにより、苦悩を抱え込んだ女性として描かれている。こうした常葉の苦悩は『平治物語』のいずれの諸本にも描かれているが、細部を見てゆくと、相違点が見られる。

『平治物語』諸本における常葉譚の違いについては、多く論じられているが、[1]飯塚紀久子氏[2]の論考によると、古態本である学習院大学図書館蔵本（以下、「学習院本」）は常葉の心情および母子の悲劇を主に描き出すのに対し、後出本である金刀比羅本は哀れな一人の女性常葉の悲しみを描き出しつつ、横暴な権力者としての清盛を性格づけようとすることが指摘されている。又、観音利生との結びつきについて、両本とも観音利生を子供の助命の背景として常葉譚の末尾に描いているが、学習院本のみに見られる、老婆に救われる場面における観音利生の賛美に着目すると、学習院本は他の諸本と比べて清水観音の信仰に関わる説話の要素を多分に含んでいると言える。[3]

以上の先行研究から、学習院本は常葉と子供の悲哀と観音利生の語りを重視していると言える。では、学習院本は母子の悲哀と観音救済をどのように表現し、両者を結びつけているのであろうか。多くの論考が着目する描写は次のような場面である。

（イ）（常葉:執筆者注）子共が事は何とも成候へ、母の苦を助候はんとて、子共あひぐして参りてこそ候へ」と申ければ、御所を始まいらせて、ありとあるほどの女房達、皆、涙をぞながしける。世の常の女房の心ならば、「老たる母は今日ともしらぬ命なり。後の世を

こそとぶらはめ。行末とをき子共をたすけん」と思ふべきに、子を皆うしなふ共、母ひとりを助んと申心ざしの有難さよ。仏神、定て御憐あらんずらむ

〔学習院本　下「常葉六波羅に参る事」二五六頁〕

（ロ）子共、かくもならざらんさきに、まづ此身をうしなはせ給へと申さんを、などか聞しめされでは候べき。高きも卑も、親の子をおもふ心のやみは、さのみこそ候へ。この子共にわかれて、片時もたえて有べき身共覚え候はず。わらはをうしなわせ給ひて後にこそ、子共をば御はからひ候はめ。

〔学習院本　下「常葉六波羅に参る事」二五八頁〕

多くの先行研究が注目するのは、（イ）のように、幼い子を失っても老いた母を助けようとする常葉の行動が、二重傍線部「世の常の女房」と対比される場面、あるいは、（ロ）二重傍線部のように常葉が親の情を語る場面である。

この二つの場面を通じて、たとえば、山下宏明氏[4]は「常盤も幼児をかかえる親としてこの母の思いを知ったからこそ〈よのつね〉を越えて自首して出たのである」と述べ、自首を決意した常葉の動機を解釈している。

このように、先行研究は世の常の女性、親の情という他の登場人物の行動に触れ、常葉の行動を解釈している。しかしながら、他の登場人物と常葉の行動を対比する描き方は、前掲の場面のみならず、他の場面にも見受けられ、学習院本常葉譚の特徴と言える。とりわけ学習院本は、母子の悲劇および常葉の心情描写が観音による救済へと展開していく過程において、対比の表現という方法を繰り返し用いている。

以上のような問題意識から、本章では、学習院本と金刀比羅本における常葉譚の比較を通じて、学習院本における母子の悲哀とその救済の描かれ方を具体的に検討する。特に、学習院本が常葉の悲哀と観音救済とを結びつける際に対比の表現を利用することに注目して、学習院本常葉譚における独自性を明らかにすることを目指す。

夫の死後における常葉の叙述は以下のようにまとめられる。

《都落ちの場面》

① 常葉は平家の戦後処理により自らの子も処分されるという噂を聞き、子供を連れて都を逃れようと決心する。

② 清水寺に参籠し、子の助命を祈願して、清水観音の利生に対する篤い信仰を語る。地の文には、その深い信心により、観音が母子の苦悩を哀れみ、救済してくれるだろうと記されている。

③ 逃避行の道中で困難な旅をする。

④ 老婆は、子供を連れて雪の中を彷徨い、悲嘆に暮れる常葉を哀れむ。そのため、彼女たちに宿を貸して様々に労わる。

⑤ 老婆に救われたことを観音の利生として認識し、観音の利生を賛美する。

⑥ 道中、人々に助けられ、大和に無事に到着する。

《六波羅出頭の場面》

⑦ 母が捕えられたことを聞いた常葉は京に戻り、子を犠牲にして母を助けようと決心する。

⑧ 周囲の人々は、常葉が子を犠牲にしてまでも母を助けようとすることに感心し、神仏も彼女と子供の悲哀に同情するだろうと述べている。

⑨ 六波羅に出頭する場面で、死罪を覚悟した常葉は自分を子供より先に斬るようにと清盛に懇願するのに対し、子供はよく命乞いをするようにと母に言う。

⑩ 清盛は常葉と子の言動に心打たれ、処刑の決定を引き延ばす。

⑪ 常葉は処刑の延引を観音の利生として受け取り、観音の利生を賛美する。

⑫ 常葉の子供は罪を免れる。

具体的には、観音による救済への展開と深く関わっている、②清水寺参詣の場面、④⑤老婆に救われる場面と、⑧子供を犠牲にして母を助けようとする場面、⑨～⑪清盛と対面する場面を分析の対象として取り上げ、母子の悲哀の語りと観音救済との結びつきにおける対比の表現に着目する。

一　母子の悲哀の語り

義朝の死後、子義平が斬られ、三男頼朝が生捕りにされる。常葉は彼女の子も処分されるだろうという噂を聞いた際に、三人の子を連れて都落ちをしようと決心する。常葉と子供は雪の中を逃げ、険しい道を歩む。日が暮れ、宿を探していた時に、老婆に出会って救われる。夜が更けて常葉は次のように心中を子供に吐露する。

夜ふけ、人定てのち、母、八子が耳にさゝやきて云やう「あな、むざんの者共がありさまや。世にある人は、十人廿人、子をそだつる人もあるぞかし。後先事は、うき世の習といひながら、同じたけ諸白髪になり、後は二親の跡をとふためしもあるぞかし。をのれらを三人もちたるが、せめてはひとり、そひはてよかし。あすはいかなる者の手にかゝりて、何たる目にかあはんずらん。水にや沈められんずらむ、土にや埋まれんずらん。母とてわれををたのまん事も、子とて汝等を育ん事も、明るをまつ間の名残ぞかし」と、なく〳〵かき口説ければ

〔学習院本　中「常葉落ちらるる事」二四六頁〕

傍線部のように、「世にある人」は十人、二十人の子を育てる、後れ先立つことは「うき世の習」でありながら、兄弟とも白髪になるまで生き長らえ、両親の後世を弔うという例を語る。それに続いて、二重傍線部、三人の子供のうち、せめて一人でも最後までそばに居てほしいと懇願して、自らの絶望感を吐露する。又、子供たちはどのように処刑されるだろうと言って不安感を抱いている姿が描かれている。

周知のとおり、軍記物語における、後れ先立つことはこの世、あるいは、人の「習」であるといった表現は、女性が戦乱で愛する者との離別を覚悟する、それによる悲哀を周囲に慰めてもらう場面によく用いられている。[5] しかし、常葉の場合は、彼女の絶望感・不安感がそれに続いて描写されているように、子供に先立たれることに対する覚悟を示すというより、「世にある人」のように子供が皆生き長らえることは期待できない、子供の命に関する苦悩を強調するために利用されている。その意味で、学習院本は「世にある人」、あるいは、「うき世の習」との対比表現を使用し、母としての常葉の悲哀を描写していると言えるだろう。

一方、金刀比羅本は常葉の述懐を次のように描いている。

二人のをさなき人を左右にをき、一人ふところにいだきてくどきけるは、「あはれ、いとけなきありさまかな。母なれば、われこそ助けんとおもへども、敵とり出しなば、情をやをくべき。少もおとなしければ、今若殿はきるか、乙若殿をばさしころすか、無下にをさなければ、牛若殿をば水にいるるか、土にうづむか、その時われいかにせむ。」と夜もすがらなき悲みけり。

〔金刀比羅本　下「常葉落ちらるる事」二八三頁〕

金刀比羅本は世の習いに言及せず、傍線部のように、母として子供を助けたいと思いつつも、敵に捕らえられたら、殺されるだろうと不安感を吐露する常葉の姿のみ描いている。

こうして見ると、学習院本は不安感を抱く常葉の心境を描くと同時に、「うき世の習」との対比表現を使用して、他人と異なる母としての悲哀の深さを打ち出そうとしていることが見出される。

前掲の引用文に見られるように、都落ちの場面において、常葉は子供の命を助けてもらいたいという思いを語るが、六波羅出頭の場面においては、拷問された母を助けるために、子供を犠牲にしようと決心する。

常葉、大和にて、此事聞伝えて、「わが子を思ふやうにこそ、母もわれをばかなしむらめ。我ゆへ苦をうくと聞ながら、いかでか出て助けざるべき。前世の果報拙て、義朝が子と生れ、父が科の子に懸てうしなはれん事は、其理、有ぬべし。其故もなきわが母の憂き目を見る事は、さながらわが身のとがぞかし。此後も子ほしくは、同じゆかりの子を養ても慰ぬべし。無量劫をへてもあらざる親子の中也。責殺されてのちは、悔しむともかひあらじ。母、此世にある時、出て助けん」と思て、

〔学習院本　下「常葉六波羅に参る事」二五五頁〕

常葉は子供への自らの思いを、彼女のことを思い悩む母の気持ちと照らし合わせて、母を助けようと決心する。又、傍線部のように、子供が殺されることを、前世の果報や夫の罪の結果として受け止めている。

子供の助命を求めていない常葉の姿は、清盛と対面する場面においても語られている。

「左馬頭、罪ふかき身にて、其子共、皆うしなはれんを、一人をも助させ給へと申さばこそ、其理しらぬ身にても候はめ。子共、かくもならざらんさきに、まづ此身をうしなはせ給へと申さんを、などか聞しめされでは候べき。高きも卑も、親の子をおもふ心のやみは、さのみこそ候へ。この子共にわかれて、片時もたえて有べき身共覚え候はず。わらはをうしなわせ給ひて後にこそ、子共をば御はからひ候はめ。此心ざしを申さんためにこそ、左馬頭が草の陰に恥を見せて、かゝる憂形勢を思ひもしらず、これまで参て候へ。（後略）」と、なく〳〵くどき申せば、

〔学習院本　下「常葉六波羅に参る事」二五八頁〕

傍線部のように、常葉は清盛と対面した際にも、夫の罪を覚悟し、子供の助命を期待していないと繰り返し訴える。ここで注目すべきは、子供の処刑に対する覚悟に続く、母としての常葉の思いの描写である。常葉は子供が殺される前に、自分を先に斬るようにと清盛に懇願する。それに続いて、二重傍線部のように、身分の上下を問わず、おしなべて皆、子供のことを思い悩むという親の情を語り、子供を失うこ

とによる悲嘆を吐露する。このように、学習院本は子供の処刑に対する覚悟を語り、それに続いて、親の情を通じて、子供に対する愛情を描写したことによって、子供の処刑に対する覚悟と子供に対する愛情との葛藤が見出される。

一方、金刀比羅本は常葉が母を助けようと決心する際に、前世の果報、あるいは夫の罪に対する覚悟を描かず、郭巨の故事を、母の命を助けるきっかけとして語っている。

大和にて常葉此由つたへきゝ、「昔の郭巨は、母の命をたすけん為に、子どもをうづむとて穴をほりしかば、金の釜をほりいだし、母も子どもをも助るとぞうけ給はる。命あらば母をみるべし。少き者どもにはいかでか思ひかへ候べき。」とて、おさなき人々を引具して六波羅へいでけるが、（後略）。

〔金刀比羅本　下「常葉六波羅に参る事」二八四-二八五頁〕

傍線部のように、貧しい郭巨は母の命を助けるために、子供を埋めて殺そうとしたが、穴を掘ったところ、金の釜を見付け、母も子供も助かったという故事が引用されている。

常葉に対面して、「この間いづくにありけるぞ。」と宣へば、常葉、「義朝の少ひ人々の候を、取いだされうしなはるべしと承り、かたはらにしのびて候つれども、とがもなき母の命を失なはるべしとうけ給候程に、たすけむ為に参りて候。をさなきものどもうしなひ給はゞ、まづわらはうしなはせ給へ。」とてなきゐたり。

〔金刀比羅本　下「常葉六波羅に参る事」二八五-二八六頁〕

清盛と対面する場面においても、夫の罪に対する覚悟や親の情に言及せず、傍線部「をさなきものどもうしなひ給はゞ、まづわらはうしなはせ給へ」という常葉の願いのみ描いている。

以上のように、両本とも母の命を助けたいという常葉の思いと、自分を子供より先に殺してほしいという願いを語っている。しかしながら、子供が殺されることに関する常葉の心情描写には相違点が見られる。学習院本は一般的な親の情との対比表現を通じて、子供の処刑に対する覚悟と子供に対する愛情との葛藤を示しているのに対し、金刀比羅本はそのような揺れ動いた心情に着目せず、子供を失うことによる悲哀のみ描き出している。

常葉の心情描写の他に、子供の描かれ方にも両本の違いが見受けられる。

六子、母の顔をたのもしげに見あげて、「なかで、よく〳〵申てたべや」と云ければ、只今までも、よに心強気におはしける大弐殿（清盛：執筆者注）も、「けなげなる子が詞かな」とて、傍にうち向て、累に涙をながされけり。兵ども、あまた並居たりけるに、泪にむせびてうつぶさまになり、面を上たる者もなし。

〔学習院本　下「常葉六波羅に参る事」二五八頁〕

常葉の言葉に続いて、次男六子は傍線部のように、泣かずによく命乞いをするようにと母に言っている。常葉と子供の言葉に対し、二重傍線部のように、心強い清盛でも六子の健気さに感心し、涙を流す。「けなげなる子」と清盛が褒めたことについて、日下力氏と飯塚氏の論考では、しっかりとした態度ではなく、状況を飲み込めていない六歳の子の無邪気さを暗示していると指摘されている。(6)

今若殿、敵清盛のかたへ一目、常葉が方を一めみて、「泣て物を申せばぜひも聞えぬに、なかで申させ給はで。」と宣へは、平家の人々侍共、「義朝の子なれば、少けれども申つることのおそろしさよ。」とてしたをふりておぢあへり。

〔金刀比羅本　下「常葉六波羅に参る事」二八六頁〕

一方、金刀比羅本では、次男ではなく長男が「泣て物を申せばぜひも聞えぬに、なかで申させ給はで。」と母を叱ったとなっている。傍線部のように、周囲の人々は学習院本のように、同情するのではなく、その言動を恐ろしがっている。

以上のように、学習院本は一般的な親の情との対比表現を利用して、子供が処刑されることを恐れる常葉の心情を詳細に描いている。又、子供の無邪気さを、清盛、周囲の人々の同情を掻き立てるものとして設定している。学習院本はこのように常葉の心の葛藤、子供の無邪気さを描いたことによって、子供を失うことによる母の悲哀のみならず、敗将の妻子の悲劇も浮かび上がらせるのである。

二　観音救済との結びつき

以上見てきたように、学習院本は「うき世の習」や「親の子をおもふ心」のような表現を利用して、他人より深い悲しみを抱え込む母子の姿を描き出し、悲劇性をいっそう増している。では、母子の悲哀を観音利生とどのように結びつけて救済へと展開していくのだろうか。ここで、清水観音に祈願する場面、老婆に救われる場面、母を助けようと決心する場面という三つの場面に着目する。

《清水観音に祈願する場面》

常葉は子供を連れて都落ちをする前に、清水寺に通夜して次のように祈願する。

九のとしより月詣を始て、十五に成しかば十八日毎に観音経三十三巻よみ奉る事、おこたらず。歩をはこぶ志の浅からざれば、本尊もいかでかあはれと照させ給はざるべき。「大慈大悲の本誓には、定業の者をも助け、朽たる草木も花さき、実なるとこそ承れ。南無千手千眼観世音菩薩、三人の子共たすけましませ」と、終夜、泣くどき祈り申せば、観音もいかに憐給ふらんとぞ覚えし。

〔学習院本　中「常葉落ちらるる事」二四〇‐二四一頁〕

右のように、常葉は観音の慈悲と子供の無事への祈願を語っている。祈願の冒頭に「九のとしより月詣を始て、十五に成しかば十八日毎に観音経三十三巻よみ奉る事、おこたらず」とあるように、日ごろからの深い信仰が示されている。さらに、波線部に見られるように、観音は母子の苦悩を哀れみ、救済してくれるだろうと、作者によって予告されている。

金刀比羅本においても、観音に帰依する常葉の姿は次のように詳しく描かれている。

佛の御前にて申けるは、「わらはゝ観音にたのみをかけまいらせ、七歳のとしより月まうでおこたらず。十三のとしより月ごとに一部の法華経をこたらず、十九の歳より月ごとに三十三礼の聖容をすりたてまつる。その観音の慈悲利生ふかくおはしますことをうけたまはるに、三十三身の春の花、にほふたもとは数をしらず、十九数の秋の月、もりこぬ宿はよもあらじ。観音の慈悲利生なれば、後世までと申とも、何にかなへさせたまはざるべき。いかにいはんや、今生に三人の子共の命を助てわらはにみせさせ給へ。」と通夜くどき申されければ、観音もいかにあはれとおぼしめしけむ、夜もあけければ、参籠の上下みな下向す。

〔金刀比羅本　下「常葉落ちらるる事」二八〇頁〕

右のように、常葉の長年の観音信仰、観音の慈悲、子供の助命への祈願が語られている。さらに、観音によって母子が救済されることも波線部のように予告されている。

ここで注目したいのは、学習院本が常葉の祈願の前に、彼女と同様に通夜して祈る周囲の人達の姿に言及していることである。

其夜は、観音の御前に通夜す。二人を左右のかたはらに伏せて、おさなきをふところに抱きて、夜もすがら泣かせじとこしらへける、心の中いふはかりなし。所ゝの参詣の貴賤、肩をならべ、膝をかさねて並居たり。祈誓の趣、まち〳〵なり。或は、ありはてぬ世中なれ共、過がたき身のありさまをいのるもあり。或は、世につかへながら、司位の心にかなはぬ事をいのるもあり。されども常葉は、「三人の子共が命、たすけさせ給へ」と、いのるより外、又心にかけて申事なし。

〔学習院本　中「常葉落ちらるる事」二四〇頁〕

傍線部のように、周囲の人たちは平穏な生活や繁栄を祈願している。それに対し、常葉は他人の願いと異なって、二重傍線部、子供の無事を祈るより他はないとあるように、子供に関する常葉の深い苦悩が表現されている。金刀比羅本は前掲のように、常葉の信仰と祈願を中心に描写しており、母子の悲哀を特に描いていない。

以上のように、両本も清水寺参詣の場面で、常葉の観音信仰を明示し、母子が観音利生により救われることを予告している。よって、両本においても常葉の長年の深い信仰は、救済をもたらす要因として重視されていることが窺える。ところが、学習院本は金刀比羅本に見られない、俗事を祈る周囲の人たちの願いを先に挙げ、子供の命を考えることしかできない常葉と対比して、敗将の妻子の憂き身を浮彫りにしている。このように、学習院本は積極的に対比表現を利用しただけに、清水寺参詣の場面において、常葉の深い信仰の他に、悲哀に満ちた心境も打ち出され、母子の苦悩は観音救済と結びつけられることがより明確に見出される。

《老婆に救われる場面》

都落ちの場面において、険しい道を経た常葉は老婆に出会って救われる。彼女は老婆に出会った際に、事実を言わずに夫の薄情を恨んで逃げ出したと嘘をつく。常葉の隠しごとを見抜いた老婆は次のように言っている。

さればこそあやしかりつるが、いかさまにも、たゞ人にてはおはしまさじ。かゝる乱れの世なれば、しかるべき人の北の方にてぞおはすらめ。行衛もしらぬ君の御ゆへに、老衰たる下臈が六波羅へ召出されて、縄をもつき恥をもみて、命をうしなふほどの目にあふとても、追出し奉るべきかは。此里のならひ、誰かうけ取まいらせん。野山にこそおはしまさんずらめ。是ほどさむく絶がたきに、明日までも、いかでかながらへさせ給べき。

〔学習院本　中「常葉落ちらるる事」二四五頁〕

老婆は、傍線部のように、常葉と子供のようなこの先どうなるか分からない人を匿ったために、自分が平家方に捕えられ、命を失うほどの目に遭うだろうと自覚しているものの、常葉と子供を助けようと決意している。

ここで注目すべきは、老婆が常葉と子供を救う際に、二重傍線部「此里のならひ」に言及していることである。日下氏は「此里のならひ」を、「都近く損得にさといこの里のこと、世話する人などおりません」と解釈している。[7] 日下氏の解釈を踏まえると、学習院本は老婆が自らの命の危険を覚悟したものの常葉と子供を助けることを、「此里のならひ」と異なる行動と示し、老婆の温情を強調しようとすることが窺われる。

それに対し、金刀比羅本は彼らを困難な旅から救った人の言動を次のように描いている。

ある小屋に立よりて、「宿申さむ。」といへば、主のおとこ出てみて、「たゞいま夜深て少人を引具してまよひ給ふは、謀叛の人の妻子にてそましますらん。かなふまし。」とておとこうちへ入にけり。落涙もふる雪も、さうのたもとに所せく、柴のあみ戸にかほをあて、しほりかねてぞ立たりける。主の女房出てみていひけるは、「われらかひ〴〵しき身ならねば、謀叛の人に同意したりとて、とがめなんどはよもあらじ。たかきもいやしきも女はひとつ身なり。いらせ給へ。」とて、常葉をうちへ入て、さま〴〵にもてなしければ、人ごゝちになりにけり。

〔金刀比羅本　下「常葉落ちらるる事」二八二-二八三頁〕

金刀比羅本は学習院本のように「此里のならひ」に言及せず、常葉の姿を見た主の男が「謀叛の人の妻子にてそましますらん」を理由にして常葉の依頼を断る姿を描いている。又、主の女房が宿に泊める際に、傍線部のように身分や女の身という理由のみ挙げている。

学習院本は金刀比羅本に見られない「此里のならひ」との対比表現を通じて、老婆の温情を詳細に描写し、さらに、老婆の言動を次のように観音の利生と結びつけている。

（老婆：執筆者注）いそぎよび入、あたらしき莚取出してしかせ、たき火してあて、饗応してぞすゝめける。常葉は、胸ふさがりてすこしも見ず。子共をば、とかくすかして食わせけり。常葉が物くはぬを、あるじ心苦く思ひ、色〳〵のくだもの取出して、「是はいかに、あれはや」とすゝむれば、直事とも覚えず、偏に清水の観音の御あはれみなりと、行末もたのもしくぞ思ひける。

〔学習院本　中「常葉落ちらるる事」二四五－二四六頁〕

老婆は常葉と子供を宿に泊めて様々に労わる。波線部のように、常葉は老婆の行為を「清水の観音の御あはれ」として受け取っている。こうして見ると、学習院本は対比の表現を通じて、老婆が自らの命を顧みず母子を救ったことを「此里のならひ」と異なる行動と示し、老婆の温情の深さを強調した上で、観音利生と結びつけようとしている。

《母を助けようと決心する場面》

常葉は困難な旅を経て、一旦、大和に隠れる。しかし、その後、母が拷問されたことを聞き、母を助けるために六波羅に出頭しようと決心する。ここで、子供を犠牲にしようと決心する際の述懐に注目したい。常葉は「前世の果報拙て、義朝が子と生れ、父が科の子に懸てうしなはれん事は、其理、有ぬべし」と言って、子供の処刑を、前世の果報や夫の罪の結果として受け止めている。それに続いて、

此後も子ほしくは、同じゆかりの子を養ても慰ぬべし。無量劫をへてもあらざる親子の中也。責殺されてのちは、悔しむともかひあらじ。母、此世にある時、出て助けん」と思て、

〔学習院本　下「常葉六波羅に参る事」二五五頁〕

とあるよう、子供がほしければ、亡き夫の血縁につながる子を養うことができるが、母を殺されたならば、悔しいと思っても甲斐がないと思い、母を助けようと決心する。

子供の命と引き換えに母の助命をしたいという思いは、六波羅に出頭する前に、常葉が昔仕えていた九条院藤原呈子（以下、「九条女院」）と、清盛の側近伊勢守景綱と対面する際にも語られている。ここで注目すべきは常葉の思いを聞いた九条女院、女房達、および景綱の反応である。

九条女院と対面する場面において、常葉は「子共が事は何とも成候へ、母の苦を助候はん」とあるように、子供を犠牲にして母を助けようとするという思いを語る。

「世の常の女房の心ならば、「老たる母は今日ともしらぬ命なり。後の世をこそとぶらはめ。行末とをき子共をたすけん」と思ふべきに、子を皆うしなふ共、母ひとりを助んと申心ざしの有難さよ。仏神、定て御憐あらんずらむ。（後略）」とめん〳〵に申されければ、

〔学習院本　下「常葉六波羅に参る事」二五六頁〕

それに対し、女房たちは傍線部「世の常の女性ならば、老いた母は今日でも生き長らえるかどうか知らないので、母が亡くなったら後世を弔えばいい、将来がある子供の命こそ助けようと思うものだ」という世の常の女性の考え方に言及している。そして、世の常の女性と違って、幼い子を失っても老いた母を助けようとする彼女の親孝行を称賛して、波線部「仏神、定て御憐あらんずらむ」と述べている。このような女房の言葉について、山下宏明氏と小番達氏は常葉の親孝行が神仏による救済に繋がったと解釈している。[8]

「（常葉：執筆者注）子共こそうしなひ候はめ、母をばいかでか助けでは候べきと思ひ定めて、御尋ある子ども、相具して参て候うへは、母をばゆるさせ給へ」と泣ゝ申ければ、きく人、孝行の心ざしを感じて、みな〳〵泪をぞながしける。

〔学習院本　下「常葉六波羅に参る事」二五七頁〕

景綱と対面する場面においても、景綱らは傍線部、常葉の「孝行の心ざし」に感心することが描かれている。

このように、子供を犠牲にしてまでも、親孝行を果たそうとする常葉の思いは、世の常の女性の行動と異なり、周囲の人たちの心を動かすものとされている。又、母子が神仏の慈悲により救われるだろうという予告が、この場面と前掲、常葉が子供の無事を祈願する場面とに描かれていることから見ると、山下・小番両氏が指摘するように、学習院本では母子の苦悩の他に、常葉の親孝行も神仏の救済をもたらす一因と見做される。

女房たちが言及した、老いた親より子供を助けるという世の常の女性の考え方は『今昔物語集』巻十九、第二七「住河辺僧、値洪水棄子助母語」にも見受けられる。

淀川の辺に住む僧は氾濫により子供を流される。僧は子供を助けて岸に戻ろうとする際に、目の前で老いた母が流されていく。僧は子供と母を同時に助けることはできず、「命有ラバ子ヲバ亦モ儲テム。母ニハ只今別レテハ亦可値キ様無シ」と思い、子供の手を離して母を助ける。僧の妻は子供が流されていったことを歎き、「汝ハ奇異キ態シツル者カナ。目ハ二ツ有リ。只独リ有テ白玉ト思ツル我ガ子ヲ殺シテ、朽木ノ様ナル嫗ノ今日明日可死ヲバ何ニ思ヒテ取リ上ゲツルゾ」と夫を責める。最終的に、「母ヲ助タル事ヲ仏哀トヤ思食ケム、其子ヲモ末ニ人取リ上ゲタリケレバ」とあるように、子供が助けられたのは仏が僧の親孝行を感心したからだと語って話を締め括っている。

最愛の一人子を捨て、今日明日、死ぬだろう、「朽木ノ様ナル」老いた母を助けた僧を、「奇異キ態シツル者」と責めた妻の言葉から、いざという時に、老いた母より子供を助けることは常識的な行動だと考えられる。さらに、妻の悲しみを慰めようとする僧は「現ニ云フ事理ナレドモ、明日死ナムズト云トモ、何デカ母ヲバ子ニハ替ヘム。命有ラバ子ハ亦モ儲テム。」と言っている箇所にも見られるように、子供はまた儲けられるが母の代わりはないことを訴えながらも、妻が言った事を「理」と認めている。このことから、僧の妻の考え方は世間での一般的な判断であることが確認できる。このように、僧は「世の常」の人々と異なる判断をすることが明示されているが、話の結末に「母ヲ助タル事ヲ仏哀トヤ思食ケム、其子ヲモ末ニ人取リ上ゲタリケレバ」とあるように、親孝行を果そうとする僧の行為こそ子供に救済をもたらす要因となっている。

僧の話を常葉譚と合わせて見ると、子供を犠牲にしてまでも親孝行を果たすという彼らの行為を「世の常」の人々の判断と異なる特異なものとして示した上で、親孝行を救済と関連付けようとする物語の姿勢が窺われる。

一方、金刀比羅本においても親孝行を果たす常葉の姿が描かれているものの、九条女院の反応には相違がある。

おさなき人々を引具して六波羅へいでけるが、九条の女院にいとま申にまいりたり。女院御覧じて、「何に、此ほどは何事ありつるぞ。」とおほせくだされければ、「子共の命助けん為に、大和なる所にしのびてさぶらひつれ共、とがもなき母のいのちを失なはるべしとうけ給て、助けん為に六波羅へいでさぶらふが、いとま申に参りてさぶらふ。」と申せば、女院あはれにおほしめし、最後の出立自せんとて、

〔金刀比羅本　下「常葉六波羅に参る事」二八四－二八五頁〕

右のように常葉の苦悩に同情する九条女院の姿が描き出されている。しかし、学習院本のように常葉の親孝行を「世の常の女房の心」と対比して称賛することと、観音救済の予告は記されていない。

このように両本における親孝行の叙述を比べると、学習院本は「世の常の女房の心」と対比させつつ常葉の「孝行の心ざし」を強く印象づけ、観音救済へつなげようとすることが明確になる。

以上見てきたように、学習院本は母子救済へと展開するにあたって、俗事を願う人たちの姿、「此里のならひ」、「世の常の女房の心」といった世間での一般的な行動を取り上げ、それと異なる、母子の苦悩の深刻さ、老婆の温情、常葉の親孝行を打ち出している。こうした対比表現で常葉の悲哀や性質を浮かび上がらせ、その上に救済を予告する形で母子救済へと展開していくことは、金刀比羅本にはなく、学習院本の特徴と見做すことができる。

最終的に、頼朝が死罪を免れ、流罪に処せられることが決まったことにより、常葉の子供は罪を赦されることとなった。常葉の子供が助命された場面において、次のように観音利生を賛美して章段を締め括っている。

常葉、「一日片時も、命のあるこそふしぎなれ。これさながら、清水の観音の御助なり」とたのもしくて、わが身は観音経をよみ、子共には観音の御名をおしへて唱へさせけり。

〔学習院本　下「常葉六波羅に参る事」二六〇頁〕

波線部のように、常葉は子供の処刑が延引されたことを「清水の観音の御助」と思い、自身が観音経を読んで子供に観音の名を唱えさせている。ここに、常葉は子供が生き長らえたことを、清水観音の利生と受け取っていることが明確に表されている。

多くの先行研究で指摘されたように、『平治物語』のいずれの諸本も、常葉譚の末尾で常葉と子供の助命を観音救済と結びつけている。ただし、金刀比羅本は観音利生の他に、常葉の美貌を助命の一因として設定している。

三人の子どもの命をたすけしは、清水寺の観音の御利生といふ。日本一の美人たりし故也。容は幸の花とはかやうのことをや申べき。

〔金刀比羅本　下「常葉六波羅に参る事」二八七頁〕

金刀比羅本においては、波線部のように観音利生は常葉の言葉ではなく、地の文として記されている。さらに、観音利生のみならず、常葉の美貌も二重傍線部のように助命の一因となる。常葉の美貌は次のように語られている。

常葉生年二十三、九条女院の后たちの御時、都の中よりみめよき女を千人そろへて、そのなかより百人、又百人が中より十人すぐりいだされける。其中にも常葉一とぞきこえける。千人が中の一なれば、さこそはうつくしかりけめ。異国に聞えし李夫人・楊貴妃、我朝には小野小町・和泉式部もこれにはすぎしとぞみえし。貴妃がすがたをみな人は、百の媚をなすといへり。大宰大貳は、常葉が姿をみ給ふより、よしなき心をぞうつされける。

〔金刀比羅本　下「常葉六波羅に参る事」二八六頁〕

右のように、金刀比羅本は美しい女性千人の中から選ばれたという常葉の美貌を語っている。傍線部のように、清盛が常葉の美しさに惹かれることが描かれている。

学習院本では、常葉の美貌は助命の一因ではないが、金刀比羅本と同様に美貌の評判が描かれている。ここで注目すべきは、学習院本が常葉の美貌だけでなく、痩せ衰えた姿も描き出していることである。

常葉がとし、廿三なりき。中宮の官女にて物なれたるうへ、思ひ胸にあれば、こと葉、口に出て、たけき武士もあはれと思ばかりに申つゞけて、青黛、ふかき涙に乱れ、歎日数を経て、其人ともなくやせおとろへたれども、なを世のつねに越たり。見る人、これをあはれまずといふ事なし。「これほどの美女をば、目にも見ず、耳にも聞およばず」と申あひければ、ある人、申けるは、「よきこそ、ことはりなれ。大宮左大臣伊通公の、中宮御所へ、見目よからん女をまいらせんとて、よしときこゆる程の女を、九重より千人召れて百人えらび、百人より十人えらび、十人がうちの一にて、此常葉をまいらせられたりしかば、わろかるべきやうなし。さればにや、見れども〳〵、めづらかなるかほばせなり。唐楊貴妃・漢李夫人が、一度咲ば百の媚をなしけんも、これには過じ」と、たはぶれ申人もあり。

〔学習院本　下「常葉六波羅に参る事」二五九頁〕

二重傍線部のように、常葉は「其人ともなく」ほど痩せ衰えたが、美しさが「なを世のつねに越たり」と評され、そのような彼女の有様を見た周囲の人々は同情・感動したとある。

もちろん、このような常葉の有様の描き方は単なる登場人物の美しさを描写する典型的な表現方法でありながらも、常葉の悲哀や親孝行の描写と同様に、同情心を引き起こすものとして機能していると考えられる。こうして見ると、両本とも観音救済を語るとはいえども、助命へ

の展開には大きな相違点が見出される。学習院本は前の場面に呼応する、人々の同情心といった要素を軸とするのに対し、金刀比羅本は清盛が常葉の美貌に心を奪われたことを付加し、美貌を観音利生とともに助命の要因として位置付けることで、人々の同情心の要素が後退していくのである。

おわりに

以上、学習院本と金刀比羅本との比較を通して、学習院本における母子の悲哀および観音救済の描き方を考察し、対比の表現に注目した。常葉譚の描かれ方について、今までの多くの先行研究では、『平治物語』諸本の本文異同により、母子の悲哀と観音救済を重視する学習院本の姿勢が指摘されてきたが、描き方の点から考慮すると、対比の表現は学習院本の常葉譚における一つの表現形式として、母子の受難から観音救済へと展開する過程と深く関わっていることが窺われる。学習院本は金刀比羅本のように単に母子の苦難を語るのではなく、対比の表現を利用し、常葉の心境、他人とは異なる追い込まれた深刻な状況を詳細に描き出した上で、敗将の妻子の悲劇性を浮彫りにしている。又、母子の受難から観音救済へと展開する際にも、対比表現を通じて、老婆の温情、特に、常葉の親孝行を、世間での一般的な行動と異なる特異なものとして示した上で、観音救済につなげている。このように、学習院本が対比の表現方法を利用して、敗将の妻子の悲劇性や常葉の性質を、人と神の同情心を引き起こすものとして打ち出し、観音利生による母子救済という構想を提示することに、学習院本常葉譚の表現形式における独自性が見出されるだろう。

注

（1）岡部真由美「『平治物語』における常盤像の生成」（『広島女学院大学　国語国文学誌』三　一九七三年十二月）、長沢レイ子「『平治物語』における常葉説話の考察」（『千葉大学人文学部　語文論叢』三　一九七五年五月）、小番達「平清盛と常葉」（『国文学　解釈と鑑賞』七一　二〇〇六年十二月）

（2）飯塚紀久子「「平治物語」における常葉説話の変遷」（『成蹊国文』十三　一九七九年十二月）

（3）物語全体を通じて、常葉譚に語られる観音利生は、源氏再興話、あるいは、源家後日譚の義経物語とどのようにつながっているかという問題点について、山下宏明「『平治物語』の読み―常盤の物語をめぐって―」（『文学』五二-四　一九八四年四月）は、「この観音が常盤母子の行く先を拓き、源氏の再興をつむぎ出して行くのである」と述べ、常葉譚に語られる観音利生と源氏再興話との関連性を指摘している。それに対し、安藤淑江「平治物語「源家後日譚」考―常葉譚の継承と頼朝報恩報復譚をめぐって―」（『軍記物語の生成と表現』研究叢書　一九九五年）は、「「源家後日譚」中の義経の物語には、霊験譚的側面は全く見られない。このことからも、「源家後日譚」の義経の物語が、常葉の物語を継承しつつも異質なものであることがわかる。」と述べ、源氏再興話は常葉譚における観音利生の語りと直接関わっておらず、常葉譚の延長として語られると指摘している。本稿は、安藤氏の見解に基づいて、常葉譚における観音利生の語りを源氏再興話とは分けて考えることとする。

（4）山下宏明（前掲注（3）著書）

（5）後れ先立つことがこの世、あるいは、人の「習」であるといった表現は、登場人物が愛する者を亡くして悲嘆に浸る場面によく見受けられる。例えば、『保元物語』において、為義の北の方が夫、子供たちを斬首されたことを歎いて入水しようとする際に、周囲の人達は、

御歎事ハ中〳〵申不」及。昔モ今モ加様事ハ候。親ニ後レ子ニ後レ、妻、夫ニ別ル、事、人毎ノ習也。

〔『保元物語』下「為義ノ北ノ方身ヲ投ゲ給フ事」一一四頁〕

と言って、夫婦、親子がどちらかに先立たれることは「人毎ノ習」である、と彼女の悲哀を慰めている。

（6）飯塚紀久子（前掲注（2）著書）と、日下力「常葉譚の摂取」（『平治物語の成立と展開』汲古書院　一九九七年、初出一九八三年）は、清盛が六子を「けなげなる子」と褒めたことに、状況を飲み込めていない六子の無邪気が暗示されていると指摘している。日下氏の論考によると、次のようになる。

常葉は、もとより、子供の命乞いをしているのではなかった。それを「六子」は理解できていなかったのである。泣訴する彼女の姿に悲壮な強さがにじみ出ていたとしても、現実的には「たのもしげ」であるはずはなかった。母と子の間にあるギャップが、清盛を

はじめとする武士達の涙をさそう。清盛は、「けなげなる子が詞かな」という言葉を洩らしたというが、それは、事態をのみこめぬままに口を差しはさむ、さかしらな子供のいじらしさに対して発せられたものであったろう。

（7）日下力『平治物語』（岩波書店　一九九二年）

（8）山下宏明（前掲注（3）著書）は、「この〈よのつね〉を越えた親子の情、常盤の自首が清水観音を動かしたのである」と述べている。小番達「『平治物語』における常葉御前の女性性」（『国文学　解釈と鑑賞』七十　二〇〇五年三月）は、「母である自己を抑制して、あるいは犠牲にしての行為（孝養）であった点が観音の救済に繋がった」と指摘している。

使用テキスト

- 新日本古典文学大系『保元物語・平治物語・承久記』（岩波書店　一九九二年）
- 日本古典文学大系『保元物語・平治物語』（岩波書店　一九六一年）
- 新日本古典文学大系『今昔物語集　四』（岩波書店　一九九四年）

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。

第五章　真名本『曽我物語』における曽我兄弟の母
―敵討ちへの思いによる苦悩と出家の様相をめぐって―

はじめに

曽我兄弟の母（以下、「母」）は暗殺された夫河津三郎助通（以下、「兄弟の父」）と死別し、その後、短期間のうちに四人の子供を失った、悲嘆に暮れる妻、母として描き出されている。彼女の悲哀は単に愛した夫、子に先立たれたことだけでなく、父の敵討ちを果たそうとする兄弟の意志によって生じている。

母の苦悩の様相について、会田実氏[1]は兄弟の父の死後、母が父のために敵討ちをせよと幼い兄弟に命じる場面を取り上げ、次のように論じている。

> 舅祐親が不和であった義理の兄弟工藤祐継の死の床でした約束―祐親の娘と祐継の息子祐経とを結婚させ、この二人に祐継の所領を相続させ合わせて両家が和解するというもの―を反故にし、祐経上洛の機会を狙いその所領を横領するという行動に出たことに起因するとはいえ、嫡子河津三郎が祐経の放った刺客に殺害された事件は、曽我兄弟の母にも極限の悲しみと祐経への憎悪をもたらした。（中略）
> （母の再婚後：執筆者注）表面的には一応の落ち着きをみたかに思える曽我兄弟の母であったが、そこに待っていた苦悩は、自分がかつて幼な子に命じた敵討ちによるものであった。

会田氏は、右のように母の舅伊藤助親（以下、兄弟の祖父）が甥工藤助経の所領を横領するという事件の発端を述べ、さらに、助経により兄弟の父を殺され、失った悲しみと、父のために敵討ちをせよと母が幼い兄弟に命じる場面に表される恨みを論じている。又、母の再婚後、傍線部のように、兄弟の敵討ちへの思いによって生じる母の苦悩を指摘している。

加えて、小林美和氏[2]は母が幼い兄弟に敵討ちを命じる場面を次のように論じている。

兄弟は、父の死の直後、母の言葉によって、復讐への思いを脳裏に焼き付けられる。そして、母の心変わりの後も、兄弟の復讐へかける情念は、二人の間のみの、いわば閉じられた関係の中で深く沈潜し、しかもその激しさを増してゆく。

小林氏は傍線部のように、母のかつての言葉を兄弟の復讐心の動機と捉える見解を示している。さらに、母の命令を「十郎の「心の闇」はこの時に発したことになる。母の罪は重い。」と述べ、母の罪として捉えている[3]。このように、先行研究において、母のかつての命令が兄弟の敵討ちへの思いを生み出す原因であり、母の罪を示すものと捉えられている。しかし、母は再婚後、その恨みが単なる「一旦の事」だと、兄十郎（以下、「兄」）に告白して敵討ちを制止している。このような母の言動から見ると、彼女の命令は実際に兄弟を敵討ちへと突き動かしているのか、又、物語はその命令を母の罪として示しているのかという疑問が浮上する。そもそも、先行研究が注目する愛別離苦や、兄弟の敵討ちへの思いによる苦悩以外に、苦悩は存在しないのか。結論を先に述べると、母は敵討ちへの思いによる兄弟の苦悩が察知できず、それを止められなかったことを、兄弟の死後に後悔している。それは兄弟の死とともに彼女の苦悩の一つと見なすことができる。さらにそれは彼女の出家・往生への展開とも関わってくるのである。

苦悩の様相の他に、悲嘆に暮れる姿から一転して出家・往生を遂げる母の姿にも注目したい。母は兄弟の父、兄弟を失った悲哀により何度も出家しようとするが、懐妊や残される子の養育を理由に周囲に止められる。最終的に母が出家を遂げることができたのは、兄弟が敵討ち決行の際に通った道を辿り、箱根山の別当と対面した後である。出家の場面において、母は以前のように悲嘆に暮れず、修行に励み、最終的に愛別離苦による悲哀を翻して往生を遂げることができた。物語はこのように母の心情変化を明確に描き出した上で、理想的な女人往生の形で

母の叙述を締め括っている。では、母の発心はどのように生じてきたのか、彼女の心情変化は往生の場面以前に置かれる兄弟の道行きを辿る場面と別当と対面する場面とどのように関わっているのか、考察したいと思う。

以上の問題意識から、本章ではまず夫と子供に関する母の苦悩の様相を検討する。又、母の命令が兄弟の復讐心を煽るものとして機能しているのか、物語は出家・往生へと展開させていくに際し、母の苦悩をどのように描き出しているのかを考えることとする。第二節では、出家願望を遂げようとする母の行為を検討する。出家は母にとってどのような意味を持っているのか、兄弟の道行を辿る場面、箱根山の別当と対面する場面において母の心境はどのように変化して悟りに達したのかを明らかにすることを目的とする。

一　苦悩の様相

一-一　亡き夫

兄弟の父が助経に殺され、遺骸を河津に送られた際に、母は「空しき死屍に副ひ伏して、一道へと焦れ給ふも哀れなり」とあるように歎き悲しんでいる。悲しみのあまりに敵助経を討て、と兄弟に命じる場面は次のとおりである。

そもそも、河津三郎助通には男子二人あり。兄は一万とて五歳、弟は筥王とて三才になる。これら二人をば、母の左右の膝に随ひて泣く泣く、「己ら諦かに聴け。腹の内なる子だにも、母の云ふ事を聞き悟りて、親の敵をば討つぞよ。その故は、周の幽好王は殷の中好町に亡ぼされける時、母の摩低夫人の腹に子を宿して七月にぞなりにける。母の夫人は王に後れて後、悲しみの余りに腹の内の子に向て、『汝、諦かに聴け。縦ひ九月を待たずとも、それより内に生れて急ぎ父の敵を討つべし』と云ひ含めたりければ、未だ八月に足らざるに早く生れたりける。母大きに喜びてこれを養ひ成長てつる程に、生年七歳と申しける十一月に、敵仲好町を討ち、その首を切りつつ、父の墓の上に懸けたりければ、立てて六年になりける墓の五輪が三度まで踊りけるこそ哀れなれ。天下にこの由聞えて、諸人大いに感じつ

つ、人々力を合せたりければ、終にその国の王となりにけり。これをば吉く吉く己ら聞き持つべし。己らが父をば宮藤一郎助経が討つたんなるぞ。未だ弐拾にならざらむその前に、助経が首を取て我に見せよ」とぞ悲しまれける。

〔巻二「遺族の悲しみ」七三 - 七四頁〕

父のために敵討ちせよとの母の命令は、傍線部に見られるように繰り返し描かれている。さらに、母は中国の敵討ち譚を兄弟に語る。摩低夫人が亡き夫のために敵討ちを胎内の子に命じ、その生まれた子は七歳になった時、敵討ちを遂げたため、人々に称賛されて後に王となったという。物語はこのような先例を母の命令に挿入したことによって、敵討ちを幼い兄弟に強く意識させる母の姿を表している。母の命令に対する兄弟の反応は次のように描かれている。

三歳になりける筥王は少ければ、これをば聞きも知らで、ただ母の膝の上に手逍びして楽しみ居たりける。五歳になる一万は、父が空しき死屍をつくづくと守らへて両眼に涙を雑とぞ浮べける。「いつか責めて十五になりつつ、親の敵助経を躯ひてみむ。願はくは二所の権現、三嶋の大明神、足柄、富士浅間の大菩薩、殊には氏の大神、我らに力を合せて守らせ給へ」と云ひも了てずして、父が空しき死屍にひしひしと取り付きて、さも鶲若なる声付きにて、喚き叫ぶも哀れなり。

〔巻二「遺族の悲しみ」七四 - 七五頁〕

まだ三歳の弟五郎（以下、「弟」）は母の言葉が理解できない。一方、五歳の兄は傍線部のように、神の利益に頼り、父のために敵討ちを遂げたいと願う。

さらに、三十五日の供養に、兄は父がよく使っていた武具を持って、「我もいつか十七、八のころに成て、この具足どもを身に随ふる程にもならば、などか宮藤一郎を一目見て躯はざるべき。」と敵討ちへの思いを吐露する。しかし、母は兄の行動を見ると次のように諭す。

いかに一万よ。なき人の物をば少き者は弄ばぬ事ぞ。皆捨てよ。己が父は仏に成て、極楽浄土と申しつつ楽しみ栄えて面白き処に在す。我も終にはその所へ参り合はむと欣ふなり。己らも急ぎ参り合へよ

〔巻二「三十五日・四十九日の仏事」七八－七九頁〕

波線部に見られるように、母は恨みに言及せず、夫が仏になったことと、自分も同様に往生したいという願望のみ語っている。ここに母の悲しみが治まり、落ち着きを取り戻すことができたことが窺われる。彼女の行動の変化は再婚後、より明確になる。

母は兄弟の父との三人目の子供を産んだ後、出家しようとするが、兄弟の祖父に止められ、曽我助信（以下、曽我殿）との再婚を勧められる。再婚の前に、彼女は夫の墓へ詣でて次のように述懐する。

①暇申してよ、河津殿。童は女性なれどもまた人にも見えんと思はねども、殿の父伊藤殿の御計ひなれば曽我の里へ移るなり。童にも子共までも、遠き守りとなり給へ。いづくに侍ふとも後世をば訪ひ奉るべし

〔巻二「助通の妻の再婚」八五－八六頁〕

②「祖父御前の仰せに依て母御前の御友をしつつ、曽我の里へ移り候なり。父御前の御敵宮藤一郎助経を討たんまで守らせ給へ」とて、蒭の如くなる手を合せて、小賢しく泣く泣く話きければ、見る人聞く人袖を捶らぬは一人もなかりけり。

〔巻二「助通の妻の再婚」八六頁〕

①のように、母は兄弟の父の墓前で兄弟の祖父の計らいによる再婚の事情を述べ、波線部のように、どこにいようとも後世を弔いつづけることを誓う。一方、②傍線部のように、兄は再び敵討ちの思いを語る。

以上のように、兄弟の父の遺骸を見る場面において、母の歎きの他に、敵討ちせよと母が幼い兄弟へ命じる様子が描かれており、悲劇性が一層強調されている。しかし、それ以来、母はその恨みに言及せず、兄弟の父の後世を弔い、自らも後世救済してもらいたいという願望のみを語っている。一方、母の命令を聞いた兄は、父の遺骸を見る場面以外に、供養の場面、父の墓に詣でる場面においても敵討ちへの思いを繰り返し語っている。こうして見ると、母の恨みの語りは悲哀の表現方法でありながら、先行研究が指摘するように兄弟の敵討ちの動機づけとして機能していることが明確になる。では、物語はそのような母の行動を罪として捉えているのか、次節で確認する。

一-二　子

ここで、兄弟の敵討ちへの思いを知った場面と、兄弟の死が報告される場面に着目して、母の悲哀と心情の描写を考察する。

母は再婚後、恨みに言及せず、悲しみが治まる。しかし、兄弟は時間が経っても父の敵のことを忘れられない。「人の語れば兄も知り、兄が語れば弟も知る。心の付ける任に最度安からずぞ思ひける。」とあるように、父の死の原因を周囲の人々から聞き、ますます憤りが高まってくる。兄弟は自らの恵まれない境遇を次のように吐露する。

兄弟二人庭に出でて遊びける程に五つ列れたる鴈音の南を差して飛びけるを見て、兄の一万は弟の筥王に合ひて、「哘見給へ、筥王殿。天を飛ぶ翅だにも己らが友こそ列れて行け。別の翅をば交へざりけり。五つ列れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、残りの三つは子共にてぞあるらむ。されば、物を云はぬ畜生そらかくの如し。況んや我らは人倫に生を受けて、和殿は弟とて七歳になる。我は兄とて九つになるぞかし。しかれば母はまことの母なれども、曽我殿はまことの父にてなきこそ口惜しけれ。我らが父をば河津殿と申すなりけん。されば父だにも憂世に在さば馬鞍をも賜ひつつ、弓矢をも持てなんど云はば、今は思ふやうに物をも射行きてむ」

〔巻四「曽我兄弟、月夜に雁を見て歎く」二〇五-二〇六頁〕

右のように兄弟は雁の群れを見て、畜生でも家族が揃っているが、自分たちには実父がいないことを歎く。また、もし父が生きているならば、他の子供と同様に馬鞍を与えられるだろうと言い、孤独感を吐露する。それに続いて、敵討ちへの思いを次のように語り合う。

「哀れ、我らもいつか成長しつつ、和殿は十三、我は十五だにもなるならば、いかならん野の末山の奥にてもあれ、親の敵助経をかくの如く差し合て射執りつつ、後に左も右もならまし。や、殿」と云ひつつ、「和殿も弓よく射習へ。我も射習はむ。弓矢の道は男の一の能にてあんなるぞ」と云ひければ、弟の筥王も打低樋て領状しけり。

〔巻四「曽我兄弟、月夜に雁を見て歎く」二〇七頁〕

傍線部のように、成長して父の敵討ちを遂げ、その後、自分たちも自害しようと固く誓い合う。ここに、母のかつての命令だけでなく、兄弟の心から湧き出た孤独感も恨みを生み出す一因と見做される。兄弟が敵討ちの決意を固めるのに対し、母は兄弟が話したことを兄の乳母から聞き、子供の命を案じつつ兄弟の敵討ちを必死に止めている。母が兄弟を諭す場面は以下のとおりである。

まことか。己らはさしも怖しき世の中に謀叛を起さむと議り合ふなるは。唆怖しや、こはいかにせん。もし人の耳にも聞えなば、まさによかるべきか。汝ら諦に聴け。①汝らが祖父伊藤入道は、当鎌倉殿の若君千鶴御前とて三歳にならせ給ひしを松河の淵に沈め奉りし故に御敵となりて、先年伊藤の館において失はれ奉りぬ。己らかかる謀叛人の孫子共なれば、便宜のあらむ時、敵の左衛門に知らせつつ、上の御敵に申しなして失はるべし。その時は千度悔い、百度悲しむとも叶ふべきか。②その上汝らが鎌倉へ召されし時も、曽我殿歎き申して留めたり。その故は鎌倉石橋山の合戦に打負けて杉山に入せ給ふ時、梶原平三景時、曽我殿と二人心を合せて助け奉りし故に駿河の国八郡の大介になされしその御恩をば皆進せ上げつつ、『二人の少き者共を助けて賜らむ』と申しければ、鎌倉殿哀れませ給ひて、『それ程の忠ならば二人の子共をば助信に預くるぞ』と仰せ下されし故にこそ、己らは安穏にて今まで稀有の命をば持ちたれ。それに

付けても曽我殿が芳恩をば報じ尽すべきか。（中略）あなかしこ謀叛の思ひをば起すべからず。就中に鎌倉殿の御耳に聞えぬるものならば、少しとても穏やかには置かれじものを。命が有てこそ謀叛をも起されむ。その心どももあるべからず」

〔巻四「母の歎き」二〇七－二〇九頁〕

母は兄弟を諭す際に、二つの理由を挙げている。一つ目の理由は、兄弟の祖父と頼朝との間の不和についてである。①傍線部のように、かつて兄弟の祖父が頼朝の子を殺害したことを語り、そのために、兄弟が頼朝の敵に仕立て上げられて、処刑されるだろうと諌めている。二つ目の理由は②傍線部のように、頼朝に兄弟の命乞いをし、兄弟の命を救った曽我殿の恩に報いなければならないということである。ここに、頼朝の権威を憚りつつ、夫曽我殿の立場を尊重する母の姿が端的に示されている。このように事態を冷静に見つめると同時に、夫の立場を気遣う、亡き夫の後世救済を果たすなどして社会規範に従う母の姿勢は、再婚後、特に弟を出家させる場面において明確に表されている。これについては後述する。

その後も、母は兄弟の敵討ちへの思いを兄弟の父親違いの兄小次郎から聞き、兄を呼び出して諭す。ここで注目すべきは母が夫の死の直後、兄弟に敵討ちを命じた時を回想して歎くことである。

故河津殿の失せし時、童が云ひし事をば聞き止めて、かやうの大事を思し立ち給ふか。その時の別の悲しさには、敵の首をば目の前に置て見むとこそ思ひしか。それも一旦の事ぞかし。程も延び年月を隔てぬれば、『由なき事を思ひけり、罪の上になほ罪を重ねて罪業深き人となさんと思ふ事の悲しさよ』と、今はその義も忘れたり。

〔巻五「小次郎、兄弟の志を母に告げる」二六四－二六五頁〕

かつての自分の命令は単に悲しみのあまり生じたものであり、その恨みを波線部「一旦の事ぞかし」、「由なき事を思ひけり」、「今はその義も忘れたり」と述懐し、恨みは母の心から消えていったことが明確に表されている。しかし、恨みを兄弟の心に生み出し、時間が経

っても彼らの心から消せない原因は、「童が云ひし事をば聞き止めて、かやうの大事を思し立ち給ふか」と母が言うように、彼女自身のかつての命令である。自らの言葉を、兄弟の復讐心を生み出す原因として自覚しつつ、後悔する母の姿がここから窺われる。そこで、彼女は二重傍線部のように、罪の上にさらに罪を犯したくないと言い、兄弟の復讐心を静めようとする。

このように、母は自らのかつての命令を、兄弟の復讐心を生み出す原因として自覚しているが、再婚後、かつての恨みを「一旦の事」と主張して兄弟の敵討ちを徹底的に諌めようとする。ここから、母のかつての命令は先行研究が指摘するように、敵討ちの動機づけとされているものの、兄弟の復讐心を煽るものではないと認められる。又、自らのかつての命令を後悔しつつ、罪を犯したくないことなどを言い、敵討ちを制止しようとする母の姿の表出から見ると、母の命令は後の兄弟の死をもたらす原因、ないし罪と捉えられていない。よって、物語は母の命令を批判の対象として位置づけていないと言えるのである。

兄弟の敵討ちへの思い以外に、母にはもう一つの悲劇が待っている。それは子の死による苦悩である。兄弟はようやく助経を殺し、父の敵討ちを遂げる。兄はその場で殺され、一方、捕えられた弟は頼朝に尋問された後、助経の子犬房の家人に殺される。その後、兄弟の弟御房は兄たちの後を追って自害する。父親違いの兄京の小次郎も他人の敵討ちに巻き込まれて殺される。

兄の恋人である大磯の虎（以下、「虎」）が曽我の館を訪ねる場面において、母は兄弟の父が討ち死にし、又、僅かな時間のうちに四人の子供を失ったことを虎に語り、「童程歎き深き者はまた世の中にあるべしとも覚えず」との述懐に見られるように、愛する者との死別に苦しむ母の姿が描写されている。彼女の深い悲哀の原因は単に愛する者に先立たれただけでなく、「同じく死する道ならば、力及ばず左も右も定業とやらむ承れば、病に伏し沈みつつ日を重ねてこれらに後るるならば、責てもいかがはせむ。これらは皆太刀・小刀の崎に懸て失せぬれば、ただ死ぬまじき者の死する様に覚えて、今一際の名残も惜しく覚ゆるなり。」とあるように、皆、戦いで死んだためである。

子の死に対する悲嘆の他に、母が自らの行動への後悔を吐露することにも注目したい。

筥王をば法師になれとて筥根の御山へ登せしかども、恋しき時は常に呼び下して見しかば、差離れて恋しき事もなくして、男になりし本意なさに、一旦勘当したる由をして何となく心の早りの任に云ひ出したりしかども、誣ひて乞ひ許す人もなかりしかば、我もまた免すと

云ふには及ばずしてある程に、今日打出でむとせし時、十郎乞ひ許ししかば、我も許したき心のある間に許すと云ひし時、始めて来つつ喜気に思て、日来勘当せし事何賀に悔しく覚え、今且し向ひ居よかしと思へども疾くこそ罷り返らめとて急ぎ出でしかば、帰り来らむ日を数へてこそ待たれつるに、心苦しく永き別にてありけるものを、神ならぬ身の口惜しさは知らざりける事の悲しさよ」とて泣き給へば

〔巻十「虎、曽我の里を訪ねる」二五七頁〕

母は弟が出家せずに勝手に元服したため、勘当したことを虎に語る。しかし、「本意なさに、一旦勘当したる由をして何となく心の早りの任に云ひ出したりしかども、誣いて乞ひ許す人もなかりしかば、我もまた免すと云ふには及ばず」と打ち明けるように、弟を勘当したことは本意ではない。自らの行動を後悔する母の姿が、二重傍線部に見られるように表明されている。弟の勘当への後悔はこの場面以外に、兄弟の伯母が訪れる場面においても見られる。

兄弟の伯母が訪れた際に、母は弟を勘当したことを語り、次のように歎きを吐露する。

さても筥王を年来不孝して免さざりつる事の余り悲しく覚ゆるなり。この条においては仏神も御覧ぜよ。冥官・冥衆も照見し給へ。また叢魂の影にてもこれを聞けよ。童が不孝は実の不孝にはあらず。

〔巻十「曽我の人々の嘆き、助経遺族の歎き」二四三-二四四頁〕

母は弟を長年、勘当して許さなかったことを悲しんでいる。波線部に見られるように、弟の勘当は本意ではないことを、神仏、弟の魂へ伝えようとする。

物語はこのように弟の勘当への後悔を繰り返し描き、自らの行動を悔やんでいる母の姿を強調している。さらに、前掲の母が虎に悲嘆を吐露する場面において、波線部「心苦しく永き別にてありけるものを、神ならぬ身の口惜しさは知らざりける事の悲しさよ」との述懐にも、兄弟の敵討ちへの固い決意を推し量ることができず、そのまま永遠に別れたことによる母の悔しさも見出される。

以上のように、夫、子供に先立たれたことによって悲嘆に暮れるのみならず、自らのかつての命令こそ、兄弟の心に復讐心を植え付けるものであったと悔んでいる母の姿が窺われる。こうした自らの行動を後悔する母の言動は、特に兄弟の死後、弟を勘当したことと、子の気持を推し量ることができなかったことを歎く場面に明示されている。こうして見ると、母の苦悩の原因は夫と兄弟の死去だけでなく、彼女自身の行動にもあると考えられる。では、愛別離苦、および彼女自身の行動への後悔は出家という展開とどのように結びつけられるのか。

二　出家の様相

先行研究で触れたように、不幸に遭遇すると出家しようとする母の行為は、例えば、兄弟の父の死後の場面や兄弟の死を知った場面に記されている。では、出家は、母にとってどのような意味を持っているのか、また、兄弟の死後、出家を遂げた時の母の心境はどのように変化して往生に至ったのか。ここで、兄弟の父の死後、再婚後、兄弟の死後の三つの時期に分け、これらの問題点を考察する。

二-一　兄弟の父の死後

母は兄弟の父の死を聞いた後、何度も出家しようとする。夫の遺骸が送られてきた場面において、母の歎きと出家の意志を貫こうとする姿は次のように描かれている。

かかる身と成て我が身心に任せず口惜しけれ。①出家せむとは思へども身々とならむ時も憚りあり。②また淵瀬に身をも投げて一道にとは思へども、かかる身と成て死する者は殊に罪深しと聞けば、左にも右にも抑角駄、げに女の身ばかり口惜しきものこそなかりけれ

〔巻二「三十五日・四十九日の仏事」七六‐七七頁〕

母が夫の遺骸を見た時に脳裏に浮んできたのは、①傍線部、出家することと、②傍線部、河へ身を投げることである。しかし、出家すると、子供を出産する時にさしつかえがある、また、懐妊中、死んだ者は二重傍線部「殊に罪深し」と聞いたがために、出家、入水のいずれの道も選び取れない。

周知のように戦で夫を失った場合、出家して菩提を弔い、子を育てるのが武将の妻の常識的な生き方である。これは『平家物語』の小宰相譚に明示されている。小宰相が亡き夫を追って入水しようとするが、それに対し、乳母は次のように彼女を諌める。

しづかに身々とならせ給ひてのち、をさなき人をもそだて参らせ、いかならん岩木のはざまにても、御様をかへ、仏の御名をもとなへて、なき人の御菩提をもとぶらひ参らせ給へかし。かならず一つ道へとおぼしめすとも、生かはらせ給ひなんのち、六道四生の間にて、いづれのみちへかおもむかせ給はんずらん。ゆきあはせ給はん事も不定なれば、御身を投げてもよしなき事なり。

〔巻第九「小宰相身投」二四七頁〕

乳母は傍線部のように、出産して子供を育て、亡き夫の後世を弔うよう説得する。又、亡き夫の後を追って身を投げても、「六道四生の間にて、いづれのみちへかおもむかせ給はんずらん」とあるように、六道の間、どこで生まれ変わるか知れず、必ずしも亡き夫と再会できるとは限らないと説き、小宰相の身投げを押し止める。このように、乳母の諌言は戦により夫を亡くした際に、自らの命を絶って亡き夫の後を追うのではなく、生き長らえて夫の菩提を弔い、子供を育てるといった当時の武将の妻の役割を示している。

こうした『平家物語』の小宰相譚と母の行動とを合わせて見ると、母の心の動揺が浮かび上がってくる。母は後世で夫と再会したいという意志を貫くために、出家と入水のいずれかの道を選び取ろうとする。しかし、懐妊という身体的な制約と罪に対する意識により、武士の妻の常識に従って出家ができず、また、他人の常識と異なって自らの感情のままに入水することも実現できないこととなる。ここに、亡き夫への執着および心の動揺が同時に表されている。

母はこのように八方ふさがりの状況に陥ったが、出産後も、出家して亡き夫の後世を救済したいという思いを再度語っている。

「哀れ、己程の果報拙き者はなかりけり。さらば今一月も疾く生れて父をも見、父にも見えずて、蜉蝣と云ふなる虫の如く、生れて程なく死なむ事こそ無慙なれ。されどもこれは力及ばぬ事なり。我を恨むる事勿れ。己を捨つるも只事に非ず。今は翡翠の釵も用に非ねば、黒染めの衣に身を衰しつつ、山々寺々をも修行し、なき人の菩提をも訪はむと思へば、己をば身には副へぬぞ。

〔巻二「御房の誕生」八一頁〕

傍線部のように、生まれたばかりの子を野原に捨て、夫の菩提を弔って出家修行することを決意する。しかし、義弟の妻、伊藤九郎の女房は自らの子を捨てることを「なき人の御ためにも罪業となるべし」と諌め、その生まれたばかりの子御房を受け取る。

子供を捨てようとする母の行動について、壱貫田宏美氏は「夫の孝養のために我が子を捨てるのであって、決して非情なのではない」と指摘している。[4] 壱貫田氏の指摘によれば、夫の後世のため、子供まで捨てて出家するといった母の行動は批判的に捉えられておらず、むしろ、ここに亡き夫への執着と、それにより夫の後世救済を積極的に果たそうとする良妻としての姿が強調されていると考えられる。

こうして母は出産後も出家できず、また兄弟の祖父に再婚を勧められる。それに対する母の反応は次のように描かれている。

「咬口惜しの有様や。己らが父に後れざらましかば、今日明日かかる心憂き事をば聞くまじ」とて、二人の子共をば左右の膝に舁居ゑて、額を合せつつ悶え焦れ給ふも理なり。やがて守り刀を取り出でて、自が髪を切らむとて本結際に押し当て給ひけるを、守り奉る女房共早く見付け奉て刀を奪ひ取りつつ、伊藤入道にこの由をば申しける。

〔巻二「助通の妻の再婚」八五頁〕

母は曽我から迎えの人が到着したことを聞いた際に、傍線部のように髪を切り落とし、出家をしようとする。ここに最後まで貞節を守ろうとする母の姿が鮮明に描き出されている。最終的に、彼女が出家したら自害すると兄弟の祖父に言われたがために、兄弟の祖父に従って再婚を承諾せざるをえないこととなる。

以上見てきたように、兄弟の父の死後、物語は亡き夫への哀惜の念に堪えず、出家を遂げようとする母の行為を描き出した上で、良妻として印象づけている。ただし、出家したいという母の思いは、彼女が単に当時の社会規範に従おうとするために生じたのではない。子まで捨てて出家の願望を遂げようとすることや、再婚せよとの命令に追い詰められた際にすぐに髪を切り落とそうとすることから見ると、母は亡き夫恋しさの一念に執着していることが表されており、そのような執着こそ、出家の意志を貫かせようとする真の原因と考えられる。その意味で、兄弟の父の死後における出家は夫の死への悲しみを表すものであり、母にとっての悲哀から逃れる方法であると言ってよいだろう。

二-二　再婚後

母の再婚後、以前の悲しみは和らいできたが、兄弟の父の後世救済という願望を決して忘れていない。ただし、その願望は彼女自身ではなく、弟に果たしてもらうことになる。

母は兄弟の敵討ちへの思いを聞くにつけ、「今この少き者共の心の内いかがあらんずらむ」や、「怖しき者共の心ざまかな」とあるように、兄弟が復讐心を抱くことに悩んでいる。そのために、兄だけ元服させ、弟を箱根山の別当に預け、将来、出家させることを決意する。このように、兄弟の敵討ちに関する母の悩みは弟を出家させる根本的な理由となる。しかしながら、母はその理由を弟に言わず、後世救済のことのみを託する。

「汝が父はもとより筥根の権現を信じ進せし故に筥王とは名付けたり。されば筥根の別当のもとに行きつつ、学文よくして法師になりつつ父の孝養をも懃にし、童が後世をも助くべし。男になりては汝がためにも心苦しかるべし。我もまた由なき事と思ふべし。汝もよくよく計ふべし。父母の恩の忝き事をば、定めて存知したるらむものを」

〔巻四「筥王、筥根山へ登る」二一二頁〕

右のように、弟が箱根山に出発する前に、母は箱根権現に対する信心ゆえに、弟を「箱王」と名付けたと弟の名前の由来を語り、「法師になりつつ父の孝養をも懃にし、童が後世をも助くべし」とあるように、出家して亡き父と彼女自身の後世救済をするよう、弟に託する。弟に後世救済をしてもらいたいという母の願望は、母が弟を勘当する場面においてさらに詳しく語られている。

今日より後は親ありとも思ふべからず。童もまた子を持ちたりとも思ふまじきぞ。いづ方へも足手に任せて行き失せに失すべし。なかなかうたてき者の躰を見るこそ口惜しけれ。哀れ、げに河津殿程果報少き人はなし。未だ盛むなりし時死なば、只は死なずして、弓箭に懸りて修羅の苦患を受け給ふだにも悲しきに、適一人ある子を法師になして、合戦道の苦を助け奉らむとするに、案に相違して男になりぬ。いかなる人十人と五人持たる子だにも親の命に相叶ふらむ。（子が出家により親を救済するという天竺、震旦、本朝の出家譚の中略）されば、経にも『一子出家しぬれば七世の父母を助く』と説かれたり。唖の者をこそ法師になして、河津殿の後世を助けんと思ひしに、思ひの外の躰を見るこそ悲しけれ」

〔巻五「筥王元服、母に勘当される」二五五－二五六頁〕

傍線部のように、母は弟の出家の利益によって修羅道に苦しむ兄弟の父を救済してもらいたいという意志や、経に「一子出家しぬれば七世の父母を助く」と記されるように、子の出家による親の後世救済を語り、弟がその意志に背いたことを悲しんでいる。母の後世救済を果さないことは兄弟、特に弟が抱え込んだ懊悩の一つとなる。この点については後述する。

以上のように、兄弟の父と自らの後世を救済してもらいたいという母の思いは、弟を出家させる理由とされ、弟を勘当する場面においても繰り返し語られている。しかしながら、弟に言い出さなかった、敵討ちを止めたいという思いは、母が弟の出家を決意させる場面において明確に描かれており、出家の根本的な理由と見做される。前節で考察したように、再婚後、母は兄弟の命を案じつつ、曽我殿の立場を気遣い、頼朝の権威を憚っているため、兄弟の敵討ちを必死に止めようとしている。つまり、母は兄弟の父を亡くした直後のように、亡き夫に執着するのではなく、その悲しみを受け止めつつ、頼朝の脅威などの事態を冷静に見つめた上で、弟を出家させようと決断していることが窺われる。よって、母にとっての子の出家は、亡き夫と彼女自身の後世を救済してもらうためのものであるだけでなく、兄弟の無事、家庭の安定といった現世の安穏へと導くものを意味すると言える。

二-三　兄弟の死後

兄弟の首を見た際の母の悲嘆は「足高に倒れ懸て、「いかによ子共、一つ道へ引き具せよ」とばかりにて消え入り給ふも哀れなり」と描写されている。母が悲しみのあまりに出家しようとする場面は次のとおりである。

則て髪を切らむとて御簾の内へ走り入りつつ、曽我殿の差し替への小刀を取て本結際に押し当てたりけるを、曽我殿心疾くも見付けて小刀をば奪ひ取りぬ。曽我殿泣く泣く云ひけるは、「女房の悲しみ、助信が歎きもただ同じ事なるべし、少き者共をば誰に預け置き、何になれとか思し食す。今は歎くとても活るべからず」

〔巻十「兄弟の葬送、往藤内遺族の嘆き、虎の嘆き」二四五頁〕

傍線部のように、母は曽我殿の小刀を取り、髪を切り落として出家しようとする。それに対し、曽我殿は「少き者共をば誰に預け置き、何になれとか思し食す。」と言い、残される子の養育で母の出家を思い止まらせる。

悲しみのあまりに出家しようとする母の行為は、前掲の兄弟の父の死を歎き悲しんだ時にも見られ、特に、再婚を迫られた時と似通っている。このように、母は出家を死別による悲哀から逃れる道として意識していることが確認できる。

母が出家願望を果たすことができるのは兄弟の三周忌である。出家の場面を検討する前に、出家の前に置かれる、兄弟の道行きを辿る場面、及び別当と対面する場面に着目して、母がどのように苦悩を克服して出家に至ったのか考察する。

兄弟の死後、虎が曽我の館を訪ねる。母は兄弟を失った悲哀のみならず、弟を勘当したことへの後悔や、兄弟の気持を推し量ることができなかったことも虎に述懐する。翌日、母は百箇日の供養のために、虎と一緒に箱根へ赴く。虎と兄弟の道行きを辿る場面においては、母の歎きは繰り返し描写されている。特に注目したいのは、兄弟の道行きを辿っている最中、彼らの存命中の心情を兄弟の従者から聞いた後の母の反応である。

母と虎が鞠児河を渡った際、兄弟の歌が次のように語られる。

鞠児河を打渡りければ、「波に諍ふ我が涙かな」と十郎が詠めける歌の心、「今日は敵に合ふ瀬と思へば」と五郎が読みける歌の心、今更思ひ合はされて、曽我の女房は泣く泣く、

たまさかに行き交ふ道の涙川波の立居に袖朽ちぬべし」

〔巻十「母と虎、筥根に赴く」二五九－二六〇頁〕

右のように、彼女たちは「五月雨に浅瀬も見えぬ鞠児河浪に争ふ我が涙かな」という十郎の歌と、「渡るより深くぞ頼む鞠児川親の敵にあふ瀬と思へば」という五郎の歌を従者たちから聞かされる。ここに、父のために敵討ちを果たそうとする強い意志を持ちながらも、別れによる悲哀や苦しみを抱いた兄弟の心境が母へ伝えられることが窺われる。兄弟の歌に対して、母は波線部「今更思ひ合はされて」と言い、彼らの敵討ちを止められなかったことを後悔している。又、傍線を付した母の歌に見られるように、兄弟と同じ道を辿り、彼らの心中を思うにつけて、悲しみが母の心から溢れてくる。

母の後悔の念は、箱根山別当と対面する場面においても表されている。兄弟の百箇日の仏事法要で、別当は子に対する母の愛情や、子に先立たれる親の故事を母に説いた後、弟の手跡が残る経を披露する。

かかる為師もありしか。生死無常の理は始めて驚くべきにあらねども、また今開題供養の御経の裏はこの人々の手跡なり。これを見るにも定めなき憂世は最渡思ひ知られて哀れなり。『問はるべき身の問はむ度には』と書かれたり。外にて見るだに悲しきに、倍して御身の上に差し当りぬる御心の内、さこそ悲しく思し食されけめと、哀れに覚えて候。

〔巻十「箕根にての法要、虎の出家」二六六頁〕

経の裏に、傍線部「問はるべき身の問はむ度には」という五郎の歌の下句が記されている。実は兄弟が敵討ち決行に出発する前に、母への歌を形見として書き残す場面がある。弟の歌の全句は「定めなきうき風いとど思ひ知れ弔はるべき身の弔はんたびには」とある。「定めなきうき風いとど思ひ知れ」という上句に、自分の死をきっかけに、母に無常を理解してほしいという弟の思いが表されている。又、「問はるべき身の問はむ度には」という下句から、母に先立って、母の後世救済を果たせないことによる悲しみも読み取れる。前掲のように、兄弟の敵討ちを制止するために、母が親の供養を持ちだす場面がある。母は弟を出家させようとする際に「法師になりつつ父の孝養をも勤にし、童が後世をも助くべし」と言い、亡き夫と自らの後世救済を命じる。こうして、物語は下句を、弟が母に救済を託される場面と対応させ、親の供養を果たせないことによる弟の苦悩を示していることが推測される。

法要が終わった後、母は弟が泊まった部屋に入り、壁板の下長押に書き付けた弟の歌を見る。

壁の裏板の下長押に書付けたる歌を見給へば、

出でていなば心軽しと云ひやせん身のありさまを人の知らねば

この歌の傍に引下げて、筥王丸生年十七歳と書付けたり。これは師匠に暇を乞はず、人にも行方を知らせずしてただ一人出でける由を書付けたるべし。母も虎もその床に伏し辷びつつこの者共に差し向ふ心地して、中々由なき処に来れりと悶へ焦れ給ふも理なり。

〔巻十「筥根にての法要、虎の出家」二六八頁〕

傍線部のように、敵討ちを決意した心情を誰も分からないという弟の苦悩や孤独感が表されている。母は弟の歌を見て彼の苦悩、孤独感を知ったが、波線部のように「中々由なき処に来れり」と後悔している。

以上のように、兄弟の道行きを辿る場面と別当と対面する場面において、兄弟、特に弟の苦悩が再度語られていると同時に、敵討ちを止められなかった後悔の念に取りつかれている母の姿も示されている。その後、兄弟の三周忌の法要で母は出家を遂げることとなる。

母は兄弟の供養のために造られた大御堂に籠もって一心に修行をする。母に関する記述の末尾に阿弥陀仏が来迎する光景が描写され、母の往生が明確に示されている。ここで注目したいのは往生の場面における母の心情描写である。

子共に別れし時は屡袂を東岳忍土の夜の露に潤しき。今はまた御感に預る日は咲を西方の九品浄刹の暁の蓮に含みたり。今はただ娑婆離別の愁ひを翻して浄土再会の縁とせむ。一念弥陀仏、即滅無量罪の徳用を忽に顕したり。現受無比楽、後生清浄土、快楽をば誰かこれを疑はむ。その後、正治元年己未年五月廿八日の申の尅には曽我の女房は大往生をぞ遂げられける。時に、青空高く晴れて、紫雲斜めにたなびき、音楽は西に聞えて聖衆は東に来り給ふ。端坐して首を低れ、寂然として気絶えぬ。面色殊に鮮やかにして形容咲めるが如し。虎を知識として曽我の入道殿は械釈しつつ、諸行無常の暮の煙に類へてんげり。

〔巻十「第三年の法要、母の出家、往生」二七九－二八〇頁〕

右のように、物語は往生へと展開するにあたって母の心情変化を明示している。「子共に別れし時は屡袂を東岳忍土の夜の露に潤しき。今はまた御感に預る日は咲を西方の九品浄刹の暁の蓮に含みたり」とあるように、母は臨終の時、兄弟の死による悲哀を受け止められるよ

うになった。又、傍線部「今はただ娑婆離別の愁ひを翻して浄土再会の縁とせむ」と言い、現世における愛別離苦を翻して、浄土での再会の縁とすることが描かれている。

母の往生について、阿部美香氏[5]は別当が母に見せた弟の歌・遺言と母の往生の関連性を次のように論じている。

「定めなきうき風いとど思ひ知れ弔はるべき身の弔はんたびには」という歌は、不孝の罪を許され小袖を賜った五郎が、後に残される母の哀しみを思いやり詠んだ歌であった。この歌の意を、（弟の遺言である:執筆者注）「親は一世の契とは申し候へども、必ず後生にては参り合ひ進すべく候」と認めた言葉と合わせて解釈するならば、自分たち兄弟の供養の場をもって母の老少不定を悟らしむる機縁となし、浄土再会の縁にしてもらおうと母をいざなうものであることが判る。

右のように、阿部氏は弟の歌・遺言に着目して、それらに表される弟の思いを、老少不定の原理を母に悟らせ、往生へ導くものと捉えている。別当が見せた弟の遺言以外に、敵討ち決行の道中、兄弟が書いた別の遺言もある。兄の手紙の追書に「今年七ヶ年の間、毎日六万反の念仏をば母御前の後生菩提に進する。これを以て逆修の善根として一仏浄土の縁となさせ給ふべしと云々」、弟の手紙の追書に「生年十六才より毎日六万反の念仏をば母御前の後生菩提に進する。これを以て逆修の善根として一仏浄土の縁となるべしと云々」と書いてあるように、自らの念仏の功徳によって母に往生を遂げてほしいという兄弟の願望が明確に表されている。このような兄弟の遺言の内容と、特に兄弟の供養の場面において彼らの思いが別当の説教により再度語られる設定から見ると、阿部氏が指摘するとおり、母に往生を遂げてほしいという兄弟、特に弟の思いが物語を通して一貫しており、母の往生との結びつきを見出すことができる。

ところが、「今はただ娑婆離別の愁ひを翻して浄土再会の縁とせむ」という母の言説から見ると、阿部氏が注目する母の往生を祈る弟の思いの他に、母自身の行動にも往生へと導く要素があると考えられる。もちろん、兄弟の道行きを辿る場面と、別当と対面する場面において、母の悲哀と後悔の念のみが表現されている。しかし、両場面は兄弟の敵討ちを決行する時の心情を、周囲の人達の語りを通して再現した上で、悲哀と後悔の念を抱く母の姿を強調しているからこそ、兄弟の供養に励み、菩提心を起こした母の動機が窺われる。母は募った苦悩により修

行に励んだ結果、往生の場面において「子共に別れし時は屡袂を東岳忍土の夜の露に潤しき。今はまた御感に預る日は咲を西方の九品浄刹の暁の蓮に含みたり」とあるように、悲哀を受け止めることができたという心情変化が提示されている。こうして見ると、両場面における兄弟の心境の再現は母の悲哀、特に後悔の念を促しながらも、往生の場面において修行に励み、苦悩を解消させる要素として機能していることが考えられるのである。

以上のように、兄弟の父の死後、幾度も出家を遂げようとする母の行為は、単に亡き夫に執着した結果しかない。また、再婚後、弟を出家させようとすることにも、出家を現世の安穏へと導くものとして認識する母の姿が示されている。こうした母の最初の出家願望は菩提心から生じてきたものではない。物語は菩提心へと展開するにあたって、兄弟の道行きを辿る場面と、箱根山の別当と対面する場面において兄弟の苦悩を再現した上で、母の悲哀と後悔の念を、供養・修行に励む契機としている。ここに、阿部氏が指摘する、母に往生してほしいという兄弟の思い以外に、悲哀を抱いたが故に修行に励む母自身の行動も苦悩を克服させる要素と認められる。

おわりに

以上、母の苦悩と出家の様相を考察した。兄弟の父の死後、物語は悲しみのあまり敵討ちを幼い兄弟に強く意識させる母の姿を描き、悲劇性を浮き彫りにしている。母の命令は先行研究が指摘するように兄弟の敵討ちへの動機であるとはいえ、兄弟の復讐心を煽るものではない。又、兄弟の敵討ちへの思いを必死に止めようとする母の言動から、物語は母の行動を罪と捉えていないことが明らかになる。兄弟の死後、子を失った母としての歎きに重点が置かれている。それと同時に、弟を勘当したこと、子の気持を推し量ることができなかったこと、特に兄弟の敵討ちを止められなかったことを後悔する母の姿も描き出されている。このように、母の悲劇の根底に愛別離苦のみならず、自らの行動への後悔も見出される。苦悩の克服の様相について、弟を出家させようとする、特に、愛別離苦に耐えられないがために出家をしようとする母の行為が繰り返し描かれている。ここから、母は出家を、悲哀から逃れる方法、あるいは、安泰な生活をもたらすものとして意識していると言えよう。彼女が実際に苦悩を克服して発心に至る過程は、往生場面だけでなく、兄弟の道行きを辿る場面と、箱根山の別当と対面する場面

においても窺われる。両場面は兄弟の心境の再現を通して母の苦悩を打ち出しただけに、兄弟の供養・修行に励む動機、往生の時に「娑婆離別の愁ひ」を悟ったという心情を変化させる要素が浮かび上がってくる。ここから、夫、子を亡くした女性が悲哀から離れられないにもかかわらず、悲哀そのものこそ発心へ導くものであり、悟りに達する契機ともなっていることを示そうとする物語の意図を垣間見ることができるだろう。

注

（1）会田実「「真名本　曽我物語」の母親像―その悲しみの原質―」（『中世文学研究』十八　一九九二年八月）

（2）小林美和「母の〈罪〉―真名本『曽我物語』の読みをめぐって―（上）」（『青須我波良　帝塚山短期大学』五四　一九九八年十二月）

（3）小林美和「真名本『曽我物語』覚書―〈御霊〉と〈罪業〉をめぐって―」（『帝塚山短期大学紀要』三二　一九九五年二月）

（4）壱貫田宏美「曽我物語の女性像」（『広島女学院国語国文学誌』九　一九七九年十二月）は、子を捨てる母の行動を次のように論じている。

夫の孝養のために我が子を捨てるのであって、決して非情なのではないと聞き手に訴えている。中世では死者及び、死者の霊を弔うための業はどのようなものも浄化され、この御房を捨てるという行動も、死者の鎮魂のためであるならば許され、そうせざるを得ない母の行為は万人に認められ、かえって美化されて受け止められている。ここに、中世文学の一つの特色があると言えよう。

（5）阿部美香「曽我兄弟の母―懸子の文を通じて―」（『国文学解釈と鑑賞　別冊　曽我物語の作品宇宙』二〇〇三年二月）

使用テキスト

- 『東洋文庫　真名本曽我物語１』（平凡社　一九八七年）
- 『東洋文庫　真名本曽我物語２』（平凡社　一九八八年）

- 『新編日本古典文学全集４６　平家物語２』（小学館　二〇〇六年）

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。

第六章　真名本『曽我物語』における大磯の虎
―愛執と女人往生の様相をめぐって―

はじめに

大磯の虎（以下、「虎」）は、夫曽我十郎と離別して以来、愛別離苦による悲哀を抱え、出家修行をしても、愛慕への執着を断ち切れない女性として描き出されている。

虎の苦悩譚に関して、高原由香里氏[1]は、自らを世間から賤視される存在と捉える虎の姿について論じ、村上学氏[2]は、愛別離苦の悲哀を抱えると同時に、愛する者の死後、現世に生きようとする、虎をはじめ女性の登場人物の態度を指摘している。しかし、十郎の死後の虎の行動に注目してみれば、遊女の身分による苦悩と、愛別離苦以外に、未だ言及されていないもう一つの苦悩が存在していることが分かる。それは、愛する者の苦悩への共感による苦悩である。そのような苦悩は、愛する者の鎮魂・救済という虎の行動を推し進める一因と見なす事ができるものである。よって、先行研究において指摘されている二つの苦悩と合わせ、第一節において考察する。

十郎の死後、虎は曽我兄弟（以下、「兄弟」）の後世のために、出家し、修行に励みながらも、亡き愛する者を偲び、悲哀を抱え、臨終の際まで、愛する者への執着を振り払うことができなかったにもかかわらず、そのまま往生を遂げたと解釈せざるを得ない描写が真名本『曽我物語』ではなされている。そうすると、最終的に虎は苦悩を克服できたのか、あるいは、どのように苦悩を克服したのかという疑問が浮上するだろう。このような問題意識から、第二節において虎の苦悩の（非）克服の様相を考察する。

さらに、亡き愛する者への執着、いわゆる愛執は、苦悩の根本的な原因として存在し、虎の往生の場面にも表出することから、虎の表象における愛執の様相を考察する必要がある。亡き愛する者への執着によって悲哀に暮れつつ、愛する者の救済のために懸命に修行し、最終的に往生を遂げる女性の姿は、真名本『曽我物語』と影響関係を持つ『平家物語』における建礼門院徳子の描写にも表れており、虎の表象と建礼

門院の表象の共通点が窺える。[3] そこで、第三節において、『平家物語』の建礼門院の表象における執着と往生の様相を踏まえ、虎の往生の場面における愛執の意味を考えることとする。

一　苦悩の様相

本節では、虎の苦悩の克服について論じる前提条件として、虎の苦悩の様相について整理・分析することとする。

一 - 一　遊女という身分による苦悩

（イ）「咬恨めしの御心の中、問はずは知らせじと思ひ給ひけるかや。まことに童と申すは大磯の遊女にて、浅猿き身なれば①世の常の女の数には思ひ給はじ。されば始めより仰せられぬは理なれども、身に取ては両意なし。殿に憑まれ奉て後は、早や三年になりぬ。今更恨み奉るべからず。まことにさやうに思ひ立ち給ひなば、童も髪を剃りつつ別の庵室を結ひ副へて、衣をも染め、袈裟をも洗ぎ、殿は爪木を取り給はば童は華を摘みて、①一仏浄土の縁となり奉るべし。猶しそれをも免し給はずは、自ら髪を刎り落しつつ山々寺々をも修行せむ。釈尊の御出家の後、まことの菩提に入らせ給ひし暁は、耶輸多羅女も御出家あり。（夫婦の縁によって夫婦とも同じ菩提の道に入る先例、中略）されども夫婦の縁に依る御事なれば、同じ菩提の道に入り給ふ。②故に法華の方便品には『仏種従縁起　是故説一乗』と説かれたり。仏種は必ず縁より起ると云ふ事は釈尊の金言なり。況んや下位の我らをや。況んや貧道孤独の身においてをや。今まで厭はざりけるこそ悲しけれ。後にも聞し食せよ。さやうになり給ひなむ後は、この躰にてあり畢つまじきぞ」

〔巻六「十郎、虎に宿願のことを語る」二二一 - 二三頁〕

（ロ）「咳恨めしや。なほも正直には仰せられざりける事の悲しさよ。これ程の大事をば、争か云ふに甲斐なき女の身なりとも露ばかりも披露すべき。ただ一人御在す母御前をだにも心強く振り捨てて思ひ立ち給ひなん事を、何思ふともあるに甲斐なき身にて止め申すとも少しも叶ふまじ。されば力及ばぬ別なるべし。しかれどもかやうに知らせ給ふ事こそ喜しけれ。まことに仰せの如く、童が党のやうなる遊者は、少々宿世なければ徳見する人をば思はしきやうに賞し、貧し気なる者には目をも見懸けぬは世の常の習ひなれども、童、殿を見初め奉て後は早や三年になりぬ。浅からず思ひ奉て、心苦し気なる御有様を見奉る度ごとに、御志の程をば知らねども、②人と等しき身ならましかば、などか時々の便ともなり奉らざらむ。云ふに甲斐なき身こそ口惜しけれと、由なき心を尽す事もあり。

〔巻六「十郎、虎に宿願のことを語る」二五 - 二六頁〕

（イ）は、虎が、「殺された父の供養のために、出家遁世するので、別れなければならない」という十郎の告白（（イ）の直後、嘘であることを告白する）を聞き、悲しむ場面である。（ロ）は、虎が、十郎から敵討ち決行の意志を告白されるものの、遊女という立場にある自分には何の助力もできず、落胆する場面である。まず、（イ）二重傍線部「浅猿き身」、「下位の我ら」、「貧道孤独の身」と、（ロ）二重傍線部「童が党のやうなる遊者」、「甲斐なき身」からは、遊女は身分が低いという虎自身の身分に対する考え方が確認できる。さらに、（イ）傍線部①と（ロ）傍線部②からは、人並みの女性と同じ立場にない、十郎を何も助けられないという我が身を恨んでいることが分かる。ここで注目されるのは、右の引用から、遊女という身分による虎の苦悩が、虎の発心と連関していると考えられること、及び、次に示すように、その発心が、十郎が敵討ちを告白する場面と連関していることである。

《十郎が敵討ち決行を告白する場面》

これ程に真実の志を思ひ知らずして、心強く隠し遂ぐるものならば、後の恨みも深かるべし。女性なれどもこれ程に小賢う語り連くる詞の末を空しくして、畢てむ事も哀れなり。また自ら思ひ出づる事もあらば、恨むる心もなく念仏の一返なりとも申して廻向せば、量なき功徳なるべし。女性ながら心深き者なれば、知らせたりとも披露せじものを。

〔巻六「十郎、虎に宿願のことを語る」二四頁〕

十郎が虎に告白する理由は、右のように、虎の愛慕に感動した事と、傍線部「心深き者」と賞賛される虎の性格である。虎は、前掲（イ）波線部①「一仏浄土の縁となり奉るべし」とあるように、夫婦ともに出家する縁によって一緒に極楽往生を遂げようという願いを持ち、又、波線部②『法華経』に記された釈迦の因縁果報の教えを語っている。そのため、十郎に「心深き者」と褒め称えられたのである。そのような虎の姿からは、恋愛の他に仏教的な側面も見えてくる。

このように、虎の純粋な愛と「心深き者」とされる性格から、十郎にとっての虎は普通の女性、遊女という身分を越える特別な存在であると言える。だからこそ、十郎は敵討ち決行の意志を告白した上に、死後、虎に供養をしてもらいたいと望んでいたのである。

以上のように、遊女という身分による虎の苦悩は、単に不遇な境遇を表現するのみならず、愛する者への思慕の深さと仏道への信心と連関していることが分かる。

一-二　愛別離苦

虎は十郎から敵討ちの決行を聞き、次の場面のように十郎との離別を歎く。

「それにまた出家遁世をもして、また再び返るべからずと仰せられつるだにも、飽かぬ別の悲しさは喩へん方もなかりつるに、されどもそれは生きての別なれば、我も人も甲斐なき命だにもあらば、もしやの憑みもありつるに、さては永き別にてあらん事の悲しさよ」とて最度涙も旱敢へず悶え焦れけり。

〔巻六「十郎、虎と名残を惜しむ」二六頁〕

先述したように、十郎が、「殺された父の供養のために、出家遁世するので、別れなければならない」と言ったことも悲しいことではあるが、それは「生きての別」なので、再会できる機会もあるのだろうが、十郎が敵討ちの本意を遂げるということは、傍線部にあるように永遠の別れである、と虎は歎くのである。愛別離苦は十郎との離別の場面のみならず、出家修行、とりわけ往生の場面にも表れており、虎の苦悩の様相の中で、最も注目されるものであるが、この点の考察は後述することとする。

一-三　愛する者の苦悩への共感による苦悩

兄弟の死後、虎はすぐに出家するのではなく、曽我の館を訪れ、兄弟の母（以下、「母」）と対面し、虎は兄弟の百箇日の供養のために、母と一緒に箱根山の別当の所へ赴くのであるが、ここで興味深いのは、虎と母が、兄弟の敵討ち決行の道行きを辿るという設定である。虎と母の道行きにおいて、兄弟と道行きを共にした従者たる丹三郎と鬼王丸から、生前の兄弟の姿が語られ、虎と母の心に兄弟の苦衷が彷彿した時、兄弟の苦悩への共感が生じるのであるが、その共感による虎の苦悩を考察する前に、まず、兄弟の敵討ち決行の道行きにおける苦悩を見ていくこととする。

《兄弟の道行き》

- 鞠児河

「未だ知し食さずや。罪人の渡る河は濁るなり。死出の山・三途の大河と云ふ事ありとて、我らが思ふには、鞠児河こそ三途の大河、筥根の御山こそ死出の大山よ。鎌倉殿こそ琰魔王よ。親の敵に合はむ処こそ琰魔の庁よ。数万人の侍共こそ牛頭馬頭阿防羅刹にてはあらむずれ」とて打渡りけり。十郎は迎への岸に打上るとて、①「五月雨に浅瀬も見えぬ鞠児河浪に争ふ我が涙かな」五郎も手縄を引へて、②「渡るより深くぞ頼む鞠児川親の敵にあふ瀬と思へば」

〔巻七「兄弟、箱根路に向かう」七三頁〕

まず、十郎は鞠児河を渡った際、傍線部①「五月雨に」歌を詠む。この歌には、十郎の悲歎に満ちた心情が表現されている。なお、一方の五郎は傍線部②「渡るより」歌を詠み、父の敵討ちを実行したいという強い意志を表明している。

- 湯坂の手向

十郎は湯坂の手向にて跡の方を返り見ければ、曽我の里の朝まだき、煙も未だ晴れ遣らず。佐河・古宇津・高礼寺の山の方遥々と見送るに付けても、飽かぬ別の大磯の宿、年来馴染みし夫婦の事、思ひ出でられて悲しかりければ、「咲見給へ、五郎殿。咲の煙の見ゆる里こそ、我ら幼少の時より住み馴れし処なれ。只今この山を打超えなん後は、いづれの生にてまたも見るべき」と云て涙を流せば、

〔巻七「兄弟、箱根路に向かう」七三‐七五頁〕

次に、十郎は湯坂の手向で後ろを振り返り、炊事の煙に霞む曽我の里を見ると、故郷を懐かしみ、又大磯の方を向くと、虎の事を思い出す。このように、兄弟の道行きにおいては、郷愁と愛する者との別れの悲哀が見られる。

《虎と母の道行き》

- 鞠児河

鞠児河を打渡りければ、「波に諍ふ我が涙かな」と十郎が詠めける歌の心、「今日は敵に合ふ瀬と思へば」と五郎が読みける歌の心、今更思ひ合はされて、曽我の女房は泣く泣く、これを聞きも敢へず、虎は流るる涙を押へて、「契あらばいかで歎きをつげやらん死出の山路の休み処へ」

〔巻十「母と虎、箱根に赴く」二五九‐二六〇頁〕

一方、虎と母は鞠児河を渡った際、《兄弟の道行き》傍線部①の十郎の歌と、傍線部②の五郎の歌を従者たちから聞いて、波線部「今更思ひ合はされて」とあるように、兄弟の心に共感する。その十郎の歌に表された悲哀に対して、傍線部のように、虎は自らの悲しみを死出の山路で休んでいる十郎の魂に何とかして伝えたいという歌を詠む。それによって、虎の十郎への共感と悲哀への同感が表出されたのである。

● 湯坂の手向

湯坂の手向に打登り跡の方を返り見て、虎、「哘、御覧侍へ。この人々の打登り給ひける時も、只今の如く哘の故郷を返り見て、いかばかり心細く思はれつらむ。今また見ても心憂し」「この躰にて跡の古里を見むことも只今ばかりの事ぞかし。筥根の御山にて出家を免さるるものならば、足に任せて迷ひ出でつつ、念仏三昧を勤行してなき人の後世を助け、我が身の菩提を助けむと思ひ切て出づる道なれば、事も愚かにあるべきや。別の涙の倍鏡、懐中に入らむ事も今日ばかりなり。筥根の坊に捨てむ後はまた見る事もあらず」

〔巻十「母と虎、箱根に赴く」二六〇‐二六一頁〕

次に、兄弟と同じように湯坂の手向を登った虎は、兄弟が振り返って故郷を見た際、郷愁を感じただろうと兄弟の心情を推し量り、傍線部のように出家修行によって兄弟の後世を助けたいという願いを吐露する。又、波線部のように自らも仏道に入り、愛別離苦を乗り越えようと望んでいたことが分かる。

以上のように、虎が、兄弟の道行きを追体験することによって、虎の兄弟への共感とそれに起因する苦悩が惹起されたのである。この道行きの設定により、愛する者の救済と虎自身の苦悩の克服というテーマが提示され、兄弟の救済譚と虎の出家譚への展開が用意されると考えられるだろう。

二　苦悩の克服

前節では、虎の苦悩の様相を見てきたが、本節では、虎がどのようにその苦悩を克服したのか、あるいは、していないのかを考察する。

二-一　出家と供養

兄弟の百箇日の法要が終わった際、虎は箱根の別当を戒師として出家し、「禅修比丘尼」と称する。虎が出家する場面は次のとおりである。

虎は本より袈裟衣を用意したりければ、別当を戒の師と為奉て出家しつつ、名をば禅修比丘尼とぞ申しける。労しかるべき齢かな、生年十九歳と申す建久四年癸丑九月八日には花の袂を改めて深き墨染に替へつつ、朝夕見るに飽き足らぬ袖の鏡を取出でつつ、権現の御正躰に懸け奉て、「現世安穏後生善処」と祈りつつ、「別れし諸人を一仏浄土へ」と念じて

〔巻十「箱根にての法要、虎の出家」二六八-二六九頁〕

傍線部「花の袂を改めて深き墨染に替へ」という表現によって、遊女から出家者への虎の変貌が示されていると言えよう。出家した虎は兄弟が亡くなった富士野の井出を訪れ、四天王寺をはじめ、寺社に参詣参籠する修行の旅に出た後、一周忌の法要のために曽我へ戻る。虎が母に再会する場面は次のとおりである。

母は虎が顔をつくづくと見給ひて、「さしも花色にて厳しかりし顔付も黒み亙りて、何賀年寄り躰に見ゆる哀れさよ」

〔巻十「兄弟一周忌の法要、丹三郎・鬼王丸出家」二七二頁〕

母は虎の老けた容貌を見て、「哀れ」と言った。そのような母の言葉によって、虎の外形の変化が強調される。その後、兄弟の納骨、回忌の供養等、兄弟の供養救済に関わる宗教的な役割が次々と記される。このような出家者、供養者への虎の姿の変化によって、「甲斐なき身」という以前の存在から出離し、遊女という身分による苦悩を克服した虎の姿を見出すことができるだろう。

二-二　十郎の思いが残る場の再訪

十郎の思いが残る場を辿る虎の行動については、先述した、兄弟の従者たちに導かれた虎と母の道行き譚において、その一端を見てきた。しかし、他人に導かれ、自らの身へ兄弟の苦悩を引き受ける道行きの他に、虎自身の意思によって十郎の思いが残る場所を訪れ、十郎の面影を偲ぶ虎の道行きがある。

十郎の思いが残る場の中で、虎が最もよく訪れる場所は兄弟の故郷の曽我である。虎は十郎と別れる前に、曽我へは一回しか連れて行ってもらっていなかった。しかし、曽我は二人の最後に別れた場所であるので、虎にとっては最も思い出深い場所と考えられるだろう。そこで、十郎の死後の、虎の一回目と二回目の訪問に注目する。

《一回目の曽我訪問》

虎は母の後躰を見送り奉て、十郎に別れし時の心地して始めて思ひぞ倍りける。物を思はぬ時だにも龝の心は悲しきに、軒半を吹く風の音は言問顔に過ぎ行けば、最度辛さぞ倍りける。

〔巻十「虎、曽我の里を訪ねる」二五八頁〕

一回目の訪問は虎が初めて母と対面した百箇日の供養の時である。右に引用した文章では、十郎と最後の夜を過ごした部屋に戻った際、秋の雰囲気の中でますます深い悲しみに沈む虎の心情が表現されている。傍線部の「物思いに沈んでいない時でさえも、秋は心を悲しくするものなのに、軒先を吹いてくる風の音がものを言いかけるように過ぎて行くとますます辛さがまさった」という虎の心情描写は、『東洋文庫真名本曽我物語2』（平凡社　一九八八年）の注で示されているように、『新古今集』秋・西行法師の歌「おしなべて物をおもはぬ人にさへ心をつくる秋のはつかぜ」等にしばしば見られ、和歌的情緒に満ちた表現であると言える。ここで注目したいのは、二重傍線部「言問顔」の

ように、風の音を、ものを言いかけるような人の声となぞらえ、十郎と話した最後の別れの夜を想起する描写である。それは単に愛慕による悲哀を表す典型的な和歌表現に相違ないが、目にした風景に十郎の姿を投影し、昔の面影を偲ぶ様子は、虎の道行き譚において、他にも見られるものであるので、確認しておく。

《二回目の曽我訪問》

虎は住み馴れし古の屋形へ立ち入りたれども、見馴し人ぞなかりける。千種の華を見亘せば、昔の人の香して、漫に涙ぞ進みける。

〔巻十「兄弟一周忌の法要、丹三郎・鬼王丸出家」二七二頁〕

虎は出家後、一回忌の供養のために曽我に戻り、十郎の館に入って、庭で千草の花を見ると、十郎の袖の香りがするように感じている。二重傍線部「昔の人の香して」という表現は『東洋文庫　真名本曽我物語２』の注で指摘されているように、『古今集』夏・よみ人しらずの歌「さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする」等に見られるものであるが、虎は実際に十郎の姿をそこに感じたのだろうか。

そこで、その後、虎が兄弟の骨を納め、松井田の宿に泊まった際の描写を見ると、

碓井の峠に息みつつ、なき人は音信もせで玉鉾の待ちし月日ぞ帰りきにけり。かくてその夜は松井田の宿に宿て、泣く泣く夜をぞ明しける。「せめて別れし諸人の、夢の枕にも来て、などか幻の間の言告もやなかるべき」と悲しくて

〔巻十「虎、善光寺詣、京の小次郎の妻に逢う」二七六頁〕

傍線部の歌のように、亡き十郎の「音信」がないと歎き、又波線部のように、せめて十郎が夢に現れ、「言告」してほしいと吐露していることが確認できる。よって、「昔の人の香して」という表現は、「音信」や「言告」の類ではなく、前掲の「物を思はぬ時だにも」と同様に、典型的な愛慕を表す表現と見なすべきだろう。

以上のように、再訪して目にした風景の中に、十郎の姿を連想する表現が用いられていることが窺えるだろう。

次に注目したい場所は、虎が二回訪れる、兄弟の死に場所、井出の屋形である。一回目の訪問は兄弟の百箇日の供養の後、すなわち、虎の出家直後のことである。十郎が虎のもとに通っていた頃の一夜の別れの悲しみが蘇り、それよりも辛い死別によって空しい人生を送っている虎の心情が表出されている。しかし、一回目の訪問には、問題となる十郎の面影の幻覚が確認できないため、二回目の訪問のみを検討することとする。

《二回目の井出の屋形訪問》

（イ）「これは曽我十郎殿と五郎殿と富士の郡六十六郷の内の御霊神とならせ給ひて候ふ間、富士浅間の大菩薩の客人の宮と崇め奉る御神」と申しければ、虎はこれを聞て、昔の面影に合ふ心地して七日七夜は社の内にて不断念仏しつつ、明方になりければ、虎社を出でて泣く泣く

（ロ）出でて行くあとの恋しき富士の根のこのもと神のひとりぶしとは

（と）詠みて出でければ、森の中の大木の梢に十郎が声付きと覚しくて、

出でて行くあとを見るにも馴れそめし昔の人の袖の香ぞする

これを聞て虎はまた立ち帰り、七日七夜念仏して二人の聖霊成仏得道と祈り、八日と申せしには社の内をば出でにけり。その後は曽我の里へ返て不断三昧念仏をぞ行ひける。

〔巻十「虎、再度伊出の屋形訪問」二八〇-二八一頁〕

二回目の訪問は三回忌の法要直後である。今回が一回目と異なるのは、兄弟を祀る社があることである。（イ）では、兄弟が富士郡六十六郷の御霊の神となったことを聞いた虎は、傍線部のように、十郎の昔の面影に会う心地がして、七日七夜参籠し、一心に念仏する。（ロ）では、虎が社を出ようとする時に、「出でて行くあとの恋しき」と十郎を思って歌を詠じたところ、虎は自らの歌に応えるように「出でて行く

あとを見るにも」という十郎の歌が、二重傍線部のように幻聴として聞こえる。そこで、虎は立ち戻り、七日七夜念仏し、兄弟の御霊が成仏するように祈る。その後、虎は曽我に帰り、不断三昧念仏を行う。

前掲波線部「せめて別れし諸人の、夢の枕にも来て、などか幻の間の言告もやなかるべき」という願望と、この場面に見られる十郎の幻覚の出現を合わせて見ると、十郎に会うような心地と、幻聴が発生したことは、過去の十郎の面影を偲ぶのみならず、現世における十郎の存在を求める虎の潜在意識を示唆していると考えられるだろう。

虎が兄弟の故郷である曽我、兄弟の死に場所である井出の屋形を再訪するという設定は、先述の道行きの際、虎が「出家を免さるるものならば、足に任せて迷ひ出でつつ、念仏三昧を勤行してなき人の後世を助け」と発言したように、兄弟の供養・救済に対する虎の役割と関わっており、鎮魂譚を支えるものと見なされる。しかし、兄弟の思いが残る場で、幻覚を通して十郎の面影が想起されるという出来事に注目すれば、そのような虎の行動は単に使命を果たすことを示すのではなく、鎮魂の使命の裏に、現世において十郎に再会したいという虎の願望が投影されているものと捉えられる。このように、悲哀が絶えず、まして現世にいたまま愛する者に再会したいという虎の意志が表されたことから、虎は、兄弟の道行きを辿った際に抱いた、出家及び修行による愛別離苦の克服という所期の目的が実現できていないと考えられるだろう。

三　愛執の様相

前節で考察したように、十郎の声が幻聴として聞こえる場面から、単なる愛別離苦による悲哀のみならず、現世における十郎の存在を求める虎の意志が表されていることが分かり、亡き愛する者への虎の執着が見出されるが、ここで重要な事は、十郎の幻覚の出現が前掲の場面のみならず、虎の往生の場面にも見られるという事である。

《虎の最期の場面》

その後虎はいよいよ弥陀本願を憑みて年月を送りける程に、ある晩傾に御堂の大門に立ち出でて、昔の事どもを思ひ連けて涙を流す折節、庭の桜の本立斜に小枝が下りたるを十郎が躰と見なして、走り寄り取り付かむとすれども、ただ徒の木の枝なれば低様に倒れにけり。その時より病付て、少病少悩にして、生年六十四歳と申すに大往生をぞ遂げにける。そもそも建久四年癸丑九月上旬に筥根の御山にて出家して後、十九歳の冬のころより六十四歳の今に至るまで四十余年の勤行、その勤終に空しからずして、耳目を驚かす程の往生を遂げにけり。およそ厥の平生の霊徳、臨終の奇瑞、連綿として羅縷に遑あらず。

〔巻十「丹三郎・鬼王丸往生、続いて虎も大往生を遂げる」二八五頁〕

虎の最期の場面において、虎はますます阿弥陀の本願を頼み、年月を送っていたところ、ある夕暮、昔の十郎を回顧する。すると、傍線部のように、虎は桜の木の枝が斜めに下がっているのを十郎の姿と思い、走り寄ってつかもうとするが、それは幻影にすぎない。その後、病気になり、長年の勤行の利益によって往生を遂げたという。

十郎の声が幻聴として聞こえる場面と、桜の枝を十郎の姿と見誤る場面については、会田実氏[4]が「これらからはとても一筋に得道菩提を祈っている宗教者としての純粋な姿は浮かんでこない。これら、愛への執着としか考えられない一連の描写は、会いたいという祈りから、十郎の声の聞こえてくる相聞そして最終的には桜の木の下に十郎の姿を見てしまうというように次第にそれが高まる形で描かれている」と指摘しているが、募った虎の愛執の描写が往生の場面に設定されていることは、どのような意味合いを持っているのだろうか。

そこで、四部合戦状本『平家物語』[5]における建礼門院の往生の場面を分析することによって、虎の往生の場面に表れる愛執の意味を考察するための材とする。

承久三年、後鳥羽院の御合戦に都も閑かならず。一院を始め進らせて、御子達・院々・宮々も悉く東夷の為に国々へ流されたまふを聞食すに付けても、平家の都を落ち、西海の波の上に漂ひつゝ、終に西海の波の底に沈みたまひし安徳天王の御事を、今の様に思食し合はすに付けても、弥御歎きも尽きせねば、①「何かなる罪の報ひにて、斯かる憂き世に生れ値ひて、憂き事のみを見聞くらん。（中略）之に

付けても朝夕の行業怠らせたまはずして、御年六十七と申す貞応二年の春の暮、東山の鷲尾と云ふ処にて御往生有り。臨終正念にてぞ御在しける。紫雲空にたなびき、異香室に薫じ、音楽西に聞こえ、聖衆東へ来たりければ、終に往生の素懐を遂げさせたまふ。②今生の御恨みは一旦の御歎きなり。後生成仏の御喜びは類無き御事ぞかし。「善知識は是大因縁なり」と経文に在るも理かな。形容は咲ふが如くして、端坐して息絶えたまひぬ。則ち是、女人往生の規模は、末代の成仏の手本なりと云々。

〔四部合戦状本『平家物語』灌頂巻「女院御往生」四八三頁〕

右のように、承久の乱が起こり、女院は高倉院の皇子、女院の継子である後鳥羽院などが配流されたことを聞き、平家一門の滅亡の時を思い出す。波線部「平家が都を落ちて西海の波に漂い、安徳帝が海に沈んだことを、今のように合わせて考えても、ますます歎きが尽きない」とあるように、亡き愛する者への執着による女院の悲哀が露呈している。ただし、注目されるのは女院が悲哀に沈んだまま往生を遂げたのではないことである。女院の回想に続き、傍線部①「どのような罪の報いで、このような憂き世に生き、愁い事のみ聞くのだろう」とあるように、女院が昔の罪を認識していることが見出される。又、女院の往生に続く、傍線部②「この世の恨みは一旦の悲しみである。後世で成仏できる喜びこそ、限りのないことである。「善知識は是大因縁なり」と経文に記されたことも、もっともである」という記述から、恨み、悲しみは翻って、往生結縁となることが分かる。

小林美和氏[6]は、延慶本における、平家の一員として一門の罪業を懺悔する女院の行動を論じた中で、この世の恨みは一旦のことであると[7]記される箇所について、「一族の「恨み」を「一旦ノ事」として閉じ込めることにより、怨霊の発動を抑止しているといえる」と指摘している。よって、四部合戦状本においても同様に、平家の代表たる女院が自らの一門の罪業を認め、恨みを一旦の事とすることによって、恨みが解消されると解釈できる。そのような設定は『平家物語』の諸本に共通しており、怨心をなだめる物語の主題を支えるものと言えるだろう。以上のように、菩提に入る前に、女院の恨みや過去への執着が解消されるのならば、『平家物語』の女院の往生に関しては、現世における苦悩は克服されたものと見なせるだろう。

亡き愛する者への愛執の点に着目して、虎と女院の表象を比較してみると、女院と虎が亡き愛する者へ執着しているところは共通しているが、虎の往生には、往生の前提としての現世における苦悩の克服が記されず、愛執による苦悩を抱えたままで往生を遂げると解釈せざるを得ない点に、女院の往生との相違点が見出されるのである。このように、愛執による苦悩を抱えたまま往生を遂げる姿は、虎に特異な往生の仕方と言えるだろう。

おわりに

以上のように、真名本における虎の苦悩の様相とその（非）克服、特に克服しようとするも、愛執によって克服できない愛別離苦の様相を考察してきた。愛執は苦悩の原因また往生の妨げと見なされるにもかかわらず、愛執による苦悩が虎の往生の場面に表れることから、当時の往生の意味は、「真の発心はまず孤独無援の自己と向き合うところから始まるのであり、愛別離苦を含む四苦八苦の表現も自己を俗世から遮断して真に一人になるための方便でしかない」[8]という元来の往生から変容していた事が窺われるだろう。しかし、物語が意図的に元来の往生の様相と異なる要素として、愛執による苦悩を往生の直前に設定したからこそ、読み手は悲歎に暮れる女人に対する仏の救済の意味を実感でき、仏の慈悲を感得しうると考えられるのである。

注

（1）高原由香里「『真字本曽我物語』における大磯の虎の遊女性について―語り手と作中人物の関係についての一考察―」（『群馬県立女子大学国文学研究』十七　一九九七年三月）

（2）村上学「曽我物語の女性像と在地の語りと」（『説話文学研究』二　一九六八年十二月）

（3）福田晃「真名本曽我物語と平家物語」（『曽我物語の成立』三弥井書店　二〇〇二年、初出二〇〇二年）は、虎の説法と往生の記述の構成は、建礼門院の六道語りと往生の記述に沿ったものであり、さらに虎の往生の記述には、建礼門院の往生の記述と類似の表現が見られると指摘し、虎と建礼門院の往生の記述の関連性について論じている。

（4）会田実「他律からの反転―虎最期の意味するもの―」（『『曽我物語』その表象と再生』笠間書院　二〇〇四年、初出一九八八年）

（5）真名本『曽我物語』と四部合戦状本『平家物語』の関連性については、水原一「『四部合戦状本平家物語』批判―延慶本との対比をめぐって―」（『平家物語の形成』加藤中道館　一九七一年）、村上学「曽我物語の諸本」（『国文学解釈と鑑賞　別冊　曽我物語の作品宇宙』二〇〇三年二月）、福田晃「真名本曽我物語と平家物語」を参照。本稿は以上の論考に基づき、真名本『曽我物語』に近接する「四部合戦状本」から本文を引用することとする。

（6）小林美和「『平家物語』の建礼門院説話―延慶本出家説話考―」（『平家物語生成論』三弥井書店　一九八六年、初出一九八〇年）

（7）延慶本には「今生ノ御恨ハ一旦ノ事也。善知識ハ是莫大之因縁ト覚テ、目出ゾ聞ヘシ」（『延慶本平家物語本文篇下』勉誠社　一九九一年）とある。

（8）平野さつき「愛別離苦を越えて―『平家物語』における女性と仏教―」（『国文学解釈と鑑賞』五六‐五　一九九一年五月）

使用テキスト

- 『東洋文庫　真名本曽我物語2』（平凡社　一九八八年）
- 『訓読四部合戦状本平家物語』（有精堂　一九九五年）
- 『新編国歌大観第一巻』（角川書店　一九八三年）

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。

第七章　真名本『曽我物語』における北条政子
―繁栄と救済の様相をめぐって―

はじめに

北条政子は、源頼朝の時代、大将軍たる源頼朝の御台としての役割を努め、頼朝死後も、将軍の後見となり、「尼将軍」と称されるようになる。このように、彼女が政治的に果たした役割の大きさから、真名本『曽我物語』における北条政子譚の考察においても政治的な役割に注目を集め、仏教的な思想に関する見解は非常に少ないのが現状である。真名本『曽我物語』における政子譚は、源頼朝の流人時代から関東制覇のはじめに至るまでを描く。政子自身は頼朝の政権成立のために、政治に直接的にはかかわっていない。にもかかわらず、彼女の神仏に対する信仰を基にして、政権成立という頼朝の願いが成就するよう積極的に祈念し、修行する、いわば宗教的な表象が形成されているのである。とりわけ、政子譚の最終場面において「女性なれども、信力堅固の故に、権現の御利生を立ち処に蒙りけるこそ有難けれ。」と作者が称賛するところに見られるように、政子の繁栄は神仏に対する厚い信仰の結果として明示されている。このように、真名本における政子は仏教的な思想に基づいて造型されていることが明らかであるが、苦難から繁栄へと展開する過程において仏教的な様相がどのように描かれているのか、具体的に考察する必要がある。さらに、政子が様々な苦難を経て繁栄に至ったのは、伊豆山権現の利生を蒙ったからだと描かれており、伊豆山権現の救済譚と結びつけられている。そうすると、政子の救済譚と繁栄譚を検討するにあたって、伊豆山権現の救済譚は政子譚とどのように関わっているのか考える余地がある。

以上のような問題意識から、本章では、まず北条政子の苦悩の様相とその克服を考察した上で、苦難から繁栄へと展開する過程における仏教的な側面を明らかにする。加えて、伊豆二所権現の縁起を語る本地物語である『神道集』「二所権現事」の記述を踏まえて、苦悩の体験こ

そが神となる契機だとする本地物語の発想を通して、『曽我物語』における北条政子の苦難譚と繁栄譚にはどのような意味合いが潜んでいるのか、さらに探りたい。

一　苦悩の様相とその克服

一-一　苦悩の様相

●　継母による苦悩

まず、政子は繁栄に至る以前、どのような苦悩に遭遇していたのか見ていく。頼朝は流人の身でありながら、北条時政の先妻の娘たる万寿御前、つまり北条政子のもとに通う。政子の継母はそのことを知り、不満に思い、大番役のため、都に上っていた夫時政に手紙を書く。時政は後妻からの手紙で政子が流人たる頼朝と結ばれたことを知り、驚く。なぜなら、平家の伊豆国の目代、山木兼隆に政子を嫁がせることを約束していたからである。そこで、時政は手紙で伊豆の国府に政子を呼び寄せる。政子は頼朝との別れを悲しみつつ、兼隆の館に出発する。ここで注目したいのは、政子が出発する際に、継母が彼女を急がせる場面である。

継母の女房、「疾く疾く出で立ち給へ」と迫め奉り給ひければ、北条の姫は、これを聞くにつけても、実の母ならば、これ程に情なき事は、よもあらじ」と思ふにも、いよいよ涙の進みける。

〔巻三「時政、万寿御前を平兼隆に嫁がせようとする」一三八-一三九頁〕

継母はもともと彼女のことを妬ましく思い、頼朝に自分の娘と結んでほしい。右のように、政子が出発する際に、継母は彼女を急がせる。それに対し、政子は傍線部のように、実母がついていてくれれば、このような思いやりのないことに遭わないだろうと考えて、自らの恵まれない境遇を歎く。ここに、政子の心中に潜んでいる実母との死別による孤独感が露呈している。又、傍線部「これ程に情なき事」という言葉

から、政子が頼朝と離別して悲しんでいるのに、継母はその悲しみを少しも慰めてくれなかったという継母の薄情への恨みも読み取ることができる。

● **夫に対する愛情と父への親孝行**

継母への恨みの他に、頼朝との離別と父への不孝の葛藤による苦悩も見受けられる。

親の命に随はむとすれば、愛別離苦の悲しみ胸を焦す。偕老の情を忘れじと思へば、不孝の罪も遁れ難し。左にも右にも持扱ふ我が身の置き所なきこそ悲しけれ

〔巻三「時政、万寿御前を平兼隆に嫁がせようとする」一三九頁〕

右のように、政子は頼朝との離別か、父親への不孝の罪か、八方塞がりの状況に追い込まれている。結局、政子は父への孝行を尽くし、愛別離苦に直面することを決断する。物語がこのように八方塞がりの状況に政子を置き、政子の父への孝行と夫への貞節をめぐる葛藤を仕掛けたのは、彼女の親孝行を打ち出すためだと考えられる。では、政子が親孝行を尽くす事を決断するのであれば、この事は『曽我物語』にとっていかなる意味があったのか。これについては後述する。

● **夫の願望成就に関する苦悩**

夫に関する政子の苦悩について、愛別離苦の他に、関東制覇という夫の願望を成就させたいという願いによる苦悩にも注目したい。まず、頼朝の関東制覇の願望から見ていく。

北条に入る前に、頼朝は伊藤祐親の娘と結ばれたため、祐親に命を狙われる。頼朝が北条へ逃げる途中で、八幡大菩薩へ祈念をする場面がある。

「頼朝既に末世に及びて、東国に住して今この苦に合へり。そもそも八幡大菩薩の御願には『我必ず東国に住して東夷を平らげん』とこそ誓ひ御在す。しかるに源氏皆亡び了てて頼朝一人になれり。家廃れ人亡びて、正統の名残とては頼朝ばかりなり。八代守護の御誓空しくして四代を残し給はむこと口惜しかるべし。今度運を開かずは、いづれの人か家を興して誓を継がむ。既に世暁季に臨み、また後胤なし。仰ぎ願はくは八幡大菩薩の誓約をば頼朝に施し給へ。伏して乞ふ。諸大冥官擁護を垂れて幸徳を授け給へ。縦ひ広く東国を冤げむ事こそ難くとも、当国の土民ばかりを授け給へ。運墳の腹を断て愁苦の悲しみを除かむ。愛子の敵伊藤入道が首を取て我が子の後生の身代りに手向けむ」とぞ祈念せられける。

〔巻二「頼朝の祈願」一〇五－一〇六頁〕

頼朝の関東制覇の願望は傍線部のように端的に表されている。ここで注目すべきは源家の滅亡による頼朝の不安感である。波線部のように、源氏は皆滅び、正しい血筋を引く者としては頼朝一人だけであり、今回、運が開かなかったなら、だれが家を再興して八幡大菩薩の誓いをつなぐか、末世に遭って、また子孫がない、と不安感を吐露している。

そのような頼朝の苦悩は伊豆山権現に参籠する際の、伊豆山権現との贈答にも見られる。

中堂権現の御前にて、北の方、

つもり行く五重の雲はあつくとも祈る心に月を宿さん

且く有て、御戸帳の内より馥しき風俄かに吹き来りて、気高げなる御声付きにて、

①あまくだり塵にまじはるかひあれば玉ちるばかり物な思ひそ、

この御歌を承りて、人々は身の毛弥立つて、随喜の涙肝に染む。北の方の御祈請かくの如し。況んや佐殿の御祈請愚かならむや。講堂権現の御前にて、泣く泣く佐殿かくこそ。

②みなもとはきよき流れぞちはやふる神かげ宿せ千代の為師に

これも先の如くに馥しき風吹き、御戸帳の内より、

ちはやふる神かげ宿す水ならば流れ久しき月を宿さん。

佐殿余りに感に堪へ給はずして、居ながら踊り給ひけるも理なり。

〔巻三「頼朝と万寿御前、伊豆山権現に参籠」一五三‐一五四頁〕

関東制覇の願望の成就に関する頼朝の苦悩は、②傍線部のように、自分が源氏の嫡流なので、神がのちのちまでの良い前例となるように恵みを与えてくださるよう、という権現への歌に表されている。ここで注目したいのは、政子が頼朝の苦悩を一緒に背負うことである。夫の願望を成就させたいがために、苦悩している政子の様子は、①傍線部の神からの返歌に表されている。頼朝の願望成就に関する苦悩を玉が散るほどに抱えている政子に対して、神は、天上から来た神仏がこの世に交わり、必ず衆生を救済するので、政子がそのように苦悩する必要がないというお告げを与えている。

以上のように、恵まれない境遇、夫に対する愛情と親孝行の葛藤、および夫の願望成就は政子の苦悩の原因になっている。こうして見ると、政子は親、夫に関する幾重もの苦悩に遭遇していることが窺われる。では、彼女はどのように愛別離苦、特に夫に対する愛情と親孝行の葛藤による苦悩を克服するのか。

一‐二　苦悩の克服

●　煩悩との戦い

政子は父の命令により兼隆に嫁ぐ際に、次のように心情を吐露している。

出で立たんとすれば恩別の歎きも悲し。留まらむとすればまた、不孝の罪も遁れ難し。

〔巻三「時政、万寿御前を平兼隆に嫁がせようとする」一三九頁〕

傍線部「不孝の罪も遁れ難し」に見られるように、彼女は不孝の罪に対する意識を持って、一旦、自分自身の愛欲を抑え、親孝行を尽くす事を決断する。こうした自らの愛欲を抑えることに、煩悩と戦って苦悩を克服する過程が捉えられる。政子の親孝行は次の場面にも見受けられる。

旧き栖を打捨てて思はぬ屋形に移るべしとは、懸けても思はぬ我が身なれども、父に大事を懸けじ、との料なれば、あり遂ぐべき屋形にてはなけれども、上ばかりはさらぬやうに賞して御在しけれども、一日も間遠になる悲しさは、喩へ遣るべき方ぞなき。（中略）卦けまくも忝くも、異国の則天皇后は夫を重くして位に即き、本朝の神功皇后は夫の仲哀天皇の別を悲しみて遺跡を尋ねつつ、女性なれども世を取らせ給ひつつ、日本国の皇帝とはならせ給ひぬ。今の北条の妃も女性なれども、日本秋津島、鎌倉の受領仁、将軍家の宝位・玉床に御身を宿し給ふべき御瑞相にや、目代がもとには一夜をだにも明し兼ねて、やがてその夜の内に白地へ出るやうに賞して、上の御衣どもをば脱ぎ捨てて、秘かに間隔れ出でさせ給ひけり。

〔巻三「時政、万寿御前を平兼隆に嫁がせようとする、万寿御前、兼隆屋形脱出」一四一－一四二頁〕

傍線部のように、政子は父に迷惑をかけないように、兼隆の館から逃げ出す様々な計画を立てる。ここに、親孝行を尽くすと同時に、愛別離苦を克服しようとする政子の態度が捉えられる。

政子の親孝行について、山添昌子氏[1]は次のように論じている。

親へ孝を尽くすことによりやがて仏教上の理想境に再生することを希望する妻、それはとりもなおさず生身の夫との生活を二の次にする妻であるが、そうした妻に北条妃は造型されているのである。ところが、親への孝のために山木半官の許へ出向いた妃は、一夜も明さず細工までして逃出している。しかし、真字本では、逃出したことをもって、父に背いた「不孝罪」とは把握しない。「異国の則天皇后」と「本朝の神功皇后」のように、「日本秋津島、鎌倉の受領仁、将軍家の宝位・玉床に御身を宿し給ふべき御瑞相にや」と、把握しているのである。ゆえに、父への孝養が善業因となり、現報を受ける型で新たに頼朝の妃に再生した目出たき妻を、北条妃に形象していることが明らかになる。

山添氏の指摘のように、親孝行を尽くすために、夫と共に生活するという欲望を一旦抑える政子の行動は、現報を生み出す善業因と捉えられる。ここで興味深いのは、延慶本『平家物語』において、政子の行動への父の憤怒が描かれていることである。

件娘、兵衛佐ニ殊ニ志深カリケレバ、兼隆ガ許ニ行タリケルガ、白地ニ立出ル様ニテ、足ニ任テ、イヅクヲ差トモナク逃出テ、終夜ラ伊豆ノ山ヘ尋行テ、兵衛佐ノ許ヘ「カク」ト告タリケレバ、ヤガテ兵衛佐、伊豆ノ山ヘゾ籠リニケル。此事ヲ時政兼隆聞ニケレバ、各憤リケレドモ、彼山ハ大衆多キ所ニテ、武威ニモ恐レザリケレバ、左右無ク打入テ、奪取ニモ不及シテゾ過行ケル。

〔第二中「兵衛佐伊豆山ニ籠ル事」四四二‐四四三頁〕

延慶本においては、真名本のように最初から不孝の罪に対する政子の覚悟は存在していないものの、政子が伊豆山に逃れたことを聞いた時、傍線部のように政が娘の行動に憤ったことが描かれている。両本における政子の行動と父の反応の相違を考慮すると、真名本は不孝の罪に対する政子の意識を重視し、肯定的な政子の表象を創り出そうとすることが窺える。となると、親孝行に対する意識は真名本の政子の特質、さらに煩悩との戦いの重要な要素と見做すことができる。

では、真名本が政子の親孝行を強調しているのは何か特別な意味を持っているのだろうか。ここで、真名本『曽我物語』の主題とも関わる、父への曽我兄弟の孝行および母への不孝の罪に対する弟五郎（以下、「弟」）の意識が表される場面を取り上げ、この問題を考察する。

（イ）千筋の縄は、着かば付け、何の苦かあるべき。父のために付たる縄なれば孝養報恩謝徳闘諍の名聞にてこそあらめ（中略）この縄をば善の縄とは思ひ給はぬか。生年三歳と申せし時、父に別れて後、七歳と申せし秋のころより心に懸けて躯ひし申斐有て、夕部敵の助経を討ち勝して着いたる所の縄なれば、全く恥とも思はぬものをや。

〔巻九「頼朝、五郎を尋問」二〇四頁〕

（ロ）そもそも時宗が不孝を免され奉らずして死に候はむ事こそ、今世後世の意恨にて候へ。不孝の罪は余の罪業よりも至て重しと承り候ふが、身に染みて怖しく覚え候ふなり。（中略）不孝の者をば、仏これを擁護し給はず。不孝の地をば、堅牢これを頂き給はず。不孝の輩は、邪見闡提の人なり。不孝の類は、畜生羝羊の人なり。

〔巻六「五郎、勘当の許しを願う」三五頁〕

（イ）は弟が捕らえられ、頼朝に尋問される場面である。傍線部のように、縄についている弟は、父の仇を討つための戦いであると主張し、その縄を親孝行の縄、いわゆる二重傍線部のように善の縄と思っている。（ロ）では、母が弟を法師にし、父の菩提を弔わせようと思っていたが、弟は北条時政のところに行って、元服する。弟はこのように母の本意に背いたために、母に勘当される。（ロ）傍線部に見られるように、母への罪に対する弟の意識が表されている。

こうした親孝行に対する曽我兄弟の意識の表れを、政子の行為と合わせて考えると、真名本は『曽我物語』の構想としての兄弟の親孝行に伴い、政子の孝行を強調していると十分に考えられる。なお、（ロ）の母への罪の重さに対する弟の意識と、政子譚の「偕老の情を忘れじと思へば、不孝の罪も遁れ難し」というところを合わせてみれば、不孝の罪への政子の意識が五郎の意識と共通していることが明らかである。

すなわち、政子譚に記される「不孝の罪も遁れ難し」という表現から、不孝の罪が他の罪業よりも重いので、不孝の罪を犯せば、その罪の報いからは決して逃れられないという政子の意識を読み取ることができる。

以上のように見てくると、政子は親への不孝の罪の重さを覚悟し、煩悩と戦った罪を蒙らない女性として造型されていると言えよう。

● 修行の様相

政子は兼隆の館から逃げ出し、苦しい道行きをする。困難な道行きをする場面は次のとおりである。

《道行きをする場面》

（政子は：執筆者注）道歩の叢の中を舁分け、伊豆の御山密厳院の、卿の律師の坊を志して、竟夜案内者もなくして、旅にも馴れぬ女房たち三人相列れて行末も知らぬ山路に迷ひ給ひけるこそ哀れなれ。高き峰に登る時は、北条の方に目を省り、深き谷へ下り給ふ時は、小沢の水に行水を浴き、「別れて歎く諸人に、今生の対面事故なかれ」とぞ祈られける。深茂が野辺の叢の中なれども、北条の方は返り見勝ちにて、山木が館は疎くなる。いつかは習はせ給ふべき旅なれば、御足も欠け損じて、叢ごとに血に染めば、薄紫とも謂ひつべし。（中略）①一樹の影に宿るも先世の契、一河の流れを汲むも多生の縁深し。いかに況んや、主従は三世の契深くして、この世一つの事に非ず。（中略）主従三人の女房たちの竟夜知らぬ山路に迷ひ給ふ有様、古の人に比ぶれば、なほ立ち倍りて有難かりし為師なり。主従互ひに疲れたる折節は、手に手を取り組み、昔を語りて今を歎く悲しみなり。互ひに慰む方とては、②「これも先世の宿執なり。君は夫婦のために御身を苦しめ給ひ、我らはまた、君の御ために身を苦しめたり。これもまた、この世一つの事ならず。」二人の女房たち、弱き心を豪なる様に賞し、「歩ませ給へや」と勧めつつ、谷・峰を嫌はず行く程に、主従三人の女房たちは伊豆の御山、聞情坊へ入らせ給ふ。

〔巻三「万寿御前、兼隆屋形脱出」一四三－一四五頁〕

政子は山路で迷い、二人の女房と一緒に様々な苦労をする。二重傍線部のように、頼朝と再会できるように、政子が小沢の水で身心を清め、一心に祈念する。苦悩を克服するために、苦しい道行きをし、一心に祈念をする政子の姿に、人生の苦悩を解脱するための苦行、つまり修行の様相が捉えられるように思われる。

ここで注目したいのは、主従関係の因縁果報の表れと、苦しい道行きの根本的な原因とされる政子の夫婦の縁である。①傍線部のように、主従の因縁が、苦悩を乗り越えるために政子と女房たち主従が助け合う契機とされている。それに加えて、②傍線部のように、政子は夫婦の縁によって苦しみを得、また、女房たちが主従の縁によって政子と一緒に苦しい道行きをする、といった因縁果報が明確に表されている。女房たちは因縁による現世での苦悩の原因を見通したことによって、旅の障害を諦めずに、主従一緒に助け合い、最終的に苦しい道行きを乗り越え、伊豆山に辿り着く。伊豆山権現に辿り着いた政子は頼朝と再会し、愛別離苦を克服した。こうした因縁果報の法則によって苦悩の原因を悟った上で、苦悩を解脱する過程から考慮すると、物事の関連性、いわば因縁生起という仏教的な思想を見出すことができるだろう。

以上のように、政子の道行きは、単なる旅の苦しみを表すのみならず、愛別離苦と道行きの苦しみの原因としての因縁の様相と、それらの苦悩の克服としての修行のような政子の行動も描き出し、苦悩の克服における仏教的な性格を示している。

政子が伊豆山権現で頼朝と再会できたことによって、愛別離苦は排除されたが、頼朝の関東制覇の願望に関する政子の苦悩は未だ残っている。政子が頼朝の願望成就のために、伊豆山権現に参詣する場面は次のとおりである。

《参詣する場面》

これに依て佐殿も北の方も二人ながら御身は精進潔斎にて、中堂権現と講堂権現との御前に御参籠有て御祈請浅からず。佐殿の御祈請よりも、殊に北の方の御祈請こそ、外にて承るに、随喜の涙も留まらね。暁の御礼拝も過ぎければ、御数珠を搏みて、「哀苦しや」とて、さも苦しげなる御声付きにて、「そもそも、当山と申すは、走湯権現これなり。その御本地を尋ね奉れば、千手千眼広大円満の観世音菩薩これなり。されば、御誓には、『衆生有苦、三称我名、不往救者、不取正覚』と云ひ給へり。（中略）御誓まことに平氏の女が宿願に違はずんば、忽に成就せしめ給へ。将亦、源頼朝が年来の念願をば速かに満足せしめ給へ（中略）況んや我ら夫婦、倶に精進潔斎にて丹

精を神前に至して、降伏を宝殿に乞ふ。大幸を冥道に受けて、諸国を永代に預らむ。もしまた愛夫頼朝の果報拙くして、この願成就すまじくは、事を起さぬその前に自らが命を召せ」

〔巻三「頼朝と万寿御前、伊豆山権現に参籠」一四九－一五三頁〕

政子は頼朝の願望成就のために、伊豆山権現に祈念して積極的に修行している。傍線部に見られるように、頼朝の関東制覇の願望を成就させたいという政子自身の願いからもたらされた苦悩が捉えられる。彼女は一心に祈願した結果、権現から託宣の贈答と夢告を蒙る。託宣の贈答を蒙る場面は次のとおりである。

中堂権現の御前にて、北の方、

つもり行く五重の雲はあつくとも祈る心に月を宿さん

且く有て、御戸帳の内より馥しき風俄かに吹き来りて、気高げなる御声付きにて、

あまくだり塵にまじはるかひあれば玉ちるばかり物な思ひそ、

この御歌を承りて、人々は身の毛弥立つて、随喜の涙肝に染む。北の方の御祈請かくの如し。況んや佐殿の御祈請愚かならむや。

講堂権現の御前にて、泣く泣く佐殿かくこそ。

みなもとはきよき流れぞちはやふる神かげ宿せ千代の為師に

これも先の如くに馥しき風吹き、御戸帳の内より、

ちはやふる神かげ宿す水ならば流れ久しき月を宿さん。

佐殿余りに感に堪へ給はずして、居ながら踊り給ひけるも理なり。

〔巻三「頼朝と万寿御前、伊豆山権現に参籠」一五三－一五四頁〕

政子は頼朝と伊豆山権現に参籠した際、神に憑依され、神と歌の贈答をする。傍線を付した歌は、神が源家の正統たる頼朝を守り、すでに彼の願いを聞き入れたという頼朝への贈答である。頼朝の関東制覇の願望が成就することは次の夢合わせの場面にも見られる。

《景義の夢合わせの場面》

先づ、君の足柄山の矢倉が嶽に渡らせ給ふと見進せて候ふは、足柄の明神の第二の王子、矢作の大明神の御利生にて怨敵を討ち平らげ、御先祖八幡殿の御跡を継ぎ、東国を靡かし西国を平らげ、北国を御後見として南海を冤げつつ、居所をこの内にトさせ給ふべき御示現なり。次に御酒を三度御召し候ふと見進せけるは、当時の御有様は大略酒に酔ひて渡らせ給ふ御心地にて候ふなり。されば、遠くは三年、近くは三月が内に御本意を遂げて、この程の御心苦の酔ひを覚まさせ給ふべき御夢想なり。左の御足を以て東国外の浜を践まさせ給ふと見進せて候ひけるは、東は残る所なく、秀衡が館まで御知行あるべき御夢想なり。右の御足を以て鬼界が嶋を践ませ給ふと見進せて候ひけるは、君に迫められ奉て平家都を落ち、四国・西国に付かせ給ひたりとも、終にその一族を亡ぼして、西は残りなく御進退あるべき御示現なり。左右の御袂に月日を宿すと見進せ候ひけるは、主上、上皇の御後見とならせ給ひて、日本秋津嶋の大将軍とならせ給ふべき御示現なり。小松を三本粧させ給ふと見進せて候ひけるは、御子孫三代までは、天下にはびこらせ給ふべき御示現なり。八幡大菩薩・足柄の大明神・富士浅間の大菩薩・二所の権現・三島の大明神の擁護においては、御疑ひあるべからざる御示現なり」

〔巻三「夢合せ」一五七－一五八頁〕

伊豆山権現にて安達盛長が頼朝に関する吉夢を見、頼朝に報告した直後、景義は右のように夢合わせをする。傍線部のように、頼朝が大将軍になるという景義の夢合わせによって、頼朝の関東制覇の願いが成就することは暗示されている。

このように、道行きと伊豆山の参詣の場面に見られる政子の修行によって、夫婦の縁による苦悩が排除された。さらに、参詣と修行の利益は政子の繁栄の原因ともなっている。それは次の政子自身の夢合わせの場面に見られる。

《政子自身の夢合わせの場面》

「自らも今夜不思議の御示現に預かりぬ。権現の御宝殿より八咫の唐の鏡を賜りつつ、袂に収めて石橋を下る程に、余りの不審ぎさに、箱の蓋を開きて見れば、日本六十余州が皆鏡の面に顕れて見えつる間、殿に向ひ奉て、『権現よりかかるめでたき財を賜りぬと見る』と申しければ、『その鏡は頼朝が用にはあらず。女房の御財なれば、頼朝がいろふには及ばず』とて、二人列れ奉り石橋に向ひ坂を下り走り下ると見つるは、①いか様にも殿の御代の後は自ら将軍家の後家として、日本国を知行すべきや」と打咲はせ給へば、人々もこれを承て、「これ程に打話き御祈請の候はんには、権現も争か御納受なかるべき」と異口同音に感じて申し合へり」

されば にや、鎌倉殿世を取らせ給ひつつ日本国を持ちて十九年なり。廿年と申す正治元年逝去ありしかば、その後家として二位家の御代とて、承久兵乱の時も京方を討ち亡ぼしつつ、後鳥羽の院を取り奉て隠岐の国へ流し奉り給ふ。その後は隠岐の院と申す。②女性なれども、信力堅固の故に、権現の御利生を立ち処に蒙りけるこそ有難けれ。されば平家に曽我を副へて渡したりけるに、唐人これを披見して、「日本は小国とこそ聞きぬるに、かかる賢女ありけるや」と感じ合へりけるとかや。日本・唐の両州において、賢女の名誉を施して、末代の女人のためには有難かりし手本なり。

〔巻三「夢合せ」一五六－一五七頁〕

①傍線部のように、夢告げにより将軍家の後家としての大事な役割を果たすという将来の繁栄が示されている。それに続き、史実が取り上げられ、②傍線部のように、神仏に対する政子の厚い信仰が繁栄と結びつけられ、手本となる賢女として賞賛されている。ここに、神仏に対する政子の信仰は、その後の繁栄の要因として設定されていることが明らかである。

以上のように、真名本において、政子は基本的に不孝の罪を犯さないという恩恵を以て、自分勝手な欲望、いわば煩悩と戦い、その上で苦悩を克服するために、積極的に修行をし、究極的にその修行、神仏の利生によって繁栄をもたらされたと解釈できる。ここに、物語は政子の仏教的な性格を丹念に描き出した上で、彼女をめでたい大将軍の御台として前面に打ち出そうとしていることが窺われる。こうした政子の造型は頼朝の政権成立という『曽我物語』の主題[2]を支えると推定できるだろう。

二　『神道集』「二所権現事」における受難と救済をめぐる常在御前と北条政子の造型

本節では『神道集』[3]「二所権現事」における常在御前の叙述を取り上げ、苦難譚、神仏による救済譚、二所権現となる神格化の説を中心にして、政子の苦難譚及び繁栄譚に潜んでいる意味合いを考察する。「二所権現事」の粗筋は以下のとおりである。

昔、天竺斯羅奈国の大臣、源中将尹統には、常在御前という最愛の先妻が産んだ娘と、霊鷲御前という今の北の方の腹から生まれた娘がいる。先妻の娘たる常在が夫中将に格別な愛情を注がれていることを見た継母は、自分の娘が差別されるように思い、常在を憎み、夫が三年間の大番のため、都へ登った際、常在の謀殺を企てる。しかし、常在は妹霊鷲御前に助けられ、神仏と亡き母の加護を蒙り、苦悩を乗り越える。やがて、姉妹は波羅奈の太郎王子と次郎王子によって救い出され、常在は太郎王子の王妃、霊鷲は次郎王子の王妃となる。都から帰った父中将は娘の失踪によって、出家し、娘を訪ねるための旅に出る。やがて、父は娘と再会できる。最終的に、大蛇と化した継母の迫害によって、父と姉妹と王子は皆で日本に渡り、相模国の大磯高麗寺に一泊滞在した後、常在御前夫婦と父は箱根三所権現と、霊鷲御前夫婦は伊豆権現となる。

以上の粗筋を見ると、先妻の娘である事、父が大番のため、都に上った事、父子の契り、継母に妬まれた事、神仏への祈願の利生によって苦悩を克服できた事、霊地への逃亡譚など、政子譚と常在譚の共通点が窺える。それらの共通点の中で、継母に妬まれる事、神仏の利生による苦悩の克服、逃亡譚および神仏への転生と大将軍の御台の誕生の三つの点に注目したい。

二-一　継母に妬まれる事

継子いじめ譚に見られる政子と常在の苦悩の相似をめぐっては、すでに阿部美香氏[4]と、浅見和彦氏[5]の論に提示されているが、具体的な内容を見てみたい。

『神道集』では、継母は塩引島へ連れて行き捨てる、土牢に閉じ込める、旦持山の麓にある千の剣が立て並べてある穴に落とすなどによって常在の謀殺を企てる。『曽我物語』においては、継母は『神道集』のように政子を殺す陰謀を企てることまでは描かれていないが、頼朝と実子を結婚させたいと思い、政子を嫉んだとある。浅見氏は、常在と政子の継母の催促の行動に着目し、政子と常在の継母の迫害の相似性を指摘している。継母が常在を催促することは、常在の最初の受難である塩引島に捨てられる場面に見られる。常在は継母の謀計により海岸へ出かけさせられる。その謀計の内容は次のように描かれている。

継母佐候ヘハ、父中将殿自レ都、姫君達ノ徒然ノ時ハ、礒ニ出シ進テ遊セヨ被レ仰、急御出可レシトテ有、

〔第七「二所権現事」六二頁〕

右のように、常在の継母は、娘が退屈した時、礒に出して遊ばせよという父からの指示を欺き、早く海岸へ出かけるよう常在に催促する。『曽我物語』では、継母の催促の行動は、継母が兼隆の館に早く出発するよう政子を急がせる場面に見られる。浅見氏は、常在と政子が継母に催促されたことは、父が大番役のために不在にしている間の出来事という点に着目し、継母の迫害による政子と常在の苦悩が一致することを指摘している。

以上のように、常在と政子の間の継母の迫害は度合いが異なるが、彼女たちが継母に妬まれたことによって苦悩するという点から考慮すれば、浅見氏の指摘のように、政子と常在の苦悩に共通点が窺われる。ただし、注意すべきなのは、政子譚は、継母による苦悩より、夫婦の契りによる苦悩に重点を置いていることである。政子譚は、愛別離苦を政子の苦しい道行きの原因として設定しており、さらに、頼朝の願望成就に関する苦悩を伊豆山権現での修行の契機とし、繁栄へと展開している。こうした夫婦の契りによる苦悩が政子譚の展開として位置づけられることから、政子と常在との間の苦悩の様相に大きな相違点を見出すことができる。

二-二　神仏の利生による苦悩の克服

《苦しい道行きをする場面》

既述したように、『神道集』では、常在は継母によって様々な謀殺を企てられたがゆえに、苦悩をしている。常在が塩引島へ連れて行かれ、捨てられた際に、

遥ニ在テ起奉リ四方ヲ見給ヘハ、遥ニ監干ヒテ見ル、夢カト思食御足ニ任テ三時計リ歩給ヘハ、只陸地ニテ有ケル、然シテ十余町計御在シテ、監境モ山ノ様ニ見ヌレハ今ヲ限ト思食ニ、腰ヨリ高キ有レ岩、上テ御覧レハ波立来、岩ノ廻ヲ洗ケレハ、高キ所モ隠ツ、引波ニ打波モ茂ケレハ、引波ニ低様ニ引キ倒レテ心モ則消ヘ入ケル

〔第七「二所権現事」六三頁〕

とあるように、常在は一人で島で迷い苦難をしている。一方、『曽我物語』では、政子と二人の女房が兼隆の館から脱出し、伊豆山権現の密厳院へ逃げ出し、山の中で迷い、苦悩をしている。知らぬ島ないし海で迷い、波の激しさで不安を抱き、さらに母と死別し、父と生別した苦悩を抱いた常在の造型と、夜陰に知らぬ山路で迷い、夫と離別した苦悩を抱いた政子の造型は近似していると考える。海と山を背景とした違いがあるものの、知らない場所で迷った二人の不安感、愛する者と離別する悲しみ、困難な道を歩む、つまり精神、肉体の疲れによる苦悩の様相から見れば、二人の造型と重なっていると考えられるのではないか。

常在と政子の苦難譚における共通性に関しては、阿部美香氏[6]は次のように論じている。

常在御前が継母から蒙る苦難の過程は、本地を観音とする権現として顕現するための「修行の道」であった。姉妹がそれぞれ夫婦で権現となる二所の本地物語において、姉妹の道行きには権現の誓願や利生の意味が籠められている。（中略）一方、頼朝と政子の物語には、親子や夫婦の縁をめぐって、貴種流離譚や継子いじめ譚の様相を踏まえながら、愛別離苦の物語が語られていた。とりわけ継母に嫉まれ、苦しい道行きを経て伊豆山に登る政子の道行きは、これも修行の道として表されていた。

氏の指摘のように、常在譚に表される継母による苦悩が、権現の本地として、観音の利生を表すための修行の道と見做されることから、政子が常在と同様に継母に嫉まれる苦悩に遭い、苦しい道行きをする事も「修行の道」と捉えられる。ただし、政子の道行きには、常在のように神仏の利生が表れていないことに注目したい。政子の道行き譚では、神仏の利生がなく、主従の縁、および苦しい道行きの原因とされる夫婦の縁、つまり因縁果報が挿入されつつ、政子と女房が互いに助け合い、やがて伊豆山権現に辿り着き、頼朝と再会できたことが描かれている。よって、政子が無事に頼朝と再会できた事は、政子と女房自身が苦悩を乗り越えようと動き始めた結果だと考えられる。その意味で、政子の困難な道行きは、修行の道とするならば、政子自身から動き出した苦悩の克服のための修行の道と解釈できるだろう。

《神仏の利生によって救われる場面》

常在が塩引島で迷ったあげく、神仏へ祈念をする場面は次のとおりである。

南無千手千眼広大円満トテ
施無畏者ノチヽノ手毎ニ誓ヒ有急キ迎ヘテ母ト並ヘン
荒磯ノ波ニ我身ハ沈ムトモ御法ノ船ニ我ハノリナン
ト詠シツ、（中略）斯程ニ念給事ナレハ、地蔵観音ハ母ヲ引具シテ、弘誓ノ船ニ乗リ給ヒツ、斯羅奈国ヘ渡リ進セ給ヒケリ

〔第七「二所権現事」六三頁〕

常在は彼女を迎えに来るように千手千眼広大円満に祈念する。彼女の熱心な祈念に応え、地蔵と観音は常在の亡き母を連れ、常在を弘誓の船に乗せ、斯羅奈国へ渡してくれる。ここに、常在は神仏の利生によって継母の迫害を乗り越えたことが窺われる。

一方、政子譚における神仏の利生は、道行き譚には描かれていないにもかかわらず、特定の場所で設定され、政子の繁栄を導き出すものとして機能している。すなわち、政子が常在のように迷った場で神仏の加護を蒙るのではなく、伊豆山に入り、伊豆山権現の場で頼朝とともに神仏へ積極的に祈念し、やがて権現からの贈答および夢告を蒙ったのである。このことから、物語は伊豆山権現の存在を、政子と頼朝の苦難譚から繁栄譚へと展開する舞台として強調しようとしていることが窺われる。このように、神仏の利生は常在譚にも政子譚にも顕在しているが、政子の場合は伊豆山権現の信仰を、将軍とその妻の繁栄譚と結び付けるために、異なる背景で設定されていることが推定される。

以上のように、常在と政子の苦悩の克服の様相を具体的に考察すると、両者ともに受難と神仏による救済の構想が据えられているが、愛別離苦の存在と自分の行動による愛別離苦の克服、利生を蒙る場所の設定など、部分的には異なっている。

二-三　逃亡譚と王妃の誕生・神仏への転生

●　逃亡譚

『神道集』において、常在の父と姉妹夫婦は、大蛇と化した継母の迫害によって、インドから日本へ逃亡する。父が日本へ逃亡する場面は次のとおりである。

中将入道ノ跡ヲ追テ、其身大蛇ニテ超サセ給ト聞ヘケレハ、其国ノ人々恐事无レ限、入道殿ハ聞食、自ハ日本国ヘ超テ、佛法流布ノ国ナレハ、今生後世ヲ欣ハントテ

〔第七「二所権現事」七一頁〕

父が日本へ逃亡したのは、傍線部のように、日本は仏法が広く流布している国だからだと記されている。それに対して、『曽我物語』では、政子は継母の迫害ではなく、頼朝との愛別離苦を克服するために、兼隆の館から伊豆山へ逃亡する。こうして、常在と政子にとっての逃亡の

動機は異なっているものでありながらも、両者ともに苦悩によって霊地、あるいは、仏教との関係が深い場へ逃げ出すといった逃亡譚が存在していることは確実であろう。このように、苦難を受けたからこそ、霊地へ逃亡するという構想には共通点が窺われる。

● 神仏への転生と大将軍の御台の誕生

『神道集』における、父と姉妹夫婦が日本に到着した後の場面は次のように描かれている。

上高礼寺ニ一夜留リ給テ、自レ此入道殿ト太郎ノ王子ト常在御前トノ三人ハ、上ミ山ノ駒形ノ嶽ニ付テ、箱根三所権現ト顕給、次郎ノ王子ト霊鷲御前ハ下山ヘ下ッ、自二箱根山一南ニ安美ノ自レ峯東西ノ沢ハ、云二手向一所ニ社ヲ造リ、伊豆権現ト顕

〔第七「二所権現事」七二頁〕

父と姉妹夫婦は日本に到着し、霊地たる高麗寺に一晩滞在し、父、中将と常在御前夫婦は箱根三所権現、霊鷲御前夫婦は伊豆山権現となる、つまり神仏になる。

一方、『曽我物語』では政子が伊豆山に到着し、頼朝と再会した後、伊豆山権現で夫婦ともに修行し、やがて将軍とその御台になるとの示現を蒙る。もちろん『曽我物語』における政子譚には、『神道集』の父と姉妹夫婦のように神格化が存在していない。しかし、将軍の妻のような王権者の性格は、常在が波羅奈国の王子に助けられ、波羅奈国の妃になったことに当てはまる。

以上のように、政子譚には常在のように神仏への転生の様相が存在していない。しかしながら、政子譚における、継母の嫉みや道行きによって苦難に直面すること、特に苦悩の克服のために修行して、神仏の利生によってすべての苦悩を克服して繁栄するなどの常在譚との共通点を考察してみれば、本地物語の構想[7]との近似性が見出される。よって、『曽我物語』は頼朝と政子の恋愛物語と繁栄譚を描き出す際に、常在の受難譚・救済譚の構造を参照し、伊豆山権現の信仰と結びつけているというように推定できるだろう。

ここで重要なのは、常在譚と政子譚に表される女人救済の構想である。阿部美香氏[8]は、女性たる姉妹が、継母（霊鷲にとっては生母：執筆者注）の迫害による苦難と救済を語る「二所権現」の性格に着目し、次のように論じている。

（姉妹の苦難譚と救済譚は：執筆者注）平安時代以来の伝統的な女人の物語である継子いじめのモチーフを受け継ぎながら、あくまで女人の受難と救済を語る物語として造型されているのである。二所の本地物語が女人の物語として語られていることの意義をあらためて問うならば、そこには二所参詣の利生と救済が、女人の身の上においてこそもっとも強くあらわれるという、最も本質的かつ重要な問題が潜んでいるのではないだろうか。

阿部氏の指摘から、常在譚には女人救済という発想が潜んでいることが明らかである。とすれば、政子譚の最終場面に「女性なれども、信力堅固の故に、権現の御利生を立ち処に蒙りけるこそ有難けれ。」と記されるように、女性が神仏に対する深い信心を持っているからこそ、神仏の利生を蒙ったことにも、女人救済という構想が見出される。

そのような女人救済の存在によって、政子の表象は『曽我物語』の代表的な女性の人物である大磯の虎や曽我兄弟の母の表象と関わっており、物語の根底に流れている女人救済思想と結び付いていると言えるのである。ただし、政子に対する救済は、大磯の虎や曽我兄弟の母のように仏道に結縁する、いわゆる往生を遂げるためではなく、「さればにや、鎌倉殿世を取らせ給ひつつ日本国を持ちて十九年なり。廿年と申す正治元年逝去ありしかば、その後家として二位家の御代とて、承久兵乱の時も京方を討ち亡ぼしつつ、後鳥羽の院を取り奉て隠岐の国へ流し奉り給ふ。」と作者が書き加えた史実のように、頼朝の生前から死後まで、将軍の御台、将軍の後家として幕府を支える大事な役割を担いつづける政治の世界における立身出世に表されている。

おわりに

以上、真名本『曽我物語』に表される政子の仏教的な性格、及び『神道集』「二所権現事」における常在譚との関連性から浮かび上がる政子の受難と繁栄という形の救済を通観してきた。苦悩の様相について、真名本は継母による苦悩と、特に夫婦の深い契りの結果となる、愛別離苦と夫の願望成就に関する苦悩を重視している。それらの苦悩を克服するために、神仏に対する厚い信仰を持ちつつ、煩悩と戦い、修行をする政子の仏教的な性格を描いている。その結果、夫頼朝と再会でき、頼朝の関東制覇の願望成就という政子のすべての願いが叶う。それのみならず、将軍の御台の地位に至り、繁栄する。また、『神道集』「二所権現事」を踏まえて、常在譚と政子譚における共通点・相違点を考察した。その結果、政子譚には本地物語の構造との近似性が見出される。先行研究が指摘する継母による苦悩と、修行のような行動をすること以外に、苦難を受けたため、霊地へ逃亡して、その後、王権者になるという設定にも共通性が見られる。さらに、常在譚における女人救済の構想についての阿部氏の見解に基づいて、政子譚の仏教的な性格を考察すると、政子譚にも女人救済の構想を見出すことができる。このように、真名本は神仏的な信仰、特に女人救済思想と政治の世界を結びつけ、めでたい大将軍の御台として政子の表象を形成していることが考えられる。もちろん、政子譚における女人救済の様相は、享受者を極楽往生へと導くものではない。しかしながら、伊豆山権現への参詣の利生、女性に対する現世救済は物語の享受者に十分に伝えられるだろう。それによって、政子の受難譚と救済譚は本地物語の主題と同様に衆生を仏に結縁させ、仏道へと導くものだと言える。

注

（1）山添昌子「真字本『曽我物語』における北条妃の形象とその背景」（『お茶の水女子大学大文化研究年報』巻四　一九八一年三月）

（2）会田実「『曽我物語』（真名本）の王権と救済―表徴としての富士―」（『文学』第二巻　第三号　二〇〇一年五、六月）は、『曽我物語』は頼朝の政権成立の主題を抱えていると指摘している。すなわち、殺された父の仇討ちをする曽我兄弟の行動を賞賛し、曽我兄弟霊のために彼らの親族に弔わせる命令をした等の頼朝の行動は、曽我兄弟の怨霊の脅威を回避する、いわば頼朝の政権安泰のためである。

（3）『神道集』は、神がかつて人間であり、苦難の体験をしたがゆえに、衆生の救済をする神となるという発想に基づく本地垂迹の物語を説いたものである。小島瓔禮「神道集と曽我物語との関係」（『日本文学研究大成　義経記・曽我物語』国書判行会　一九九三年五月）は、『神道集』と『曽我物語』の親近性を以下のように指摘している。

『曽我物語』と『神道集』とは、文学作品として、非常に近い性格を備えている。第一に、語り物のテキストともいうべき性格のものであること。第二に、その内容が、本地垂迹論的神道神学によっていろどられ、宗教性がきわめて強いこと。第三に、表記法が『吾妻鏡』や『源平闘争録』などにも見られる和文的漢文であること。そして第四には、題材ならびに著作の立場に東国的色彩が濃厚であることなどの諸点が共通であり、しかも成立年代も、さほどへだたっていないものと考えられている。そうした点からして、両書をはぐくみ育てた語り手の集団、ないしは書物に固定させた人の群が、同一あるいは相互に関係のある人々であったことも想像され、なかには、同一作者の手になるとする説をなす人すらある。

（4）阿部美香「霊山に参る女人―二所の縁起と真名本『曽我物語』の世界から―」（『昭和女子大学文化史研究１１』二〇〇七年十二月）

（5）浅見和彦「曽我物語と縁起」（『曽我物語の作品宇宙』二〇〇三年一月）

（6）阿部美香「伊豆峯行者の系譜―走湯山の縁起と真名本『曽我物語』―」（『説話文学研究』第三七号　二〇〇二年六月）

（7）荒木繁「中世末期の文学」（『岩波講座日本文学史』岩波書店　一九五八年）は、本地物語の構想について、一、主人公は多く神仏の申し子であるというような異常な出自をもち、二、いったんは流離・艱難のもとに沈淪するが、三、神仏の加護によって救済されやがて神仏になるという三つの様相を取り上げている。

（8）阿部美香（前掲注（4）著書）

使用テキスト

- 『東洋文庫　真名本曽我物語１』（平凡社　一九八七年）
- 『東洋文庫　真名本曽我物語２』（平凡社　一九八八年）

- 『延慶本平家物語本文篇下』（勉誠社　一九九一年）
- 『神道集』（角川書店　一九五九年）

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。

第八章　田中本『義経記』における静
―権勢による苦悩と諦観の様相をめぐって―

はじめに

静は著名な白拍子で、源義経の愛妾として知られている。『義経記』における静は義経が兄源頼朝により謀反人として追討されて西国に落ちた際に同行するが、女人禁制の金峰山で義経と別れる。離別後、財宝を取られ、苦難に遭遇する。さらに、義経の子を身ごもっていたために頼朝に尋問され、出産後、男児を殺される。その後、悲嘆に暮れつつも頼朝の前で舞を舞わされる。『義経記』はこのように静の過酷な悲劇を描き出しているが、静譚の末尾に後日談として彼女が往生を遂げたことを語っている。

『義経記』における静の苦悩の様相について、細川涼一氏[1]は『義経記』静譚における史実の改変に触れつつ、静の悲劇、特に子の死による悲哀に着目して論じている。

静とその母磯禅師の鎌倉下向について、『義経記』はほぼ『吾妻鏡』の筋を追いながらも、すでに吉野山の別れの時に静が義経の子供を宿していることを、静自身知っていたということにしている。そして、静が鎌倉に身柄を送られたのは、義経の行方を尋問するためではなく、この静が義経の子供を宿していることが鎌倉方にも知られ、その子の処置をするためだったとの形で鎌倉下向の理由が改変されているのである。そして、『吾妻鏡』では静は妊娠の身で鶴ケ岡八幡宮の廻廊で舞を舞ったが、『義経記』では順序が逆になり、静は出産した嬰児を殺害されてから、己れの子を殺させた頼朝の前で舞を舞うという筋になるのである。こうして、『義経記』巻第六のとくに「静鎌倉へ下る事」の段は、義経との間に出来た嬰児を殺されることを中心に置くことで、静の受難に生きる悲劇の女性像、母親像としての面を一段と強調しているのである。

右のように、細川氏は、義経の行方の捜索ではなく、静の懐妊を鎌倉に下向させる理由とすることと、舞の場面と子供が殺される場面の順序を逆にすることを取り上げ、『義経記』における史実の改変を指摘している。[2] 又、『義経記』巻第六、特に「静鎌倉へ下る事」章段で静の子の殺害を中心に置くことによって、母としての悲劇を強調しようとする『義経記』の姿勢を論じている。

「静鎌倉へ下る事」章段においては、子供を失った母としての悲しみのみならず、その悲しみの受け止め方まで詳細に描かれている。又、同じ巻第六に記載される「静若宮八幡宮へ参詣の事」章段における、舞が終わった後、静が引出物を亡き子の供養のために勝長寿院に奉納する場面や、京へ帰る道中で子供を哀惜し、千人の僧を招いて供養する場面には、子への哀惜が募る母親像が窺われる。ところが、静譚の展開として設定される、「静若宮八幡宮へ参詣の事」章段の舞の場面では、子供の死に言及せず、頼朝の権勢によって夫との再会という願望を失って悲嘆に浸る静の姿が描かれている。こうして見ると、物語は巻第六で場面の順序を入れ替えることによって、母の悲哀を強調しているのか、再検討する余地はある。とりわけ、舞の場面で静の悲哀はどのように語られ、結末へ展開してゆくのか、という問題点を考察する必要がある。

舞の場面を考察するにあたっては、この場面で物語が静の悲哀を描き出すだけでなく、心情変化を示すことにも注目すべきである。舞の場面以前の静は義経との離別によって悲嘆に暮れながらも再会に対する願望を持ち続けている。頼朝の前で舞を舞わされる際にもその一途な思いを、今様を通じて吐露するが、頼朝に激怒されたため、歌の下句を詠み変える。その後、静は「かかる憂き世にながらへて何かせんとや」と思い、人生を諦観して出家する。こうして見ると、物語は後日談において出家の契機となる諦観に至るまでの心情変化を設定するにあたって、頼朝に対する静の態度、殊に歌を詠み変えるという行為によって提示しようとしたと推定できるのではないだろうか。そこで、舞の場面で静の心情はどのように変化して、諦観へと展開するのかを具体的に考察したいと思う。

以上の問題意識から、第一節では夫との離別および子の死による苦悩を検討しつつ、先行研究の指摘のように、鎌倉下向以後、物語は母としての悲哀に重点を置いているのか、又、静はそれらの悲哀をどのように受け止めて苦悩を克服するのか、という問題点を考察する。第二節

では舞の場面に着目して静の心情変化と諦観への展開を検討する。史実を改変した結果、静の苦悩とその克服の様相に物語の特色が見出されるのかを明らかにすることを目的とする。

一　苦悩の様相

一-一　夫との離別

義経は平家を攻め滅ぼして忠義を尽くすが、梶原景時の讒言により頼朝との仲が不和になる。義経主従が頼朝の追及を逃れて西国落ちをする時から静を伴っているが、吉野山で決別する。困難な逃避行にもかかわらず女性を同伴することなど、武蔵坊弁慶らの不満を耳にした義経は、別れを惜しみながらも静を都へ帰すと決心する。そこで、義経は金峰山が女人禁制であることを理由にして都に戻るようにと諭す。それに対する静の反応は次のとおりである。

御志尽きせざりし程は、四国の波の上までも具足せられ奉りぬ。契り尽きぬれば力及ばぬことなれども、憂き身の程こそ思ひ知られて悲しけれ。申すにつけてもいかにぞやと覚え候へども、過ぎにし夏の頃よりしてただならぬ事とかや申すは、産すべきものにも早定まりぬ。世に隠れもなき事にて候へば、六波羅へも鎌倉へも聞こえんずらん。東の人は情けなきと聞けば、今に取り下されて、いかなる憂き目をか見んずらん。ただ思し召し切りて、これにていかにもなし給へ。御為にもみずからが為にも、なかなか生きて思はんよりも

〔巻第五「判官吉野山に入り給ふ事」二二九-二三〇頁〕

静は波線部のように別れを歎きつつ自らが懐妊していることを告げる。又、傍線部のように、厳しく残党処理する頼朝らに捕えられ、つらい目に遭うだろうと不安を吐露し、義経の手で自らを殺すようにと懇願する。

義経と離別する場面において静の懐妊が語られていることについて、刑部久氏[3]は、

寵愛と契りの深きとによって二人は子まで成しつつあったのであり、別れようにも容易には叶わぬ程に二人は固い絆で結ばれていたのだということが、享受者に見事に印象づけられていくという仕組みである。

と論じており、懐妊の叙述で義経と静の固い絆が示されていると指摘している。

静の懐妊は義経と離別する場面以外、たとえば、その後の困難な旅をする場面や、蔵王権現に祈願する場面には一切触れられていない。このことから見ると、物語は義経との別れによる悲哀の深さを描写するために、懐妊の話に言及したと推定される。その意味で、懐妊の語りは胎児の命を心配する母としての悲しみを表すためではなく、夫と別れた妻としての悲哀の深さ、あるいは、刑部氏が指摘する、夫婦の絆を示すものと見做される。

物語が重視する夫との離別による悲哀は、義経との離別後、蔵王権現に祈願する場面にも見受けられる。離別後、困難な旅をして蔵王堂に迷い出た静は、老僧に、芸を奉納して本尊に供養せよと勧められ、今様を披露することになる。周囲の人々は静の歌詞の続け方や詠い方を称賛して感動している。ここで、静が今様を詠って心中を吐露することに注目したい。

在りのすさみの憎きだに、在りきの後は恋しきに、飽かで別れし面影を、何時の世にかは忘るべき
別れの殊に悲しきは、親の別れ子の別れ、勝れてげに悲しきは、夫妻の別れなりけり

と謡ひつつ、涙の頻りに進みければ、衣引き被きてぞ臥しにける。

〔巻第五「静吉野山に捨てらるる事」二三八頁〕

傍線を付した箇所に見られるように、夫婦の離別による悲哀は親子の離別に勝ると詠い、義経との離別による悲嘆を吐露する。もちろん、物語は実際に義経との別れによる苦悩を子の命に関する苦悩と比較しているわけではないが、鎌倉下向の前に子に関する苦悩が描かれず、義経に対する哀慕と、離別による悲哀のみ強調されていることが確認できるだろう。

静は義経と別れて以来、悲嘆に暮れるが再会を期待している。蔵王権現に祈願する場面において、彼女は参詣者の舞を見て次のように祈る。

「あはれ我も打ち解けたりせば、などか丹精を運ばざらんや。願はくは権現この度安穏に都へ返させ給へ。また飽かで別れし判官事故なくて、今一度引き合はせさせ給へ。さもあらば母の禅師とわざと参りて、今度の腕差しの丹誠を運ぶべし」と、肝胆を砕きてぞ祈りける。

〔巻第五「静吉野山に捨てらるる事」二三七頁〕

傍線部のように、無事に都へ戻り、義経と再会できれば、母磯禅師（以下、「母」）と一緒に再び参詣して舞を奉納すると祈っている。義経との再会に対する静の願望はこの場面以外では、頼朝の前で舞を舞う場面にも再度語られている。舞の場面における再会に対する願望については、次節で具体的に考察する。

義経との再会の他に、義経と頼朝の和解を願っている静の姿も見受けられる。頼朝が静の舞を所望する場面において、工藤祐経の妻は静を訪ねて鶴岡八幡宮で法楽の舞を奉納するよう説得する。彼女は頼朝の命令と言わずに、今様や演奏をして静の心を打ち解けさせる。八幡権現の利生を「鎌倉殿にも氏神なれば、判官殿のなどか守り奉らざらむ。」と述べ、さらに静を次のように説得する。

明日また夜をこめて御参詣候ひて、思し召す御宿願も遂げさせ御坐し、そのついでに御腕差し、法楽参らせさせ給ひ候ひなば、鎌倉殿と判官殿と御仲も直らせ御坐し候ひて、思し召し候ふままなるべし。奥州に渡らせ給ひ候ふ判官殿も、聞こし召し伝へさせ給ひては、わが

御為に丹精を致し参らせさせ給ふと聞こし召しては嬉しとこそ思し召し候はんずれ。（中略）静これを聞きて、実にもとや思ひけん。磯禅師を呼びて、「いかがあるべき」と言ひければ、禅師も、あはれさもあらまほしく思ひければ、「これは八幡の御託宣にてこそ候へ。これ程深く思し召しける嬉しさよ。疾く疾く参らせ給へ」とぞ申しける。

〔巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」三五八頁〕

傍線部のように、祐経の妻は鶴岡八幡宮で法楽の舞を奉納すれば、頼朝と義経の仲違いが直り、静の願いが叶うだろうと説得する。それに対し、波線部「実にもとや思ひけん」と静の反応が描かれるように、彼女は祐経の妻の言葉を信じている。その他、頼朝の前で舞った後、引出物を与えられた静は「我禄を取らん為にも舞ひたらばこそ、判官殿の御祈りの為にこそ舞ひたれ」とあるように、褒美を得るのではなく、義経の願望が成就するために舞ったと述懐する。このように、祐経の妻に対する静の態度と舞の後の述懐から見ると、静は兄弟の和解に対する願望を持っていることが認められる。

以上見てきたように、静の懐妊や、「別れの殊に悲しきは、親の別れ子の別れ、勝れてげに悲しきは、夫妻の別れなりけり」との吐露から、夫との離別による悲哀が強調されている。このように、静は義経と別れて悲嘆に暮れるが、蔵王権現に祈願する場面と鶴岡八幡宮で舞を奉納する場面に見られるように、夫との再会および兄弟の和解を願っている。殊に、夫との離別に苦しみつつも再会を期待している静の姿は、離別の場面のみならず、鎌倉下向以後の舞の場面にも示されており、静譚を通して一貫していると言える。

一-二　子の死

義経と離別する場面で、静の懐妊のことは彼女自身の口から語られているものの、母の苦悩として描き出されていない。しかし、鎌倉下向以後は、義経唯一の形見の子供を失った静の悲しみだけでなく、その悲哀を受け入れようとする姿も詳細に描写されている。

静は衆徒たちに捕らえられた後、都に帰されるが、義経の子を宿していることを頼朝に知られ、彼女の母と共に鎌倉に下向することになる。頼朝は景時が勧めたとおりに、静の出産を監視し、女児なら生かすが、男児なら殺すと命じる。

鎌倉殿梶原を召して、「あら恐ろし、それ聞け景時、既にえせ者の種継がぬ先に、静が胎内を開けさせて、子を取りて失へ」とぞ仰せられける。静も禅師もこれを聞きて、手を手に取り組みて、顔に顔を合はせて、声も惜しまず悲しみけり。

〔巻第六「静鎌倉へ下る事」三四二頁〕

尋問の場面において、頼朝は静と胎内の子供ともども殺そうとするが、景時に止められている。ここに、頼朝の無情と静の憂き身が表されている。

静は出産の直後、男児を殺される。子供の死を歎く静の姿は次のように描かれている。

静これを見て、いとど心も消えて思ひけり。「男子か女子候ふや」と禅師に問へども、答へねば、母の抱きたる子を取りて見れば。男子なり。一目見て、「あな心憂や」とて、衣引き被きて打ち臥しぬ。ややあつて、「いかなる十悪五逆の者の、たまたま人界の生を受けながら、月日の光をだにも定かにも見奉らずして、生まれて一日一夜をだにも過ごさで、やがて冥途に帰らん事こそ無慚なれ。前業限りある事なれば、世をも人をも恨むべからずと思へども、今はの名残に別れの悲しきぞや」とて、袖を顔に押し当ててぞ泣き居たる。

〔巻第六「静鎌倉へ下る事」三四五頁〕

産んだ子が男子だと母から聞いた静は泣き悲しんでいる。傍線部のように、子供の死を、産れた子自らが前世で犯した罪の結果として受け止めている。それに続き、波線部のように前世でつくった業ゆえに、世をも人をも恨んでいないが、子供の死は名残惜しいと歎いている。

静これを受け取り、生を変へたる者を隔てなく身に添へて悲しみけり。「哀傷とて、親の嘆くは殊に罪深き事にて候ふなるものを」とて、堀藤次が若党に申し付けて、幼き人の曾祖父、故左馬頭殿の為に作られたりける勝長寿院の後ろに埋みてぞ帰りける。「かかる心憂き鎌倉に一日にてもあるべきやうなし」とて、急ぎ都へ上らんとぞ出で立ちける。

〔巻第六「静鎌倉へ下る事」三四八頁〕

その後、子供の遺骸を見た静は歎き悲しみながらも、親が子の死を歎くのは罪深いことであると述べ、子供の遺骸を勝長寿院の裏に埋める。傍線部「かかる心憂き鎌倉に一日にてもあるべきやうなし」と歎き、すぐ都に帰ろうと思っている。

ここで注目したいのは子供の死に関する静の述懐である。子供が殺されることについて、静は以前から覚悟している。「幼き人の事は思ひ設けたる事なれば、さて置きぬ。」と母が静を慰める箇所や、あるいは、前掲の義経と別れる場面において、頼朝に捕えられてつらい目に遭うだろうと静自身が述懐していることからも明らかである。とりわけ、子供が殺された場面においては、世にも人にも恨みがなく、子供の死を宿世として受け止めようとする静の心境が詳細に描き出されている。

自らの苦悩が前世からの罪によって生じており、恨みがないというような述懐は、軍記物語における他の女性の記述にも見られる。例えば、南都本『平家物語』の祇王譚において、平清盛に寵愛された、白拍子の名手祇王は新手の白拍子仏の出現で清盛の館から追い出される。[4] 祇王の心中は次のように描かれている。

今ハ引返シ我身ノ上ニ成ヌルカナ是モ又先世ノ宿執ニテコソ有ラメ今更世ヲモ人ヲモ恨ヘキニ非ス

〔南都本『平家物語』「祇王」三三頁〕

祇王は自らが遭遇した悲哀を、傍線部のように前世の宿執として受け止め、世にも人にも恨みがないと述懐している。関口忠男氏[5]の論考で、南都本に描かれる前世の果報に対する祇王の意識は、王朝時代以来の伝統的宿世観がもたらしたものであると指摘されている。このように、祇王の述懐と合わせて見ると、静譚は悲哀の類型的な表現を利用して静の心情を描写していることが窺われる。

こうして見ると、静譚は鎌倉下向の場面において子供に関する苦悩を初めて表出し、また、その悲しみを受け止めようとする静の姿を、類型的な表現を通じて描写している。特に注目すべきは、子供の死による悲哀を受け止める静の姿が繰り返し語られることである。静が義経と別れる場面、母が静の悲しみを慰める場面、特に子の死を宿世として受け止め、だれにも恨みがないと静が述懐する場面の三つの場面から見ると、物語は舞の場面の前に、敗北者の妻としての憂き身を覚悟する静の行為を意図的に描こうとすることが考えられる。

以上、舞の場面を境にして静の苦悩を見てきた。舞の場面以前の静は夫、子との離別に苦しみつつも、その悲哀を受け止め、夫との再会および頼朝との和解を願っている。とりわけ、夫と再会したいという思いは蔵王権現に祈願する場面の他に、舞の場面にも繰り返し語られ、首尾一貫性があると言える。こうして、物語は鎌倉下向以後、先行研究の指摘のように母としての悲哀を強調しているというより、権勢により夫、子と離別して幾重もの苦悩を抱え込みながらもその悲哀を受け止めるしかできないという、妻母としての静の憂き身を描き出そうとすることが推定される。

二　道心を導く諦観

前節で見てきたように、舞の場面以前、静はだれにも恨みがなく、さらに、義経と離別した際にも、子供を失った際にも、義経との再会を期待する心に変化はないことが表されている。では、静が頼朝に舞を舞わされる場面において、彼女の反応はどのように描かれているのか、見てみる。

舞の場面において、静は最初に「しんむじょう」と「君が代の」の歌を祝言として詠ずる。それに続いて、「詮ずる所敵の前の舞ぞかし。思ふ事を歌はばやと思ひて」とあるように、「敵」の前で舞っているので、自らの思いも伝えようと思っている。ここに、頼朝への静の恨

みが捉えられる。頼朝に対する静の憎しみは、子供が殺される場面などには表されていないものの、静の舞を所望する場面において初めて彼女自身の述懐と頼朝の言葉を通じて明示されている。

頼朝が三島神社で精進を行う際に、側近は静の舞を言い出してそれを見たいと申し出る。

鎌倉殿仰せられけるは、「静は九郎に思はれて、身を華飾にするなる上、思ふ仲を妨げられ、その形見にも見るべき子を失はれ、何のいみじさに頼朝が前にて舞ふべき」と仰せられければ、

〔巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」三四九頁〕

それに対し、傍線部のように頼朝は自らが静と義経の仲を邪魔し、義経の形見として育てようとする子供まで殺したゆえに自分の前で舞うはずがないと述べ、自らへの静の憎しみを推し量っている。

頼朝の所望を聞いた静の反応は次のとおりである。

この由を静に語れば、「あな心憂や」とばかりにて、衣引き被きて臥し給ひけるが、「すべて人のか様の道を立てける程の、口惜しき事はなかりけり。この道ならざらんには、かかる一方ならぬ嘆きの絶えぬ身に、さりとて憂き人の前にて舞へなんどと、たやすく言はれつるこそ安からね。なかなか伝へ給ふ母の心こそ恨めしけれ。されば舞はば舞はせんと思し召しけるか」とて

〔巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」三五一 - 三五二頁〕

頼朝が舞を所望していることを母から聞いた静は、右のように自らが白拍子でなかったら、不幸が絶えぬ身にはならなかっただろうと歎き、さらに、二重傍線部「憂き人」の前で舞えと簡単に言われることと、それを伝えた母のことを恨んでいる。

静は舞の所望を断るが、その後、祐経の妻の説得により鶴岡八幡宮に参詣する。

静は、人の振る舞ひ、幔幕の引き様、いか様にも鎌倉殿の御参詣と覚ゆる。祐経が女房に賺されて、鎌倉殿の御前にて舞はせんとすると覚ゆる。あはれ何ともして、今日の舞を舞はで、帰らばやとぞ、千種に案じ居たりける。

〔巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」三六二頁〕

静は鶴岡八幡宮に着いた時、周囲の人達の振る舞いなどで頼朝がその場にいることを察知し、祐経の妻に言い包められたことに気付く。そこで、傍線部のように舞を舞わず帰ろうとしている。

以上のように、頼朝を「憂き人」、「敵」と見做し、頼朝に反抗する静の態度から見ると、頼朝に対する静の憎悪が明確になる。とりわけ、頼朝が静の心境を推し量る際に、その原因が「静は九郎に思はれて、身を華飾にするなる上、思ふ仲を妨げられ、その形見にも見るべき子を失はれ」と詳細に描かれている。ここに、物語は頼朝の言葉を通じて静が頼朝を恨む原因を示すと同時に、舞を舞わされる際に夫と別れ、子まで失った幾重もの苦悩を抱え込む静の心境を描き出そうとすることが推定される。

このように、静が義経と別れて子供まで殺され、さらに、舞を舞わされることを一連の出来事として考慮すると、依然、悲哀を受け止めようとしているが、苦悩をもたらした張本人である頼朝に接することによって、憎しみが生じてくるという静の心情変化が窺われる。

恨みの他に、義経に関する願望にも変化が見出される。舞の場面において、静は「しんむじょう」と「君が代の」の歌を詠じた後、「詮ずる所敵の前の舞ぞかし。思ふ事を歌はばや」と思って次のように今様を詠う。

しづやしづ賤のをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな
吉野山峰の白雪踏み分けて入りにし人の跡ぞ恋しき

〔第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」三六八頁〕

静は「しづやしづ」と「吉野山」の歌を詠って、義経との再会に対する願望と、別れた義経に対する哀慕を吐露している。「しづやしづ」には、賤のおだまきを何度も繰り返して布を織るように、義経が静、静と繰り返して名を呼んだ昔を今に取り戻すことができようかとあるように、義経と一緒にいた昔を懐かしみながら、再会を望んでいることが表されている。「吉野山」には、吉野山で別れた義経に対する静の哀慕が表現されている。

静の歌を聞いた頼朝は激怒して次のように言葉をはく。

白拍子は興醒めたるものにてありけるや。舞の舞ひ様、謡の歌ひ様怪しからず。頼朝田舎人なれば、聞き知らじとて歌ひたるか。『賤のをだまき繰り返し』とは、頼朝が世尽きて、九郎が世になれとや。あはれおほけなく思ひたるものかな。『吉野山峯の白雪踏み分けて、入りにし人の』とは、たとへば頼朝九郎を攻め落とすと雖も、未だありとござんなれ。あ憎し憎し

〔第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」三六八－三六九頁〕

傍線部のように、静が頼朝の世が終わって愛する義経の世にしたいという思いを持っており、頼朝が義経を攻め落としたと言ってもまだ健在だと嘲っているのではないかと激怒する。それに対し、頼朝の妻政子は、静に風雅な心があるからこそ舞った、又、女は弱い者であると説き、頼朝の怒りを静めようとする。頼朝は政子のとりなしで怒りが少し和らいでくる。

ここで注目すべきは静の反応である。

静悪しき御気色と思ひて、また立ち返り、

吉野山峯の白雪踏み分けて入りにし人の跡絶えにけり

と歌ひたりければ、御簾を高らかに上げさせ給ひて

〔第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」三六九頁〕

静は頼朝の機嫌を損なったと思い、「吉野山」の下句を「人の跡絶えにけり」と詠み変える。そこで、頼朝は「御簾を高らかに上げさせ給ひて」とあるように機嫌を直し、さらに、引出物を与える。

静が詠み変えることについて、藪本勝治氏[6]は次のように論じている。

静自身が「跡ぞ恋ひしき」を「跡絶えにけり」と即興で歌い変える機転により窮地を脱するわけで、（岩松研吉郎氏[7]が指摘した：執筆者注）芸能成功譚としての意味合いが強く、義経思慕の志向性が大きく損なわれていることは明らかであろう。

藪本氏は静が歌を詠み変えることを、即興的な芸能を披露したことで、頼朝の怒りを直して窮地を抜け出そうとする静の態度と解釈し、それにより義経思慕の志向性が希薄化することを指摘している。

芸能者の即興性について、大木桃子氏[8]は、説話集における芸能者が今様を即興で歌う独特の旋律や歌詞によって、神仏、人の心は動かされるという設定を指摘している。こうして両氏の指摘を合わせて考えれば、静が歌を詠み変えることに、頼朝を感動させる彼女の芸能の能力が見出される。

芸能的な側面の他に、注目したいのは、物語が即興で歌を詠み変える静の行動を描いた結果、義経思慕の志向性が希薄になるとの指摘である。前節で考察したように、静は舞の場面以前は義経との再会に対する願望を持ち続けている。ところが、舞の際に、頼朝に圧力をかけられたため、歌を詠み変え、その後、義経との再会に対する願望に言及せず人生を諦観する。こうして見ると、歌を詠み変えることは静の心情の転換点と見做されるが、藪本氏が指摘するように、ここに義経思慕が希薄化することが捉えられるのだろうか。この問題点と静の絶望感の描写を考察するために、ここで「跡絶えにけり」との歌詞と静の舞後の態度に着目したいと思う。

「跡絶えにけり」との歌詞に、義経と別れて行方が知れなくなったという夫との離別による悲しみが表明されている。とりわけ、最初に詠った二首の歌を詠み変えた歌の内容と合わせて考慮すると、昔を取り戻したい、別れた義経を哀慕するといった静の感慨を詠む歌であっ

たのが、夫の行方が知れなくなった、すなわち、義経と再会できないことを認める彼女自身の現状を詠む歌に変えられている。こうして見ると、「跡絶えにけり」の歌詞には、夫との離別による悲哀の他に、再会に対する絶望感を抱く静の姿も浮かび上がってくる。

絶望感を抱く静の姿は舞の場面の後にも見て取れる。舞が終わった後、静は多くの引出物を与えられるが、「判官殿の御祈りの為にこそ舞ひたれ」と言って、鶴岡八幡宮の修理のために奉納する。もちろん、この述懐は静が引出物を拒否する理由として取り上げられているが、夫の願望を成就させたい妻としての思いと、それを実現できない絶望感もこの述懐から見て取れる。

前述のように、頼朝との和解に対する静の願望は今様を奉納する契機として示されており、ここに作者が頼朝と義経の不和のことを舞の場面と関連づけようとすることが窺われる。又、静が義経に対する哀慕を表す「しづやしづ」と「吉野山」の歌を詠った際に、義経の世にしたいという義経の願望を静が代弁しているのではないか、と頼朝が疑って激怒する場面にも見られるように、物語は舞の場面を通じて兄弟の不和を打ち出そうとすると同時に、義経、静が望んでいた頼朝との和解が実現できないことを示している。このように、舞の場面は単に彼女自身の心中を表すだけでなく、和解できない頼朝と義経の不和、義経の悲劇を示すものともなる。その意味で、物語は「判官殿の御祈りの為にこそ舞ひたれ」との述懐に、夫の願望を実現できないという静の絶望感を表出しようとしたことが考えられる。[9]

以上のように、静は夫の願望である頼朝との和解が叶わず、さらに、夫との再会も断念せざるを得ないことで絶望して悲嘆に暮れる妻としての姿が描き出されている。こうした夫に関する悲哀の表出や「判官殿の御祈りの為にこそ舞ひたれ」との述懐から見ると、藪本氏が指摘するように義経思慕が希薄化するのではなく、むしろ、別れた夫への妻の思いがここに強調されており、義経に対する思慕が静謹を通して一貫していると言える。

舞が終わった後、静は亡き子の供養のために引出物を勝長寿院に奉納し、京へ帰る道中でも亡き子への哀惜の念が募ってくるので、千人の僧を招いて供養する。帰京した後、「物をもはかばかしく見入れず、憂かりし事の忘れ難ければ、訪ひ来る人も物憂しとて、ただ思ひ入りてぞありける。」とあるように、憂愁の念を抱く静の姿が描かれている。

物語はこのように夫との再会および頼朝との和解に絶望し、子の死により哀惜の念に堪えない、静の妻母としての悲劇を描き出した上で諦観へ移っていく。静が人生を諦観して仏道に入る場面は次のように描かれている。

明け暮れは持仏堂に引き籠り、経を読み、仏の御名を称へてありけるが、かかる憂き世にながらへて何かせんとや思ひけん、母にも知らせず、髪を切りて剃らせけり。天王寺の麓に草の庵を結び、禅師共に行なひ澄ましてぞありける。禅師の心の内思ひやるこそ無慚なれ。能は日本一、容貌は王城に聞こえたり。心情けは人にも勝れたり。惜しかるべき歳ぞかし。十九にて様を変へ、次の年の秋の暮れには紫雲棚曳き、音楽空に聞こえて、往生の素懐を遂げにけり。禅師も程なく共に往生しけるとかや。

〔第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」三七一頁〕

絶望に苦しむ静は仏道修行に専念しようとするが、波線部「かかる憂き世にながらへて何かせん」と諦観して出家する。出家から一年後、「往生の素懐を遂げにけり」とあるように、女人救済という構想が提示されている。

ここまで見てきたように、舞の場面は静の道心への転換点として設定されることが明確になる。舞の場面の前に、彼女は苦悩を受け止めようとするが、頼朝の接触によって憎悪が現れてくる。静の恨みは彼女自身の言動のみならず、頼朝が彼女の心境を推し量った言葉でも明示されている。恨みの他に、義経との再会と兄弟の和解に対する願望にも変化が見て取れる。舞の場面で、静は権勢により、兄弟の和解と、特に義経と別れて以来、持ちつづける再会に対する願望を失い、その悲しさにより落胆して人生を諦観する。よって、物語は道心へと展開して救済と結びつける際に、舞の場面において恨みと絶望感で心情変化を示した上で、静の悲劇を打ち出そうとすることが見出される。さらに、頼朝との和解に絶望する静の姿を通して義経と頼朝の不和の深刻さを示し、義経の悲劇性を浮き彫りにしようとする物語の意図も窺われる。

女性が権力者に圧力をかけられたことによって恨みを抱くこと、あるいは、権勢によって生じる苦悩が諦観を引き起こす原因となって道心と繋げられることは、前掲の『平家物語』祇王譚をはじめ、軍記物語の中でよく見られる。祇王譚では清盛に追放された祇王は、仏の退屈を慰めるために舞を披露せよとの清盛の命令が来たが返事をしない。母の説得で、結局、参上して今様を披露するが、清盛に冷たい仕打ちをされたが故に悲観して出家する。このように、祇王譚も静譚も、権力者への恨みを抱き、その権力に反抗しようとする女性の行為を描きつつ、

権勢によって生じる苦悩を、諦観・道心を引き起こす原因として設定している。さらに、両者とも遭遇した苦悩を無常の理として認識することがなく、悲嘆に暮れる姿のみ語られていることから見ると、彼女たちの出家は「現世を絶望した上での逃避的出家」と言える。(10)

こうして、静謹における権勢によって生じる苦悩の様相や、諦観を起因とする逃避的出家の様相は、女性の叙述における典型的な設定として見做される。ところが、物語は諦観へ展開する過程において、権力者の前で愛する者との離別による悲しみを訴えながら愛する者との再会および和解を期待できないと痛感して絶望する静の姿を詳細に描き出しただけに、静の憂き身および道心へのつながりが一層浮き彫りになっており、静謹の特色がここに表明されている。

おわりに

舞の場面を境にして静の苦悩の様相と心情変化、および後日談における諦観を起因とする道心の様相を考察してきた。問題提起で触れた、物語が舞の場面と子供が殺される場面の順序を入れ替え、子供に関する苦悩を中心に置くということについて、子供が殺された場面以外、舞の場面の後にも子の死により哀惜の念に堪えない母の姿が描かれている。とはいえ、「しづやしづ」、「吉野山」の歌、特に詠み変えた「跡絶えにけり」の歌詞などに見られるように、物語は静が子供を失った苦悩を強調するのではなく、むしろ、夫との別れによる悲哀を重視している。舞の場面はこのように静が抱え込む悲しみの深さを表出しており、また、心情の転換点としても機能している。舞の場面の前は、愛する者との生別・死別に苦しみつつも悲哀を受け止め、夫との再会および夫の願いである頼朝との和解に対する願望を持っている。しかし、舞の場面においては、苦悩をもたらされた張本人たる頼朝に圧力をかけられたことにより、恨みが静の心に湧いてきて、さらに、以前から持ち続けていた願望を失って前途を悲観する。このように、物語は舞の場面で義経との離別による悲哀を描写するのみならず、権勢によって生じる恨みと絶望感で心情変化を提示した上で諦観・道心へ展開したからこそ、悲劇性はより深いものとなり、道心を導く要因もより明確に見出される。さらに、物語は再会、特に兄弟の和解に対する静の絶望感を提示するにあたって、頼朝との不和を積極的に描き出すことから見ると、義経の悲劇は静が権力者にもたらした悲痛を通して打ち出されていることも窺われる。静謹は悲哀の類型的な表現を

利用して出家・往生の場面などに典型的な設定を構成しつつも、受苦から諦観への心情変化を重視して苦悩の様相を特色づけただけに、静自身の憂き身と、愛する義経の悲劇性とがともに浮き彫りされていると言える。

注

（1）細川涼一「静小論」（『京都橘女子大学研究紀要』十六　一九八九年十二月）

（2）『義経記』静譚における史実の改変について、角川源義「『義経記』の成立」（『語り物文芸の発生』東京堂出版　一九七五年、初出一九六〇年）、内藤浩誉「母と娘の記憶と物語―鎌倉における静御前―」（『静御前の伝承と文芸』国学院大学大学院　二〇〇四年）、藪本勝治「白拍子静の鎌倉下向」（『軍記物語の窓』四　和泉書院　二〇一二年）を参照。

（3）刑部久「『義経記』巻第五「判官吉野山に入り給ふ事」に見る義経・静の紐帯の構想―〈鏡〉とその贈与・継承の象徴性をめぐって―」（『軍記と語り物』三七　二〇〇一年三月）

（4）『平家物語』における祇王譚と『義経記』における静譚は、芸能の要請への否定と母の説得・判断を通じての承諾という話型や、天龍寺を出家の場として設定することなどの点で共通していることが多く論じられている。例えば、天龍寺を静が出家・往生を遂げる場所として設定することについて、徳江元正「静御前の廻国」（『国学院雑誌』六一巻一号、一九六〇年一月）は、天龍寺、あるいは、嵯峨辺りの寺で出家する『平家物語』の祇王と仏、『太平記』の勾当内侍の後日談と照らし合わせ、嵯峨辺りに比丘尼寺の本寺があるだろうと推測し、物語と尼寺の関連性を論じている。

（5）関口忠男「祇王説話考（一）」（『目白学園女子短期大学研究紀要』十一　一九七四年十二月）

（6）藪本勝治（前掲注（2）著書）

（7）岩松研吉郎「巻六の静について―『義経記』ノート・2―」（『芸文研究』五七　一九九〇年三月）は、静が舞の場面で詠った歌から、祝言性・即興性が読み取れると指摘している。最初に「しんむじょう」と「君が代の」を詠うことを、「即興的に祝言としてうたいおさめるのである」と捉え、又、その二首に続き「しづやしづ」と「吉野山」を詠ったことを、「芸を披露し、祝言の役目をはたし上で、趣

をかえて芸をふたたびだす段取」と指摘している。さらに、静の詠み変えについて「ふたたび即興的に、今度はみずからの歌の言葉をさらに「もどいて」、頼朝に追従したわけである。静の芸能成功は、「入りにし人の跡ぞ恋しき」を「跡絶えにけり」とうたいかえることでようやく、そしてまた完全にはたされたのであった。」と論じている。

（8）大木桃子「遊女の血縁・往生譚と今様」（『語文研究』九九　二〇〇五年六月）は、説話集に見られる、今様を歌って、遊女をはじめ、芸能者が僧に結縁する、あるいは往生するという話型に着目して、彼らの今様は歌詞の内容、独特の旋律、歌い手の声の美しさで、神仏、人の心を動かし、時に霊験効果を発するといった、芸能者の救済と今様の徳の関連性を指摘している。

（9）史実と物語における頼朝を怒らせる原因の相違について、『吾妻鏡』においては、頼朝が静を怒ったのは「尤も關東の萬歳を祝ふ可きの處、聞食す所を憚らず、反逆の義経を慕ひ、別曲の歌を歌ふこと奇怪なり」とあるように、静が関東を言祝ぐ歌を詠うべきところを、反逆者の義経を慕う歌を詠ったからである。一方、『義経記』における頼朝を怒らせる原因は、『吾妻鏡』のように静が義経に対する恋慕の情を訴えるのではなく、義経の世にしたいという彼の願望を静が代弁すると、頼朝は受け取っているからである。このことから、山下宏明「幸若舞曲の連作性」（『軍記物語の方法』有精堂　一九八三年）は、悪役を頼朝に押し付けようとする『義経記』の作者の姿勢を指摘している。

（10）祇王の出家について、関口忠男「『平家物語』の女性像」（『中世文学序考』武蔵野書院　一九九二年）は、次のように論じている。

祇王は、有為転変せる滅びへの道を身をもって歩むことにはなったが、未だ祇王自身では自覚的に無常の理を認識するにはいたらず、従って、その出家も現世を絶望した上での逃避的出家であって、いわば現世の無常から逃れるための出家であった（後略）。

使用テキスト

- 『新編日本古典文学全集６２　義経記』（小学館　二〇〇〇年）
- 『岩波文庫　吾妻鏡　二』（岩波書店　一九四〇年）
- 『南都本　南都異本　平家物語　上巻』（汲古書院　一九七一年）

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。

終章

本論文では、中世軍記物語における女性の苦悩とその克服の様相に着目して、愛する者のために果たす役割、および女性たち自身に対する仏教的な救済を考察した。

序章で触れたように、女性は五障三従の身で、罪深く自由がないものであるという考え方が中世の社会にあった。そのような考え方は中世軍記物語にも投影されている。本論文が取り上げた八人の女性の記述に見られるように、女性たちは憂き身を歎きながらも、救済を求めている。苦悩に遭遇した際に、神仏の力に帰依して、夫、子供のために様々な役割を積極的に果たして、苦悩を克服しようとしている。その結果、夫、子が救われたと同時に、彼女自身も苦悩を克服できた。各章における女性の苦悩の克服の様相、および仏教的な救済を考察した結果は、次のようにまとめられる。

第一章では、延慶本『平家物語』における二位殿の苦悩の様相と、苦悩の克服としての遺言、及び平家の悪行の応報に対する意識を考察した。二位殿は、夫の死、子の捕虜によって悲歎に暮れると同時に、平家一門を見守る役割により家の没落に直面するという、両方の立場を通して苦悩の様相が描かれている。苦悩の克服の様相について、平家物語の諸本の中で延慶本と覚一本だけが、二位殿の遺言および「応報観」を描いており、平家一門の後世救済へと展開させる要素として設定している。このことから、両本において、平家一門の後世救済の役割は、多くの先行研究が注目する建礼門院のみならず、平家を見守る後家としての二位殿にも与えられていることが窺われる。ところが、延慶本において、平家一門の救済が二位殿によって建礼門院に託され、又、「応報観」が建礼門院自身の認識として語られる設定になっているため、二位殿は表立った役割を演じていないことを指摘した。

清盛と同様に仏罰に当たった者とされるもう一人の登場人物は平重衡である。第一章で考察してきたように、平家一門は二位殿、建礼門院の役割により後世を救済されたことが、物語の結末に明確に表されているが、重衡の場合は生捕りにされてから斬首されるまでの過程において、後世救済の構想をすでに設定している。そこで、第二章では、重衡救済の構想に着目して、彼をめぐる北の方と内裏女房と千手前の三

人の女性の役割を検討した。先行研究では、三人の女性が重衡の苦悩を聞く・語る形で重衡救済と深く関わっていることが指摘されているが、本章は、延慶本が重衡救済における女性たちの役割を個別に分けて丹念に描いていることを明らかにした。重衡の生前、千手は罪業に苦しむ心を慰め、また、源氏側の人々に同情させる媒体としての役割を果たしている。重衡が愛する内裏女房と北の方は、妄念による苦悩を解消させる役割を担っている。特に、本章で注目したのは、延慶本における重衡の後世救済という重要な役割を果たす者は、覚一本のように女性全員ではなく、北の方だけに特定していることである。ここから、正妻としての北の方の役割を前面に打ち出そうとしている延慶本の姿勢が見出される。一方、女性たち自身の苦悩とその克服の様相については、延慶本において重視されていない。北の方譚には愛別離苦や、家の没落などが描かれているが、苦悩の克服の様相、特に来世救済は見られない。よって、延慶本は重衡救済に焦点を当てて、彼女らそれぞれに重衡救済の物語に資する役割を担わせ、女性たち自身の救済には触れないことで一貫していることが窺えた。

第二章は、女性が男性から救済を求められる者として位置づけられていることを検討したのに対し、第三章は、その反対に、男性に救済される者としての平維盛北の方の造型の考察を試みた。維盛北の方は戦乱で夫を亡くし、また戦後処理で子を捕えられる、という夫と子に関する苦悩を背負っている。先行研究は、戦乱で夫と離別して悲嘆に暮れ、死後の供養を託されることに着目して、他の女性登場人物と対比して彼女の造型には特徴がないと論じている。しかし、維盛は入水の直前に、往生を遂げて妻子を救済したいと述懐する場面がある。このような維盛の意志が示されたことによって、北の方の造型に男性から後世救済を求められる存在だけでなく、夫に救済される存在としての一面も浮かび上がってくる。ここに北の方の特質が窺えた。ところが、そのような北の方の表象は物語が女人救済の構想を提示するために作り出すのではない。本章は、平家物語が維盛と重衡の対比を意識して描き出しているという先行研究の指摘に基づき、夫に救済されるという北の方の表象は、重衡と維盛を対照的に結び付け、恩愛による妄念から離れられない維盛の最期へと展開する仕掛けの結果だと推測した。

第四章では、学習院本『平治物語』における常葉の造型を取り上げ、母子救済の様相を考察した。第三章で考察したように、維盛北の方の苦悩は夫との死別だけでなく、戦後処理により子供を捕えられたことにもある。維盛北の方の場合は、長谷寺観音の利生に帰依した結果、子供が救われたとある。このような戦後処理から子供を守るために、観音の利生に帰依するという設定は『平治物語』の常葉譚にも見受けられる。特に、先行研究の指摘のように、『平治物語』諸本の中で、学習院本は他の諸本より母子の悲哀と観音救済を重視する。

そこで、本章では、従来の先行研究に基づき、学習院本における常葉の苦悩とその救済の様相を、描かれ方を通じてさらに追究した。学習院本と金刀比羅本における常葉譚の描かれ方を対比した結果、学習院本は母子の苦悩および観音の利生を描写するにあたって、対比の表現方法を積極的に利用していることを明らかにした。学習院本は、母子の受難から観音救済へと展開する過程において、対比の表現を利用して、敗将の妻子の悲劇性や常葉の性質を、人と神の同情心を引き起こすものとして打ち出し、観音利生による母子救済という構想を提示していることを指摘した。

第五章では、第三章と第四章に引き続き、母子の苦悩に着目した。真名本『曽我物語』における曽我兄弟の母の苦悩は、先行研究で指摘されたように、夫の死の他に、父のために敵討ちをせよという兄弟への母自身の命令にもある。ただし、兄弟の敵討ちへの思いを必死に止めようとする母の言動に見られるように、物語は母の行動を罪と捉えていない点に注意した。又、兄弟の死後の場面において、弟を勘当したこと、特に兄弟の敵討ちを止められなかったことを後悔する母の姿が繰り返し描かれており、母自身の行動への後悔も苦悩の原因となっている。殊に、出家・往生の場面以前の兄弟の道行きを辿る場面と、箱根山の別当と対面する場面において、兄弟の心境が再現したことによって、彼女の後悔の念およびそれによる苦悩がより強調されている。このような後悔の念、募った悲哀こそ、兄弟の供養に励む動機となると同時に、出家・往生の時に「娑婆離別の愁ひ」を悟ったという心情に変化した要素とも考えられる。

第六章では、真名本『曽我物語』における大磯の虎の愛執と、それによる女人往生の構想の特異性を考察した。虎譚において、曽我兄弟の母譚と同様に女人往生の構想が設定されている。しかし、虎譚は、兄弟の母のように悲哀を翻した上で往生を遂げたのではなく、夫婦の恩愛から生じた愛執を振り払うことができないにもかかわらず、そのまま往生を遂げたことを描き、女人救済の構想に特異性を示している。虎の愛執は、出家して修行に励んでいながらも、常に亡き十郎の面影を偲び、臨終を迎える時までも幻覚が出現することに表明されている。よって、仏道に帰依しても悲哀から離れられず、愛執により愛別離苦を克服できない虎の姿が窺えた。このような虎の特異な往生譚から、執着から切り離したことによって往生を遂げたという元来の往生から変容する当時の女人救済の捉え方を垣間見ることができる。

第七章では、真名本『曽我物語』の北条政子譚における苦難から繁栄へと展開する過程を考察して、神仏の利生による女人救済の様相に着目した。政子も大磯の虎と同様に救済された女性として描かれているが、最終場面における救済譚は仏道の世界で往生を遂げたこと

ではなく、将軍の御台の地位に至り、繁栄したという政治の世界における立身出世の形で表されている。政子の克服の様相について、神仏に対する厚い信仰を持ちつつ、煩悩と戦って父への孝行を尽くし、さらに、夫の繁栄のために修行に励むという仏教的な性格が色濃く描かれている。そういった性格をもったからこそ、道行きの苦難を克服できたのみならず、頼朝の関東制覇の願望成就という願いも叶い、さらに、彼女自身も将軍の御台の地位に至った。先行研究では、このようなめでたい妻としての政子の造型は、頼朝の政権成立の主題を支えると指摘されている。また、本章は『神道集』における常在御前の救済譚を取り上げ、苦悩を克服して繁栄に至った過程に見られる政子譚と常在譚の共通点・相違点を考察した。その結果、政子譚に本地物語の構造との近似性が見出され、また、常在譚と同様に女性に対する現世救済の構想が設定されていることが捉えられる。そうすると、政子譚における仏教的な性格の表れは、先行研究が指摘する、頼朝の政権成立という主題を支えると同時に、政子譚の女人救済の構想を通して、物語の享受者を神仏に結縁させ、仏道へと導こうとしている物語の意図を示すものと考えられる。

第八章では、『義経記』の静譚における夫と子に関する苦悩の様相と心情変化に着目した。また、現世では苦悩を克服できず諦観するが最終的に往生を遂げた、という諦観を起因とする道心の様相を考察した。先行研究では、物語が史実を改変して舞の場面と子供が殺される場面の順序を入れ替え、子供に関する苦悩を中心に置いていることが指摘されている。しかし、舞の場面前後の苦悩の様相と、特に、舞の場面における詠み変えた歌詞を考察した結果、物語は静が子供を失った苦悩を強調するのではなく、むしろ、夫との別れによる悲哀を重視していることが明らかになった。さらに、舞の場面は静の心情の転換点としても機能していることを指摘した。舞の場面以前は、愛する者との生別・死別に苦しみつつも悲哀を受け止め、夫との再会および夫の願いである頼朝との和解に対する願望を持っている。しかし、舞の場面においては、苦悩をもたらされた張本人たる頼朝に圧力をかけられたことにより、恨みが静の心に湧いてきて、さらに、以前から持ち続けていた願望を失って前途を悲観する。舞の場面はこのように頼朝との不和を積極的に描き出すことから見ると、物語の展開において静自身の憂き身を描写するのみならず、義経の悲劇を、静が権力者にもたらした悲痛を通して打ち出そうとしている物語の意図も窺えた。

以上、八人の女性の苦悩の様相を見てきたが、中世軍記物語は恵まれない境遇、自らの行動への後悔の念などの女性の苦悩を多様に描いている。しかし、従来の研究が、軍記物語に登場する彼女たちの苦悩の中で最も注目してきたのは、愛別離苦である。本論文で挙げた女性は全

員、戦乱、あるいは、所領争いで夫、子と生別、死別して悲嘆に暮れる点で共通している。また、夫の願望を成就させたい、夫、子を謀反や戦後処理による罪から救いたいという思い、親孝行を尽くすことと愛する者と離別することの葛藤なども、彼女たちの苦悩の原因となっており、女性の主な苦悩は親、夫、子供と関わっていることが明らかである。ここに、物語は三従の身により自由のない女性の存在を、女性登場人物の憂き身に投影していることが窺えた。

このように、物語は親、夫、子供のことを女性の苦悩の原因として設定しており、戦乱の渦に巻き込まれる女性の悲劇を表している。また、そういった親子、夫婦の恩愛を通じて、愛する者を救う・支える役割を彼女たちに与えて、苦悩の克服の様相を提示している。亡き愛する者の後世を弔う、愛する者の無事のために神仏に祈願する、つまり、女性が愛する者のための現世・来世救済を求めることは、女性全員の記述に見られ、一般的な苦悩の克服の様相と言える。また、救済へと展開する過程において、自らの家の悪行を滅亡の原因として認識すること、不孝の罪を犯さず愛別離苦に直面することなどの行動を取っている女性も見られる。もちろん、悪行、不孝の罪に対する女性の意識は、彼女たちそれぞれの特徴を示すものでありながらも、周囲の人々、神仏の同情心を生み出し、救済へと導くものとして機能していることが窺われる。よって、神仏に対する信心はもちろん、女性たち自身の恩恵を受ける性質も、苦悩を克服させる要因と見做すことができる。このような神仏に対する信心、女性自身の性質という要素をもって、愛する者のために様々な役割を果たした結果、愛する者が救われたと同時に、彼女たち自身も苦悩を克服できた。その意味で、愛する者に対する救済は彼らのみならず、女性たちにも及んでいると捉えられる。

以上のように、八人の女性それぞれが愛する者の救済のために様々な役割を与えられていることを見てきた。では、彼女たち自身の臨終の時に、後世救済はどのように設定されているのか。本論文で挙げた八人の女性の中で、女人往生の構想が設定されるのは曽我兄弟の母、大磯の虎、静御前の三人の女性である。兄弟の母は往生の場面において、子供の死による悲哀を翻し、往生を遂げた。一方、大磯の虎は愛執を切り離すことができないにもかかわらず、そのまま往生を遂げた。静は子の死と夫との離別によって人生を諦観しつつ、仏道に入り最終的に往生を遂げた。こうして見ると、彼女たちが往生の前に悲哀を翻すことができるか否かということには相違点があるものの、愛する者に関する苦悩が、菩提心を起こす要因として設定されていることで共通している。このように、物語は愛する者に関する苦悩、それによ

る妄念を、彼女たちの往生の妨げとしておらず、むしろ、仏道に入らせる動機として、恩愛による苦悩を女性の救済と結びつけていることが窺えた。

以上、八人の女性の記述を通して、親子、夫婦の恩愛を、女性の苦悩および救済の様相と関連づけようとしている中世軍記物語の姿勢を考察してきた。ここから、親子、夫婦の恩愛は女性の苦悩の原因ではあるが、恩愛の情そのものこそが苦悩の克服の核となって、愛する者と彼女たち自身の現世・来世救済をもたらすものであると示そうとしている物語の意図が窺われる。

中世軍記物語における女性の苦悩と救済の様相を探究するにあたって、本論文が取り上げた武将の妻たちの他、天皇の中宮、白拍子など他の地位や境遇が異なる女性も考察する必要がある。また、同じ武将の妻であるが、夫の死後、彼女たちのように生き延びるのではなく、愛する者との再会を願って入水する場合は、苦悩の克服の様相としてどのように捉えられるのかということも重要な問題点である。このような問題意識のもとに、今後も女性に対する救済の研究を進めたい。

初出一覧

第一章…「延慶本『平家物語』における二位殿・平時子―苦悩の様相と平家一門の後世救済に対する役割―」（『語文』九七、大阪大学国語国文学会、二〇一一年十二月）

第二章…第二三三回　大阪大学古代中世文学研究会（二〇一一年十一月二十三日）における口頭発表「延慶本『平家物語』の平重衡をめぐる女性たち―再会・出会いと重衡救済―」に基づく。

第三章…「延慶本『平家物語』における平維盛北の方―愛する者を救済する・愛する者に救済される存在―」（『詞林』五二、大阪大学古代中世文学研究会、二〇一二年十月）

第四章…「『平治物語』における常葉―母子救済の様相をめぐって―」（『語文』一〇一、大阪大学国語国文学会、二〇一三年十二月）

第五章…第二四〇回　大阪大学古代中世文学研究会（二〇一二年六月三十日）における口頭発表「真名本『曽我物語』における曽我兄弟の母―出家と女人救済の様相―」に基づく。

第六章…「真名本『曽我物語』における大磯の虎―苦悩の克服と愛執の様相―」（『詞林』四九、大阪大学古代中世文学研究会、二〇一一年四月）

第七章…「真名本『曽我物語』における北条政子の説話―苦悩の克服の様相―」（『日本研究論集』二、チュラーロンコーン大学・大阪大学、二〇一〇年十月）

第八章…第二四三回　大阪大学古代中世文学研究会（二〇一三年一月二十七日）における口頭発表「『義経記』における静―子供の死と女人往生の様相をめぐって―」に基づく。

※本論文収録に際し、いずれの論考にも加筆、修正を施した。